

Title	知見孔子家語諸本提要(一)
Sub Title	
Author	山城, 喜憲(Yamashiro, Yoshiharu)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1984
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.21 (1984.) ,p.187- 269
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	太田次男教授退職記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000021-0187

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

知見孔子家語諸本提要 (一)

山城喜憲

緒言

孔子家語は旧来、孔子の言行及び門人弟子の経歴を伝える経翼の書として、経部論語に亜いで著録されたが、四庫提要が子部儒家類劈頭に錯いてより、爾来諸書目それに従っている。蓋し、本書を魏王肅の偽撰であろうとする久稽が公定されたことに依る。

家語の由来、体裁、価値等についての一般解題は、服部宇之吉「孔子家語解題」(漢文大系第二十卷)、林泰輔「孔子家語解題」(有朋堂漢文叢書)、武内義雄「読家語雜識」(全集第四卷)、長沢規矩也「解題」(和刻本諸子大成第一輯)、並に四庫提要等

を参照願ひ、ここでは諸本の伝系・伝流に就ての梗概を記し序に替へたい。

「漢書藝文志」六藝略論語類に、「孔子家語二十七卷」が著録され、劉向校定本の存したことは疑いを容れぬが、唐の顔師古が「非今所有家語」と注した如く、唐代既に伝を軼しており、後世畢に再現すること無く亡絶した。

「隋書經籍志」経部論語類には「孔子家語二十一卷 王肅解」と見え、「梁有当家語二卷、魏博士張融撰、亡」と注記がある。王肅は、後漢の大儒鄭玄の学が行なわれて、当代なお儼然揺ぎなきに敢然と反駁した儒宗であり、異見の論拠を顕示せんが為に大戴礼・礼記・説苑等諸書を綴輯して家語を偽撰したと看做

すのが現今の定見となっている。隋志著録本はこの王肅偽撰の本であり、張融の当家語二巻は、鄭学を擁護し王肅家語を論難した著述とされている。

「旧唐書経籍志」「新唐書藝文志」共に経録論語類に「王肅注孔子家語十巻」を著録する（旧唐志或作「王肅撰」）。爾来、この王肅注十巻本が伝流し、現存する諸伝本は悉くこの本に淵源しておる。

現存する最古の伝本は、六朝写とされる敦煌写本零巻（存郊問第二十九・五刑解第卅）で、或はこれは隋志著録の二十一巻本を伝承するものと見做す可きか、零巻故詳らかにしない。次いで、抜粹節略本であるが「群書治要」巻第十収所本が挙げられ、我国に遺存する金沢文庫本鎌倉抄本は、唐抄本の旧を存するものとして注目される。

宋刊本の現存するものは知られていない。しかしながら、宋初編纂の「太平御覽」に衆多引用され、「崇文総目」に著録をみ、陸游に「跋京本家語」（放翁題跋卷三）の一文があり、朱子は「論語」「中庸」の注に屢々此書を援用し、王柏は「家語考」（魯齋王文憲公文集卷九雜著）を著して王肅偽撰のことを論断しておる等考え合せれば、本書は隋唐五代宋朝と湮滅することなく

よくその伝襲を保ち得たものと言える。事実、「景定建康志」巻三三文籍志には監本家語が著録されており、明清の間、覆宋、翻宋本が刊行されておることをみても、宋代刊本は一本のみに止まらないと承知せられる。

元の延祐泰定年間、王広謀が正文を刪削し、簡易な句解を成してより、この軽便なる標注句解本が元明兩朝を通じて弘通し、王肅注本は永らく伝を佚するに迄る。

新刊標題孔子家語句解六巻 元泰定二年崇文書塾刊本
が伝存し、明に入り、

標題句解孔子家語三巻 「明前期」刊十一行廿字本
同 「明」刊九行十五字本
等が刊行された。

明弘治正徳年間、何孟春は通行本の不備なるを遺憾、人意に満たないとして、王広謀句解本に拠りつつも、史記索隠等に引く家語の佚文を蒐めて補綴し、礼記・説苑・史記・荀子等の類文を参互檢校し、明代空疎な評釈本が多い中では異例とも言える綿密精細なる箋注を成し、家語学の新生面を開いたが、なお王肅注本は求めても見るを獲なかつたと云う。

孔子家語八巻 明正徳一六年張公瑞刊本

同 明嘉靖二年高應禎刊本

同 明末永明書院刊本

等が出ているが、伝存本は尠く流布通行するには至っていない。嘉靖に入り、久しく伝を失っていた王肅注一〇卷本が再び出現した。

孔子家語一〇卷 明嘉靖三三年黃魯曾翻南宋刊本

であるが、脱落錯簡が多く、黃魯曾自ら「僅得十之七八」と云う如く、猶、宋旧を伝える完本とはいえない。

やや後れて、王鏊が書市中に得た宋本に依るといふ王肅注本、

同 明隆慶中陸治校刊本

が出たが「病在顛倒」(毛晋、汲古閣板孔子家語跋)、「劣」(四庫簡明目録標注)と評価は芳しくない。

万曆中、同じく王鏊所得宋本に依ると謳い、

孔聖家語図一 一卷 吳嘉謨集校明万曆一七年序刊本

が出た。伝存本が比較的多く、流布したようであるが、王肅注を部分的に残しているもの、王広謀句解・吳嘉謨自注を雜取混淆し、孔子の事蹟を描いた図像を巻端に附す等、宋本の旧姿は幾ど止めていない。

家語一〇卷 錢受益校明末刊本

は、何棠等の標注を加えてはいるが、本文テキストの上からは吳嘉謨集校本の注を取捨しただけの同系同種本と言える。

これより明末に及んでは、

孔子家語一〇卷 金蟠・葛鼎校明末永懷堂刊本

の如き黃魯曾翻南宋刊本に依る王肅注本も刊行されているが、流布した本は幾どが王広謀句解本で、当代名士の名を譌稱した坊刻俗本が横行する。

新鐫台閣清譎補註孔子家語五卷 題鄒德溥補注〔明万曆〕

中〔建陽〕喬山堂劉龍田刊本

鼎刻楊先生註釈孔聖家語五卷首一卷 題楊守勤注 明万曆

三四年〔建陽〕存德堂陳氏刊本

新鐫何初張先生註釈孔子家語雋五卷首一卷 題張鼎註釈李

光緒校閱 明万曆中〔建陽〕蕭世熙刊本

新鐫何初張先生註釈孔子家語宗五卷首一卷 題張鼎註釈李

緒校閱〔明末〕熊秉宏刊本

新刻註釈孔子家語衡二卷首一卷 題周宗建注〔明末〕〔建

陽〕〔喬山堂〕劉大易刊本

新刻註釈孔子家語憲四卷首一卷 題陳際泰注〔明末〕劉舜

臣刊本

等が管見に入る。他に、

鼎鍍二翰林校正句解評釈孔子家語正印三卷首一卷 題顧錫

疇注孔貞運評 明天啓三年序怡慶堂余完初刊本

新刻張天如太史評釈孔聖家語五卷 題張溥注 〔明末〕熊氏

刊本

があり、少しく補綴され、新たに附加された評注も散見するが同じく俗書の類である。

明代最晩期に及び、汲古閣毛晋は、宋蜀大字本を呉興の賈人より購得し、首闕を他本で補い翻刻刊行した。当代、王肅注の旧姿を保つ伝本幾ど湮滅し、黄魯曾の翻南宋刊本も罕伝で、この汲古閣刊本の出現によって王肅注本の伝系は後代に繋かれ、毛晋の復旧繼絶の功業は甚大であると言える。四庫全書はこの汲古閣本を採録し、清朝一代、此本を善本として重印或は覆刻乃至翻刻が相継いでいる。

孔氏家語一〇卷 〔明末〕〔常熟〕毛氏汲古閣刊本

又 〔清〕呉郡宝翰楼印本

同 〔清〕刊 覆宝翰楼印本

同 清乾隆八年聚錦堂覆刻本

同 清乾隆四六年書業堂〔趙氏〕翻刻本

同 清道光一五年至宝堂翻刻本

同 清光緒六年掃葉山房覆書業堂刊本

同四卷 清光緒九年輔仁堂翻刻本

等、管見に入れるものである。毛晋は後に又、別途に宋蜀大字本を得、前得宋本の首闕と新収本の尾闕を参互補鈔し、両宋本を宝蔵したが、一本は錢謙益の手に渡って焼失、首闕補鈔の一本のみ転々諸家の架蔵を経て、清末、劉世珩の儲有に帰し、劉氏は、それを影刻し札記一卷を附して、宋本の真面目を世に伝えた。

孔氏家語一〇卷附札記一卷 清光緒二八年貴池劉世珩刊覆

汲古閣旧藏南宋蜀大字本 玉海堂景宋叢書之一

である。惜むらくは、この底本となった宋本は矢張焼亡して見存しない。此の本は現存諸本の中でも最善本と看做してよく、清末より民国にかけ縷々影印乃至は翻印され流布通行している。孔子家語の日本への伝来が何時に始原するか、その年代を確定する史料を未だ見出さないが、「日本国見在書目録」論語家に「孔子家語廿一卷王肅撰 家語抄一卷」と隋志同様に廿一卷王肅本を著録している。もっとも「群書治要」所収の王肅注節略本を考慮に入れるれば、その伝来は遠く奈良朝に遡ると言える。

平安鎌倉期を通じて博士家公卿学僧の間で、王肅注家語が伝

承されたと考えられる可きであろうが、それを証すべき古鈔本は、

見在書目録の「家語抄一卷」とも未だ発見されていない。ただ、

嘉元四（一三〇六）年写釈真弁撰性靈集略注一〇卷（慶應義塾

図書館蔵）に孔子家語が引用され、鎌倉鈔本孝経正宗分聞書

（金沢文庫蔵）に「門徒三千者孔子ノ弟子也（中略）孔子ノ家語

ト云文ニハ七十二人ト見タリ此文ハ孔子門弟等之作也」と見え

（阿部隆一 金沢文庫所蔵
鎌倉鈔本「孝経正宗分聞書」考 金沢文庫研究

通巻九五号）、伝承本のなお存していたことは推知せられる。

室町期に元王広謀句解本である朝鮮古刊本が舶載されたよう

で、その臨写本が足利学校遺蹟図書館に見存している。

新刊標題孔子家語句解六卷附新刊素王事紀一卷 室町写

臨写朝鮮太宗二（一四〇二）年刊本 永正一二（一五一

五）年上杉憲房寄進本

で所拠の朝鮮刊本は元版の覆刻にかかる。室町近世初にかけて、

道俗の間に用いられたのはこの句解本であったようで、慶長四

（一五九九）年、徳川家康が足利学校前席主三要素元佶に命じ伏

見円光寺に於て刊行した古活字版はやはり句解本であり、朝鮮

より将来した乙亥字古活字版に拠ったものようである。

標題句解孔子家語三卷附新刊素王事紀・聖朝通制孔子廟祀

各一卷 慶長四年円光寺釈三要素刊古活字版

この伏見版は、我国に於ける家語刊行の権輿であり、一般への
流布を促した点で文化史の面から注目される。

元和年間には王肅注足本の古活字版が印行され、寛永には訓
点を附し、少しく誤脱を訂してその覆刻本が刊行された。

孔子家語一〇卷（元和）刊古活字版

同 寛永一五（一六三八）年京風月宗智覆（元和）古活字刊本

この王肅注本が出現したことにより、先の慶長刊古活字版はテ
キストとしての必要性を失い、近世を通じて殆ど顧みられるこ
とはなかった。元和古活字版の底本は、テキストの優秀性から

察て、我国に古く舶載され当時なお伝存していたと思われる宋

刻本と推定したい。只、刊行の経緯事情は明らかでなく、刊地

刊者ともに確定出来ない。我国に早くよりこの善本が流布した

ことは思えば稀有なことである。元和寛永の時代は、中国では

万曆末より天啓崇禎に亘る明末に当り、当時通行していたのは

句解本の系統を承ける坊刻俗本であり王肅注は幾ど湮滅の状態

にあった。毛晉が宋刻を得て翻刻公刊したことにより、漸く王

肅注が再び世に流伝することとなるが、その汲古閣刊本と我が

寛永覆刊本とは、刊行の時をほぼ同じくしている。

この善本の弘通が江戸中期以後の家語学の隆盛を誘発し、次に列記する如く数多の著述成果を遺したことは注目に値する。

孔子家語〔補注〕一〇巻 岡〔田〕龍州〔白駒〕撰 寛保元（一七四一）年刊（京 風月堂莊左衛門）

孔子家語〔増注〕一〇巻 太宰春台〔純〕撰 寛保二（一七四

二）年刊（江戸 嵩山房小林新兵衛）

山子孔子家語旁注不分巻 〔片山兼山〕撰 写 未刊

孔子家語〔標箋〕一〇巻首一卷 千葉芸閣〔玄之〕撰 寛政元（一七八九）年刊（江戸 嵩山房小林新兵衛）

孔子家語〔標注〕二一巻首一卷 西山〔元文〕〔元〕撰 写（自筆） 未刊

孔子家語考二巻 〔戸〕崎〔淡淵〕〔允明〕撰 写 未刊

孔子家語〔註〕一〇巻 冢田〔大峯〕〔虎〕撰 林考祥校 寛政

四（一七九二）年刊（江戸 嵩山房小林新兵衛）

孔子家語合注諺解一〇巻 高田鏡湖〔彪〕撰 寛政六（一七九

四）年刊（江戸 嵩山房小林新兵衛）

読孔子家語不分巻 撰者不詳 文政写 未刊

孔子家語〔箋注〕一〇巻 伴〔東山〕〔徙義〕撰 写 未刊

王肅註家語後案一〇巻首一卷 赤城〔彩霞〕〔世謙〕撰 天保写

未刊

孔子家語考 西島〔蘭溪〕〔長孫〕撰 写

孔子家語標識 〔東条一堂〕撰 嘉永五（一八五二）年写

未刊

孔子家語〔校註〕一〇巻 小畑詩山〔行簡〕撰 写 未刊

読家語二巻 西島〔睡菴〕〔俊佐〕撰 写 未刊

本稿は三四年來継続している漢籍子部の書誌調査により得た知見の一端である。家語の伝本は少しとせず、管見に入れるもの、固よりその全てに及ぶものではないが、国内所蔵の唐本に限るならば、その八九を著録し得たと信ずる。国外儲蔵本に就ては实地に調査する機会を得ず、諸目録類或は副本書影等を勘案して、同版同種本と看做される箇所にて附記言及したが、「孔子家語三巻 明嘉靖己亥（一八八）湯克寛南京刊藍印本」（北京図書館蔵二冊）、或は「同一〇巻 魏王肅注 明万曆間新安吳勉学刊本」（国立中央図書館〔台湾〕蔵六冊、北京図書館蔵二冊）の如き、実物調査無くしては本文の系統を定め得ず、著録出来ない本が二三はある。遺漏或は不備訛謬なお少からずと

案ぜられる。大方の御指正を希うとともに、爾後の継続調査の懸案として、後考を竣ちたい。

伝本は上述の如く、大率、王肅注本、王広謀句解本、何孟春注本に分類される。以下、諸本間の伝系を考慮しこの三系統に分ち解題を記すが、まず、目録の定式に従い、無注本を掲出する。無注本は、後掲の有注本より正文のみを抽刻したもので、王肅注以前の旧形を伝えるものではない点、御了解されたい。

○無注本

明刊本

未見。「増訂四庫簡明目錄標注」続録に、「明刊無注本、半葉九行、行二十字」と。「羣碧樓善本書録」卷三明刻本に、「孔子家語十卷二冊、無注、明刻本、前有漢序・孔安国伝略・魏王肅註序」と著録さる。

尚、「天祿琳琅書目」後篇卷五に「家語^{二函}_{十三冊}、篇目見前、前有孔安国序、標曰、漢集家語序、又孔安国伝略、又王肅序、標曰、魏注家語序、無註」と著録されたる一本も同種本と思われるが、但、元人貢師泰、明初人王行の印記を有すと言う。此目の解題を文字通り信ずることは出来ず、此の著録本を直ちに元

以前の刊本とは看做し得ない。

並に寡聞にして現儲蔵するところを知らない。

孔子家語 一〇卷 題魏王肅撰 清光緒元(一八七

五)年刊(湖北崇文書局) 子書百家第一・二冊所収

原題簽「孔子家語」、書扉「孔子家語」(篆文)と題す。扉裏に「光緒紀元夏月湖／北崇文書局開雕」と木記がある。首に「子書百家総目」及び「孔子家語目錄」を冠す。本文巻頭「孔子家語卷一／^(低二格)相魯第一」と題し本文に入る。尾題は首題に同じ。但、巻数下に「終」字あり。四周双辺(一八・五×一三・八糎)、有界、十二行、行廿四字。ごく稀に、音注等の挾注あり。版心小黒口双黒魚尾、「卷幾 孔子家語 (丁付)」。篇内章節毎に改行。王肅原序・後序並に無し。

本版は、巻立篇次、或は字句の異同の一致からみるに、「明末」刊錢受益校家語一〇卷(24頁参照)に拠り、その正文のみを抽刻したものである。

同 民国五二(一九六三)年刊(台北 古今文化出版

社) 影印清光緒元年湖北崇文書局刊子書百家本

百子全書(一名「子書百家」)所収

同 民国八（一九一九）年刊（上海 掃葉山房） 石印
百子全書所収

以上二版未見。「叢書総目続編」「中国叢書綜録」に拠る。

同 民国六三（一九七四）年刊（台北 新興書局） 影
印〔清末民国初年刊石印本〕 筆記小説大観五編所
収 断句本

○王肅注本

孔子家語 存郊問第廿九・五刑解第卅 魏王〔肅〕注

〔六朝〕写 敦煌写本（斯一八九一号）

王重民「敦煌古籍叙録」卷三著録。郊問第二九の末略四分の一、「喪者不敢／〔哭〕」より篇末に至る十二行及び五刑解第卅全六十一行を存する零卷。今、黄永武主編「敦煌宝蔵」第二輯（台北 新文豊出版社 民国七〇年）所載の写真版に拠る。五刑解首、「五刑解 孔子家語 王氏注」と題し、末行下に「家語卷第十」と題さる。有界、毎行十七字内外不等、注小字双行。頻出する「民」字に欠画がみられないことから王重民は六朝写本とする。また、王重民は尾題の「家語卷第十」の「十」字は「七」字の誤りとし分巻の次第は今本即ち、王肅注十卷本と

同じだとするが断言するには不安が残る。「隋書経籍志」論語類に「孔子家語二十一卷王肅解」と、また「日本国見在書目録」論語家に「孔子家語廿一卷^{王肅撰}」と著録されており、隋唐以前今本と分巻を異にする二十一卷本が存したことは疑いなく、本鈔本を郊問・五刑解両篇を卷十に編次せる二十一卷本と看做しても支障はないと考える。もっとも二十一卷本足本の出現を俟たねば確定は出来ない。

本鈔本は二篇足らずを存する零卷ではあるが、通行の覆宋刊本等に比し王肅注本の原型を最も良く伝えるもので、通行本の誤脱衍文を訂正し得るところが多い。以下例示すれば、本鈔本郊問第二行「清路行者蹕止」、覆汲古閣旧藏宋本「蹕」を「畢」に、「元和」古活字版・翻南宋刊本（四部叢刊本に依る、以下同じ）共に「必」に誤る。同第三行「蹕止」下割注、覆汲古閣旧藏宋本・「元和」古活字版・翻南宋刊本並に「清路以新土無復行之」とするが、本鈔「清路以新土〔覆〕故土〔上〕也蹕止無復行也」と作り通行本に「〔覆〕故土〔上〕也蹕止」の七字の脱落が有ることを証し得る。同第一〇行「大饗」下割注、「大饗袷祭先王也」、覆汲古閣旧藏宋本、「先王」を「大王」に作り「也」字を脱す、「元和」古活字版・翻南宋刊本共に「天王」に

作り同じく「也」字無し。同五刑解第五・六行「無度則小者偷
隨奢侈靡各不知節」、覆汲古閣旧蔵宋本、「隨奢」を「惰大者」
に作り、〔元和〕古活字版・翻南宋刊本共に「盜大者」と作る。
此れ本鈔の誤写とは遽に決し難い。同第九行、「不仁生於喪祭之
礼不明」、覆汲古閣旧蔵宋本、下「不」を「也」に誤り、〔元和〕
古活字版・翻南宋刊本共に「不」字を脱し並に、「明」字を下句
に属け、字義分明さを欠く。同第一〇行、「能致仁愛則服喪思
暮」、覆汲古閣旧蔵宋本・〔元和〕古活字版共に「暮」を「慕」
に作り、翻南宋刊本「致」を「教」に誤り、「服」を脱し又「暮」
は「慕」に作る。同第一三・四行、「試上者生於義不明夫義所
以別貴賤明尊卑」、覆汲古閣旧蔵宋本・〔元和〕古活字版・翻南
宋刊本並に「義不明」を「不義」に作り、「夫」字を脱す、ま
た「尊卑」下に「也」字有り。同第一四行、「貴賤有列尊卑有
序」、覆汲古閣旧蔵宋本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本並に、
「列」を「別」に作る。同第一六・七行、「雖有試上之獄而無陷
刑之民」、覆汲古閣旧蔵宋本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本共
に、「試」を「殺」に作り、覆汲古閣旧蔵宋本は「陷刑之民」
を「陷民之刑」に作る。同第一九行、「所以明長幼之序而致敬
讓也」、覆汲古閣旧蔵宋本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本共に

「致」を「崇」に作る。同第二二行、「婚礼聘享者」、覆汲古閣
旧蔵宋本、「礼」を「姻」に作り、翻南宋刊本、「婚」字を脱す。
同第三三・四行、「三皇五帝之所以化民者如此雖有刑不用不亦
可乎」、覆汲古閣旧蔵宋本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本並に
「以」字を脱し、「刑不用」を〔元和〕古活字版は「五刑之不用」
に作り、覆汲古閣旧蔵宋本・翻南宋刊本は共に「五刑之用」に
誤り、文意相反す。同第三七行、「誣鬼神者罪及二世」、太平御
覽卷六四一刑法部七罪引く家語、本鈔と同じ、覆汲古閣旧蔵宋
本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本並に「誣」を「謀」に作る。
同三七・八行、「手煞人者罪止其身」、太平御覽卷六四一引く家
語・覆汲古閣旧蔵宋本・〔元和〕古活字版並に本鈔と同じ、翻
南宋刊本、「止」を「及」に作る。同第三九行、「先王之制」、群
書治要卷一〇孔子家語（鎌倉鈔本の複製本に依る、以下同じ）・
覆汲古閣旧蔵宋本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本並に「先王制
法」に作る。同第四〇・四一行、「大夫之犯罪不可加以刑」、覆
汲古閣旧蔵宋本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本、「之」字無く、
同三本並に群書治要、「加以」を「以加」に作る（但、治要は
「加」字下に「以」字有り、見せ消さる）。同第四一行、「不可
治以礼乎」、覆汲古閣旧蔵宋本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本、

「治以礼」を「以治於礼」に作り、群書治要は「治」字下の「以」を見せ消ちにし、「可治」間右傍に「以」字を補う。同第四二・三行、「治君子以礼義御其心所以厲之以廉耻之節也」、群書治要は「厲」字を見せ消し、右傍に「厲」と書す。覆汲古閣旧藏宋本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本「義」字を脱し、「厲」を「厲」に誤る。同第四四行、「不謂之不廉汗穢謂簠簋不飭」、覆汲古閣旧藏宋本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本並に下「謂」を「曰」に作り、「穢曰」の間に「而退放則」四字を増入す。群書治要、「不謂之不廉汗穢」七字無く下「謂」を「則曰」に作る。同第四八・九行、「下官不識」下割注「識宜為職」、群書治要・覆汲古閣旧藏宋本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本並に此の注文無く、正文の「識」字を「職」或は「職」に改む。同第四九行注文「下官不称其職不斥其身」、群書治要、「称」を「務」に作り覆汲古閣旧藏宋本「称其」の間に「務」字を、〔元和〕古活字版・翻南宋刊本は「移」字を増入す。同第五三行、「聞有譴發」、太平御覽卷六四一引く家語は本鈔に同じ、群書治要は「聞有」二字を脱し、覆汲古閣旧藏宋本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本は「有」を「而」に作る。同行「譴發」下の注文「譴讓也」、太平御覽卷六四一は本鈔に同じ、群書治要は此の注文を脱し、覆汲古閣

旧藏宋本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本は「譴讓」の間に「譴」字を衍す。同第五六・七行、「不使人掉引而刑煞之也」、群書治要・太平御覽卷六四一・覆汲古閣旧藏宋本・〔元和〕古活字版並に本鈔に同じく、翻南宋刊本「之也」を脱し「刑殺」下に「掉昨没反」なる音注を増入す。同第五七・八行、「是以刑不上大夫」、群書治要、本鈔に同じく、覆汲古閣旧藏宋本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本並に「是」字を脱す。同第五八行、「大夫亦不失其罪德教使然也」、群書治要「德」字を見せ消し右に「者」字を書す。覆汲古閣旧藏宋本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本並に「德」を「者」に誤る。同第六〇・六一行、「求末之聞也請退而記之也」、覆汲古閣旧藏宋本・〔元和〕古活字版・翻南宋刊本並に「也請」及び末の「也」を脱す。以上の数例により、宋版系通行本の誤脱なお少なしとしないこと、本鈔本の勝れたるを証し得よう。

孔氏家語 一〇卷附札記一卷〔魏〕王肅注〔札記〕清

劉世珩撰 清光緒二八（一九〇二）年刊（貴池劉世

珩）覆汲古閣旧藏南宋蜀大字刊本 玉海堂景宋叢

書之一

書扉、「宋蜀本／孔子家語十卷」と題され、裏に「玉海堂

景宋／叢書之一光／緒二十有四年／太歲在戊戌／二月貴池劉世

珩以家藏汲／古閣旧本付／刻于武昌黃／岡陶子霖鑄」なる横

長方木記がある。首に「孔子家語序」（次行低九格「王 肅

課」と題さる）、があり、末行次行低一格小字双行写刻体で「家

語序藏宋本欠從汲古閣本補入属寿州孫稚筌伝準／写并札記一卷

（光緒二十八年）壬寅正月成 世珩記（印）」と刻さる。目録無く、卷一〇末に

「後序」を配す。本文巻頭、「孔氏家語卷第一（卷一のみ下方に

「宋本」へ円、「甲」へ方、「毛氏／子晋」へ方」の原印三顆を影

刻す）／（低八格）王 肅 注／相魯第一」と題して本文に入る。

尾題は首題程式に同じ。只、卷八のみ「家語卷第八」と題す。

尚、終尾題下方に「毛氏／子晋」（方）、「東坡／居士」（方、陰

刻、偽印とさる）の両印記が刻され、裏葉末行下方に「武昌三

仏閣陶子麟刊」と。

左右双辺（二三・四×一七・四纏）、有界、九行、行十七字、

注小字双行、行廿三字内外不等。版心細黒口魚尾無く横線で五

区画に分かつ、「家語第幾（丁付）」。卷一〇後に「明」崇禎

丙子（九八一六三六）年重九隱湖毛晋識、及び「汲古後人毛

辰謹識」の題識両則がある。次に、「孔子家語札記」一卷を附

し、首に一格を低し撰者序引（「光緒」庚子（二六八一九〇〇）

年）閏月貴池劉世珩識）あり。札記尾題後に「光緒二十二（一

八九六）年嘉平貴池劉世珩識」及び「丁酉（光緒二三八一八九

七）年）九月葱石又記」の劉氏両題識が刻さる（並に写刻）。

本書の各卷篇立の次第は次の如くである。

卷第一 相魯第一 始誅第二 王言解第三

大昏解第四 儒行解第五 問礼第六

五儀解第七

卷第二 觀思第八 三恕第九 好生第十

卷第三 觀周第十一 弟子行第十二 賢君第十三

弁政第十四

卷第四 六本第十五 弁物第十六 哀公問政第十七

卷第五 顔回第十八 子路初見第十九 在厄第二十

入官第二十一 困誓第二十二 五帝德第二十三

卷第六 五帝第二十四 執轡第二十五 本命解第二十六

論礼第二十七

卷第七 觀鄉射第二十八 郊問第二十九 五刑解第三十

刑政第三十一 礼運第三十二

卷第八 冠頌第三十三 廟制第三十四 弁樂解第三十五

問玉第三十六 屈節解第三十七

卷第九 七十二弟子解第三十八 本姓解第三十九

終記解第四十 正論解第四十一

卷第十 曲孔子貢問第四十二 子貢問第四十三

公西赤問第四十四 後序

玄眩眩殷貞徵讓桓溝構慎字の末画を欠くが校格ではない。

札記首の劉氏序引に「光緒丁酉、世珩得宋本孔子家語於江甯、桐城蕭氏穆旧蔵本。後有毛子普及斧季兩跋、蓋汲古閣物也。古

香藹然世所難觀。屬江陵喻茂才在窮影写、黃岡陶子麟刻之」

(筆者句点)とある如く、本版は蕭穆より得た汲古閣旧蔵の宋本を喻

茂才、陶子麟(当時の良工であろう)に委嘱し影写上木したものである。刊行の年は、扉裏の木記に従えば、光緒二四年であるが、にわかには決定し難い。即ち、此の序引の年記は、光緒二六年であり、王肅序後の世珩識語は、同二八年である。或は、二四年に、札記及び、王肅序を未載のまま、公刊したものとも考えられるが、未だ、かかる伝本は管見に入らない。従来諸書目、二四年を刊年としているが、今、王肅序後世珩識語の年紀をとり、二八年を刊年とする。

本版の底本は汲古閣旧蔵宋本兩帙の一である。崇禎九年の毛

晋題識に「数年前吳興賈人持一編售余。猶是蜀本大字宋版。亟

付剞劂。惜二卷十六葉以前皆已蠹蝕、未得為完書。今年秋南都

應試、而旋及泉於惠山之下。偶登酒家蔣氏樓頭、見殘書三冊。

亦大字宋槧王注。恰是前半部。驚喜歸、倩善書者、用宣紙補

抄、遂無遺憾。」(筆者句点)と、また毛扆題識に「先君当年初得此書

也。欠二卷十六葉以前。崇禎丙子秋從錫山酒家、見殘書幾冊、

乃其覆湖之餘也。亦係宋槧。其八卷至十已供酒工之用、而前半

尚全。喜而購歸倩善書者、互為補治、儼然雙璧矣。後酒家本為錢

宗伯所奪、亦燼于絳雲之火、而此本獨存。扆又借得小字宋本參

校、至六本篇見第、小字本作良葉苦于口而利于病、此本独作葉

酒。及說塩鉄論見第亦同、益証此本之善。蘇文忠所謂蜀本大字、

最為善本」とある。後述する汲古閣刊本末の毛晋跋語に「忽丁

卯秋、吳興賈人持一編至。迺北宋板王肅注本子。大書深刻、与今

本迥異。惜二卷十六葉已前、皆已蠹蝕、因復向先聖、焚香叩首、

願窺全豹。幸己卯春、從錫山酒家、復觀一函。冠冕巋然、亦宋

刻王氏注也。所逸者僅末二卷。余不覺合掌頓足。急倩能書者、

一補其首、一補其尾。二冊儼然雙璧矣。縱未必夫子旧堂壁中故

物、已不失王肅本注矣。三百年割裂顛倒之紛紛、一旦而垂紳正

笏於夫子廟堂之上矣。是書幸矣、余幸矣。亟公之同好。」とみ

えるのを勘案するに、本版の藍本は毛晉が明天啓七（一六一七）年呉興の賈人より得た卷二第十六葉以前を欠く大字宋刊本を、後年（本書毛晉題識に依れば崇禎九（一六三六）年、汲古閣刊本毛晉跋語に依れば同一二（一六三九）年と矛盾する）錫山酒家蔣氏より購得した別種宋刊王注本に依って鈔補したものである。その本は清末に及び姚士榮の架蔵を経、桐城の蕭穆が儲有するところとなり、光緒二三（一八九七）年蕭氏より劉世珩の蔵に歸した。その間の事情は本書末の劉氏題識に「此書郷先生桐城蕭敬敷穆臧之。有年歲丙申質予戚家得番錢四百。予愛之甚。越歲如直償之乃歸齋中。蕭丈云往歲桐城大旱。友人姚士榮欲售此。調戚族以白米四十石畀之、易得是書。事在咸豐六年丁巳夏（咸豐六年は丙辰に當る。劉氏の誤記か）」（筆者）と記さる。また蕭穆「跋影葉宋槧孔子家語」（敬孚類藁卷五）に「余早年誦孔氏家語、乃毛氏汲古閣刊本。後來稍知考較古書版本、玩毛氏跋尾、知其所拋乃宋蜀槧大字本、竊意原書未必尚在人間。同治初年邑人姚伯厚過予艸堂、行囊有一巨冊。發之乃毛氏旧藏宋蜀槧大字孔氏家語原本也。詢所由来乃友人姚世培家旧藏。今將託售先以末冊毛氏跋文為証。余大喜過望。即以此冊留下、旋至世培家、歸其欲售之資、乃將前四冊攜歸居。然為寒家插架之冠矣。

三十年來遨遊四方、嘗以此書自攜行笥、徧示同人、互為喧伝海内。藏書家莫不知毛氏宋槧孔氏家語今尚在寒家也。光緒乙未秋余以校刊劉海峰先生歷朝詩選、外間諸公助資不給、因与世交貴池劉聚卿觀察世珩相商權、以此書代質得重資以濟聚卿。今欲公諸同好、倩善書者、將原本影写一部、選良工照刊、其表章古籍、宅心仁厚雅意真所罕見也」（筆者）と見え頗る詳細である。一方、王国維、「日本寬永本孔子家語跋」（觀堂別集補遺）に「昔桐城蕭敬孚得此本。乃謂宋刊大字本不足存、以歸貴池劉氏」と見ゆる如く、蕭穆が本書を手放した契機には本版が必ずしも他の宋本系諸本に比し最善とは看做し難いと鑑定した別の事情があったようでもある。

しかしながら此の宋刊本は現存しない。「増訂四庫簡明目録標注」卷九統録に、「傳沅叔云、蕭敬孚藏蜀大字本、後歸劉聚卿、曾得寓目。已影刻行世。戊午（民国七（一九一八）年）秋、聚卿攜之行篋、在浦口客邸被燬。深可痛惜」と。また、汲古閣儲蔵の別の一本、即ち錫山の酒家より得たという宋本は、毛辰題識に依れば錢謙益の絳雲樓に歸し、清順治七（一六五〇）年、同樓の火に遇い焼失した。従って、蜀刊大字本の原姿を髣髴させる本覆宋版は逸失した汲古閣旧藏宋本をほぼ精確に伝えるテ

キストとして注目される。のみならず、他に宋刊本が伝存しない今日、校勘学上、或は伝本系統を考究する上からも殊に重視されねばならない。

上述した如く、本版は卷二第一六葉前と以後とは藍本を異にする。しかしながら、本文行文上或は版式字様の上からみれば、前後の段差は全くみとめ得ず、覆宋と謳うことに少く疑念を懐かざるを得ない。次述するように、殊に注文の体例に於て、前後に顕著な相違がみられテキストの系統がやや異なることは明らかで、嚴密な意味での覆刻本とすれば、形態上に於ても差異が生じることが当然考えられる。底本となった兩宋本が逸失した今、此の疑点を明かす手だてはさし当っては無く、今後、同種宋本の出現することを願ひ後考を俟ちたい。

卷二第一六葉以前は、殊に注文の体例に於て次の点で著しい違いがみられる。一は、注末、往々「○」を冠して音注を附すことで、竹内義雄博士が既に指摘されている（読家語雜識 竹内義雄全集第四卷所収）。一は、一本或は荀子・大戴礼・礼記・韓詩外伝等互見の類文との校合注を含む点である。以下にその校合注を表示する。*印は注文の挿入箇所を示し、印無きは掲出本文語句末尾の附注である。

篇名	本文	注文	卷葉行
始誅	殷湯誅尹諧	一作蠲沐	一5ウ2
同	文王	一作太公	
同	誅潘正	一作潘趾	
同	管仲誅付乙	一作附里	3
同	子産誅史何	一作鄧析	4
同	即廢之	荀子作廢不能以單之 單尽也謂黜削也	6ウ3
同	三尺之限	一作岸	9
王言解	侍夫子之閒也難	大戴礼作得夫子之閒 也難	7才9
大昏解	請少進	一下有教字	12ウ6
儒行解	其居処不過	記作淫侈溢	16ウ8
同	久別則聞流言不信	記有其行本方立義六 字明其所以不信之義	18ウ3
同	義同而進	記將義字屬上	4
同	其交*有如此者	記有友字	
同	儒皆兼而有之	一兼下有此事	9
問礼	宗族会宴	一作醺	20才4
同	器不彫*鏤	一作刻	6
同	夫礼初也*始於飲食	記作礼之初	21才1
五儀解	從物如流不知其所執	荀有五鑿為正心從而 壞云	23ウ3

「謂季桓子曰」下注「桓子平子之子」古活字版、此注、下句「非礼也」の下に在り。

「齊使萊人」下注「哀公六季齊滅萊」古活字版、此注無し。

「鼓諺」下注「諺子紺切」古活字版、此音注無し。

「於神」下注「明誓之神」古活字版、此注無し。

「為懋」下注「懋愆同」古活字版、此注無し。

「熒」字下注「熒聞而惑也○烏迺切」古活字版、此注無し。

「無還」下注「魯大夫名」古活字版、此注、二字下の「対曰」

下に在り「名」を「也」に作る。

「汶陽之田」下注「齊有汶陽田本魯界」古活字版、此注無し。

「齊魯之故」下注「故旧典也」古活字版、此注無し。

「犧象」下注「象似兩切」古活字版、此音注無し。

「不出門」下注「犧象罇名」古活字版、此注「作犧牛及象於其

背為罇」と作る。

「用糝糶也」下注「糝穀之不成者糶草之似穀者言享不備礼也」

古活字版、下六字無し。

「歸所侵魯之四邑及汶陽之田」下注「四邑鄆讙龜陰也汶陽在魯

界按春秋伝及史記鄆讙龜陰為三邑今讙亭龜山及鄆皆在汶北

豈併汶而言之乎」古活字版、「讙」を「護」に作り、「汶

陽在魯界」の五字は「殊特汶陽之田本所要」に作り、一按以下三二字無し。

「三家過制」下注「三家魯大夫皆桓公之後孟孫懿子何忌慶父後

叔孫州仇叔牙後季孫斯季友後」古活字版、此注無し。

「隳三都」下注「三都費邠成也季孫叔孫孟孫之邑時叔孫州仇先

隳邠」古活字版、此注無し。

「叔孫」下注「輒以庶子故」古活字版、此注無し。

「因費宰公山弗擾率費人以襲魯」下注「季孫斯將隳費費宰公山弗

擾与叔孫輒帥費人以襲魯」古活字版、此注無し。

「以公」下注「定公」古活字版無し。

「季孫」下注「斯」古活字版無し。

「仲孫」(古活字版、仲は叔に作る)下注「孟襄子弟何忌」古

活字版無し。

「叔孫」(古活字版、叔、孟に作る)下注「州仇」古活字版無し。

「武子之台」下注「季孫宿所築台」古活字版、此注無し。

「申句須樂頎」句字下「音劬」、頎字下「音析」兩音注、古活字

版並に無し。

「費人北」下注「敗諸姑蔑二子(二格墨訂)乃隳費」古活字版、

此注無し。

「遂隳三都之城強公室弱私家尊君卑臣政化大行」下注「按春秋

伝將隳成公斂処父謂孟孫曰成孟氏之保障也隳成齊人必至于

北門無成是無孟氏也子偽不知我將不隳公圉成弗克」古活

字版、此注無し。

「飲其羊」下注「飽之」古活字版無し。

「以詐市人」詐字下注「欺也」古活字版無し。

更に、先に表示した校合注は全て古活字版には無い。以上三点よりしてみれば、本版の卷二第一六葉以前は、それ以後とは伝本系統を異にする別種本に拠ると言い得よう。尚、その別種本の注文は、未だ十全精密なる検討を做し得ないが、王肅以後の唐人或は宋人の増補が加わっているものと推断して過誤ないであろう。

卷二第一七葉以後は、元和古活字版と対校するに、本文及び注文とも、内容の異同は殆ど認められない（古活字版は一部篇名を異にし、章節の改行の個処が異なり、また、王注下に○で区切って音注を付す等の相違はある）。只、双方に脱字衍字、或は字形字音の類似から生じた誤字がままみられる。次に、観周第十一の一篇に即き異同の一端を示す。異同のある文字に。を付し、（ ）内に群書治要との校異を付記する。

覆宋刊本

古活字版

其祖弗父何始有国而受厲公

「受」、「授」字に作る。

始有也。始有宋也〈注〉

「也」、「国」字に作る。

命為士一命〈注〉

「命為」、「公父」に作る。

為大夫再命〈注〉

「為」、「其」に作り、「夫再」

の間に「夫」字あり。

君命銘之於其宗。廟之鼎也〈注〉

「宗」、「宋」字に作る。

俯恭於僇／僇恭於僂〈注〉

僇恭而僂／俯恭而僇

故人亦莫之侮〈注〉

「侮」字下に「也」字あり。

饘糜也為糜。粥於此鼎〈注〉

「糜」、並に「糜」に作る。

不繼。世為宋君〈注〉

「繼」、「紇」字に作る。

必有明德。而達者焉

「德」、「君」字に作る。

属臣汝必師之

「臣汝」の間に「曰」あり。

與孔子車一乘馬二匹。豎子侍御

「匹豎」、「疋豎」に作る。

訪樂於襄弘。

「弘」、「弘」字に作る。

弘。周大夫〈注〉

右に同じ。

宗廟朝廷之法度也〈注〉

「廷」、「庭」字に作る。

吾雖不能富貴。而竊仁者之号

「貴」字無し。

有堯舜與桀紂之象

「與」、「之容」二字に作る。

孔子俳徊而望之

(治要、「與」字無し)

「俳徊」、「徘徊」に作る。

(治要、古活字に同じ)

此周公所以盛也

「公」、「之」字に作る。(治

要、古活字に同じ)

この程度の参差出入は、所拠のテキストの系統上の相違に依るものではなく、祖本の伝写重刻に伴って生じた異同と看るべきで、両本の底本は同一本ではあり得ないにしても、祖を同じくする同系統のテキストであると考えてよいであろう。覆宋本といえども偽脱は免れない。他の宋本系王注本との校勘の作業が必須である。

欠筆は首尾同様に玄眩弘殷匡恒貞徵讓桓溝構慎字に及び、本版の両種底本は、後述する汲古閣刊本の毛晉跋語、或は「汲古閣珍藏秘書目」に謳うごとき北宋版ではあり得ず、南宋孝宗光宗朝間の刊刻に下るものである。この事は既に莫繩孫により指摘されている。「邵亭知見伝本書目」巻七、孔子家語十卷に附記して「書中趙宋諱闕直至孝宗嫌名之頃、而敦郭不省。定為南宋孝宗世槧本無疑。其卷尾有東坡居士折角印。攷文忠已先卒

于建中靖国元年、頤為偽作」(筆者)と。また、「儀顧堂題跋」卷

六に「璣字為孝宗為皇子時原名、書中璣字欠避、則非北宋刊。

可知字亦円潤、非顔政体。鄙意疑為紹興監本。東坡印亦甚劣、

其為後人偽造無疑」(筆者)とあるが、紹興監本と推定するのは、

書中頻出する慎字の欠筆を看過せる陸心源の失考である。

附録の札記一卷は清劉世珩撰。序引に「旋復偃得毛刻本、明

仿宋刻、無注本、陸樹蘭僕度・惠半農・陸勅先評閱本、邵北崖

委校本、及孫頤伯志祖疏証本、盧抱經文韶校明何孟春注本、蕭敬

敷覆校本、又取索隱・文選注・御覽所引、互勘勒成札記一卷、

以為誦家語者之助。陸度・惠半農・陸勅先校以墨筆、邵北崖以

朱筆、而惠・陸已不能分。今署曰陸校以樹蘭為主也。偶有署惠

校者則別出之、朱筆易別署曰邵校」と言う如く未刊諸本をも参

校した校勘記で、每半葉十三行、行廿三字、全廿二葉に及ぶ。

陸・惠、邵校本並に世珩撰するところの札記に就いて蕭穆は

上引の「跋影栞宋槧孔氏家語」に「予二十年前、在上海広方言

館、与新陽趙静涵元益同事。趙君好蔵古書、一日出示道光間吳

門陸僕所録惠半農・陸勅先兩家校閱孔氏家語旧刊本。陸君又得

録乾隆間邵北崖太史奉、偸其友人徐曉亭學博以北宋精本、校勘

毛氏汲古閣刊本。増損数十字、並其卷第先後亦為改正。予又知、

両宋刊本各有所拠、亦各有優絀。屢欲以惠陸邵徐合校本、且旁采古書有涉此書者、別為札記、以餉誦毛氏刊本者、而人事紛紜、久未能讐。聚卿旧亦有此志。今既以景宋本広惠芸林、因以旧録惠陸諸家校本付之、兼為札記、以餉同志可也」(筆者)と記す。

しかしながら、此の劉氏校勘は未だ充全とは言い難く、他の宋本系諸本を参校し、精確周到な校勘記の成るのが俟たれる。

〈無窮会図書館蔵〉 特大四冊(平沼246) 川合槃山旧蔵本

紺青色表紙(三九×二三・七糎)、「景宋蜀本孔子家語附札記」と題せる原題簽(第四冊のみ完存)を有す。札記尾題下に「貴池開／元郷南／山邨川民」(白方)、書背に「貴池南山邨／劉氏家刻書」(朱長方)、「聚斲軒」(朱長円)の刊行者劉氏の三印記あり。「応書／陽蔵」(朱方)、「槃山／蔵書」(朱方)の印記。

〈同蔵〉 特大四冊(真軒876)

淡茶色表紙(三八・一×二三・七糎)、外題無し。第一〇巻末葉表尾題下の「東坡／居士」の印記は裏葉末行下方に移刻、その上に「世珩／珍藏」、「留氏／宝貨」の印影が刻され、「武昌省三仏閣陶子麟刊」の一〇字が削除されている。以下の諸帙も本帙に同じ。前帙同様の劉氏三印記あり。「真軒／蔵書」(朱長方)の印記。

〈足利学校遺蹟図書館蔵〉 特大四冊

茶色表紙(三八・二×二三・八糎)、「孔子家語 一一三」等と墨書。前帙同様劉氏の印記三顆あり。

〈斯道文庫蔵〉 特大四冊(124、6)

茶色表紙(三三・四×二三・一糎)、外題なし。

〈東京大学総合図書館蔵〉 特大四冊(H30 95)

淡茶色表紙(三四・五×二三・六糎)、外題無し。毛背、毛扨両題識一葉を札記の後、劉世珩題識の前に置く。

〈無窮会図書館蔵〉 特大四冊(織田885) 島田翰・織田確斎通蔵本

淡茶色表紙(三四・五×二三・六糎)、外題無し。毛氏両題識の位置は前帙東大本に同じ。「島田氏／図書館記」(朱長方)、「島田翰／読書記」(白長方)、「織田／氏図／書記」(朱方)の印記あり。

〈京都大学人文科学研究所蔵〉 特大四冊(子II 12)

茶色表紙(三三・五×二三・三糎)、外題無し。毛氏両題識を劉氏題識の後に配す。「淮陽杜氏蔵書」(朱長方)、「臥□／所得／善本」(朱方)の印記あり。

尚、本版底本即ち汲古閣旧蔵宋本の影鈔本に、香港大学馮平

山図書館蔵の虞山述古堂錢會影鈔宋本二冊（同館善本書録、「述古堂書目」巻一、「読書叙求記」巻一著録本）があるが未見。他に「鉄琴銅劍樓藏書目録」巻一三著録本、「天祿琳琅書目」巻四著録錢孫保鈔本があるが、現存しないようである。また、「稽瑞樓書目」に毛扆校本二冊、「鉄琴銅劍樓藏書目録」巻一三に陳揆伝録毛扆校宋本、「愛日精廬藏書志」巻二一に臨毛氏斧季校南北両宋本が見えるが、これらも現所在未詳。

同 民国五七（一九六八）年刊（台北 台湾中華書局）

影印清光緒二八年刊貴池劉氏覆汲古閣旧藏南宋刊本

A5 二冊

前記劉氏刊早印本の縮印で、通行本の中では上々のテキストと言える。

同 「民国六六（一九七七）」年刊（台北 中国子学名

著集成編印基金会）影印〔清末民国初間〕刊影覆宋

石印本 中国子学名著集成021珍本初編儒家子部所収

A5 明張鼐撰孔子家語篇（57頁参照）と合一冊

本影印本の底本は、前記劉世珩覆宋刊本の影印本で恐らくは石印本であろう。但、毎巻、首題並に尾題の「第」字を除き空格とし、首の「孔子家語序」（末に壬寅正月成の劉氏識語）の行

款を毎半葉十一行廿字と改め（原は九行十七字）、次に「篇目」二葉を附す等、少しく異なる処あり。また、末の札記は無く、題識四則は巻三・四・七・十末葉裏の余白に分附されている。或は武内義雄博士が「読家語雜誌」に於て紹介された「上海江左書林石印本」を底本とするか。その本、未だ管見に入らない。

尚、本冊首に本叢書編者によると思われる（撰者名題署なし）「孔子家語提要」が冠され、その末に「本書以係明覆宋刊本、欠文復從汲古閣本補入」とあるが、明覆宋刊本とは誤認も甚しい。また、「斯冊為文山遜叟家藏本、故特景行之」と。

同 「民国」刊（上海 錦章図書館）石印 翻清光緒

二八年貴池劉氏覆汲古閣旧藏南宋刊本

原題簽、「景宋孔子家語附札記」と題し、書扉、「宋蜀

本／孔子家／語十卷」と題署、裏に「至聖先師孔子像」あり。

首に「孔子家語序」（王肅撰、末に壬寅正月成の劉世珩識語あり）、「篇目」、次に「孔子家語札記」を配す。本文巻頭、「孔氏

家語卷第一（下方に「宋本」へ長円）、「甲」へ方、「毛氏／子晋」

へ方」の印影）／（低三）王 肅 注／相魯第一」と題し本文

に入る。尾題は首題に同じ。左右双辺（一八×一一・四糎）、有界、十三行、行廿九字、注小字双行、行四十五字内外不等。版

心細黒口魚尾無し、「家語第一（丁付）」。最終尾題下方に「毛氏／子晋」（方）、その裏葉左下方に、底本に倣い「東坡／居士」（方白）、「錙氏／宝貨」（方）、「世珩／珍藏」（方）の印影あり。末に崇禎丙子重九隱湖毛晋識及び、汲古後人毛展謹識の題識二則一葉を附し、裏左下方に「玉海堂」（長方）の印影あり。

本版は、劉世珩覆宋刊本に依るが、行款を改め、末の劉氏題識二則を除き、首に「篇目」を加えた翻版である。

〈東京都立中央図書館蔵〉 中四冊（特7114）

茶色表紙（二〇・四×一三・四糎）。

同 民国二（一九一三）年刊（上海 文瑞樓） 石印

翻光緒二八年貴池劉氏覆汲古閣旧藏南宋刊本

原題簽、「孔子家語」上海棋盤街文瑞樓印行と題署。書扉に「仿原本影

印／孔子家語／鳳章書端」とあり、裏に「民国二年冬上／海

文瑞樓石印」と刊記を有す。首に「至聖先師孔子像」一葉、「孔子家語十卷」と題して四庫提要の当該解題、並に「篇目」を冠

し、本文巻頭、「孔氏家語卷第一（下に「宋本」〈長円〉、「甲」

〈方〉、「毛氏／子晋」〈方〉の三印記が印さる）／（低）王

肅 注／相魯第一」と題して本文に入る。尾題は首題に同じ

くも、巻二は末行下方に「卷第二」、巻八は「家語卷第八」と。

左右双辺（一五・九×一一・五糎）、有界、十一行、行廿一字、注小字双行、行卅一字。版心白口魚尾無し、横線で五区画に分つ。

「家語第幾（丁付）」。終尾題葉裏末行下方に「東坡／居士」、「錙氏／宝貨」、「世珩／珍藏」の印記を有すること藍本に倣う。

本版、款式ほぼ、劉世珩覆宋刊本に依るが、行款を改め、札記並に、末の毛・劉題識四則を除き、首の王肅序を去り、四庫提要及び「篇目」を加える等、些少の増損改変を加えている。

〈東京大学総合図書館蔵〉 中五冊（B602121） 大正一三年北京大

学校寄贈本

淡茶色表紙（一九・九×一三・三糎）。

同 清光緒一八（一八九二）年刊（上海 掃葉山房）

覆宋刊本

書扉、「影宋刻内府藏本／孔子家語／繡州金甌珠署（印）」

と題し、裏に「光緒壬辰年夏四月／上海掃葉山房印行」と両行に刊記が署さる。首に「孔子家語十卷内府藏本」と題して四庫提要

の本書解題の全文を引載し、次に「篇目」二葉並に「至聖先師

／孔子像」（表に是く題署、裏に孔子座像一幅）一葉あり。巻

一〇末に「後序」を配す。

本文巻頭、「孔氏家語卷第一」、次行低八格「王 肅

注」、第三行「相鶯第一」と題し本文に入る。尾題は首題に同じ。但し第八巻のみ「家語卷第八」とある。左右双辺（一三・八×一〇・三糎）、有界、九行、行十七字、注小字双行、行廿五字内外不等。版心白口魚尾無く横線を以て五分、「家語第幾（丁付）」。

本版と上述の劉氏覆汲古閣旧蔵宋刊本とを比較するに、行格字数、本文内容ともに全く一致し、字句の出入異同も殆ど無く字様字体も近似し、兩本の祖本が同一本であることは明らかである。只、此は雕鐫燕淺の中本、劉刻の巨冊堂々たる精刻には遠く及ばない。本版刊年は劉刻より一〇年を遡り、当時、祖本である汲古閣旧蔵宋刊本はまだ蕭穆の儲有であり、いかなる事情から本版が刊行されるに至ったかは、それを語る序跋の類なく、一切明らかに出来ない。封面に内府蔵本と署するのは、書肆の誇称として信用するに足りない。尚、清末民国初の間に、次述する如き本書に做った石印本が通行するが、その底本に就て、「増訂四庫簡明目錄標注」続録に「沅叔謂疑即汲古閣所蔵本影写、而蕭敬孚云、別係一宋本、恐不可信」とある。此の傳増湘の説、従うべきであろう。

〈無窮会図書館蔵〉 中五冊（天淵961）

淡茶色表紙（一九×一二・七糎）、外題なし。扉右下方に「掃葉山房／督造書籍」の朱長方印が捺さる。

〈大阪大学附属図書館蔵〉 中五冊（^{3-02.1}家語_{孔子} KOS_{徳堂}）

淡茶色表紙（一九・六×一二・六糎）、「孔子家語_呂（一羽）」と墨書、右上方に目錄外題が墨書さる。孔子像一葉は「篇目」の前に配す。扉裏左下方に「掃葉山房／督造書籍」の朱長方印が捺さる。「氷壺軒／攷蔵記」（朱長方）、「金明／秀印」（白方）の印記あり。

同〔清末〕刊（上海 同文書局） 影覆宋刊本 石印

書扉、「魏王肅註_{内府}蔵本／孔子家語／上海同文書局石印」と題署。序目内容、本文巻頭及び尾題の題署程式、匡郭・行格字数・版心等款式並に前記掃葉山房刊本に同じ。

本版は、匡郭・界線・文字等に整版に往々みられる欠損、亀裂があり、底本が整版本であることは一目して瞭然であるが、前掲掃葉山房刊本とは明らかに異なりその先行底本の現所在は不明。

〈斯道文庫蔵〉 中五冊（¹²⁴ホ2） 古城貞吉旧蔵本

淡茶色表紙（一九・五×二三糎）、外題無し。一部に朱圈点の書入あり。「古城文庫」（朱長方）の印記。

同〔清末〕刊（上海 同文書局）石印

扉題、序目内容、巻頭・尾題題署程式、匡郭・行格字数・版心等版式並に前記同文書局影覆宋刊本に同じ。但し、字様は大きく相違し新たに繕写した上で影印に付した別版である。

〔静嘉堂文庫蔵〕 中四冊（4471） 竹添井々旧蔵本

淡茶色表紙（二〇×一二・七糎）、「家語 元（一貞）」と墨書さる。「松方／文庫」（朱方）の印記あり。

〔無窮会図書館蔵〕 中五冊（真軒875）

茶色表紙（一九・八×一二・五糎）、原題簽、「孔子家語

卷一^一」等と題署。「熙彦蔵本」（朱長方）、「真軒／蔵書」（朱長方）の印記あり。

〔同蔵〕 中五冊（織田886）

上掲の両帙、扉右区画の「魏王肅註」下に「内府／蔵本」とあるが、本帙は此の四字を除去し、首の四庫提要標題下に「内府／蔵本」と小字で署す（上掲両帙此の四字無し）等の小異があるが同版本。また「篇目」及び至聖先師孔子像を欠く。

淡茶色表紙（一九・五×一二・九糎）、原題簽、前記真軒文庫本と同版。墨筆の返点・送仮名の書入あり（首六巻の正文のみ）。

〔織田／氏図／書記〕（朱方）の印記。

同 民国二（一九一三）年刊（上海 文瑞樓）石印

書扉、「仿原本影印／孔子家語／鳳章書端」と題署され、裏に「民国二年冬上／海文瑞樓石印」なる刊記がある。序目内容、巻首・尾題署程式、匡郭・行格字数・版心等版式並に前記静嘉堂文庫蔵本等の同文書局石印本に同じ。

〔東京大学東洋文化研究所蔵〕 中五冊（^論政子・^總諸2）

茶色表紙（一九・九×一三・四糎）、原題簽、「孔子家語 鳳章書一」（第四・五冊は剝落、書題簽を補う）等と署さる。朱句点書入あり。

他に「北京師範大学図書館中文古籍書目」及び「景和堂文庫目録」（高麗大学校蔵書目録第一二輯）に上海会文堂書局石印本が見え、前者に「一九一七年」（民国六年）刊と、後者「題簽」（宋蜀本）孔子家語」と著され、恐らくは上掲諸本と同種本であろう。

孔子家語 一〇巻 〔魏〕王肅注 〔明毛晉〕校 〔明末〕

刊〔常熟〕毛氏汲古閣

首に「孔氏家語序」（第二行低一〇格「王肅」と題す）、序末に直接し「篇目」（尾「孔氏家語篇目終」と題す）、巻一〇末

に「後序」一篇あり。卷末、「虞山毛晉識」の跋文があり、跋尾「何氏所注亦是暗中摸索（中略）但其一序亦参考因綴旒于跋之下」と言いて、「大明正徳二年歳次丁卯仲春二月壬寅日識」の何孟春序を附す。

本文巻頭、「孔氏家語卷一（附三）王 肅 注」、次行低四格「相魯第一」と題し、第三行より本文に入る。尾題は、巻頭題に同じく、巻二以下巻数下に「終」字あり。左右双辺（一七・四×一・二・六）糖、有界、九行行十七字、注小字双行行廿五字内外不等。版心白口、魚尾無し、中縫「家語幾（丁付）」、毎巻首尾各一葉には「汲古閣毛氏正本」と題さる。

巻次篇立の次第は前掲劉氏覆宋刊本に同じであるが、第八觀思篇を「致思」と題する。後掲諸本凡て「致思」に作り、「觀思」とするのは前掲劉氏覆宋本系諸本の他には例を見ない。

本版の底本及び刊年に関しては今一つ明瞭でない点がある。前に引いた劉氏覆宋刊本末の崇禎丙子（九一六三六）年の毛晋題識（198頁参照）に拠れば、前に（本書毛跋に拠れば丁卯即ち天啓七（一六二七）年）吳興の賈人より得た宋蜀大字本を以て已に刊刻したことが分明に記されている。しかし、本書卷末の毛晋跋文（198頁参照）には年紀が無く、文中、己卯即ち崇

禎一二（一六三九）年錫山酒家に於て大字宋槧王注を得た（劉氏覆宋刊本の毛識に拠れば崇禎九一六三六）年と矛盾）ことが記され「亟公之同好」したのはその後のことと解さざるを得ない。この撞着を解くには、崇禎九年の毛晋題識を覆宋刊本が汲古閣旧刊本よりテキストとして優れていることを示さんが為に偽撰されたものと看做すか、「亟公之同好」とは已刻の刻版を崇禎一二以後に重印頒布したものと理解するかの何れかしかないと思われるが、なお後考を俟ちたい。

ただ、本版と劉氏覆宋刊本とを対校すれば、巻二第一七葉以降については、魯魚豕亥の誤りを除けば、異同出入は幾ど無く、両本底本を齊しくすると看做してよく、それ以前については、劉氏覆宋刊本に見られる音注、及び王肅注以外の後人の注が全く無く、テキストが異なることは明白である。従って、本版は、崇禎九年の毛晋題識に言う如く、前得の首闕の宋本に拠ったとみて矛盾しないようである。底本首闕の部分は何本に拠って補ったかについては、毛晋跋文にも一言もなく明らかでない。只、諸本と比較対校するに、注文に即いては元和古版字版、翻南宋刊本と異同極めて少なく王肅注の原形を備えており、正文に即いても、劉氏覆宋本よりはこの両本により近く、明末に通行し

た俗本に拠ったものでないことは疑いを容れない。今、始誅第二の一篇を採り、本版、古活字版、翻南宋刊本の三本を比較し、本を参照に資す、翻南宋刊本は四部叢刊影印本に拠る。

汲古閣刊本

古活字版

翻南宋刊本

覆宋刊本

治要本(字旁括弧内は見せ消ち訂正字)

戮之于兩觀之下	○ ○ 其 ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ 於 ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
少正卯魯之聞人×	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
吾語汝以其故	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ 女 ○ ○ ○ ○ ○ <small>(女下音 庄あり)</small>	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
一曰心逆而險	○ ○ ○ 逆 ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
足以撮徒成党 <small>撮聚</small>	○ ○ 撮 ○ ○ ○ ○ ○ <small>撮聚○撮 側九反</small>	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ 撮 ○ ○ ○ ○ ○ <small>撮聚也 側九反</small>	○ ○ 撮 ○ ○ ○ ○ ○ <small>撮聚也</small>
其談說足以飾褒榮 <small>榮</small>	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
其疆禦足以返是獨立	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
此乃人之奸雄有×	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
為人虛偽以聚党也 <small>(佳)</small>	○ ○ ○ ○ ○ 亦 ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ 亦 ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ 亦 ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ 亦 ○ ○ ○
凡此七子	○ ○ ○ ○ ○	是 ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○
以七子×異世而同惡	○ ○ ○ 皆 ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ × ○ ○ ○ ○ ○
夫子同狴執之	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ 狴 ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
季孫聞之不悅曰	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
×子喟然歎曰	× ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	× ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	孔 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	孔 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
不試責成虐也	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ 則 ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ 誠 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

政無此三者	○○○○○	○○○○○	故○○○○○	○○○○○
必教而後刑也	○○○○○	○○○○○	○○○○○	
庸用也即就也 (注)	○○○○○	○○○○○	×××××	
×刑殺皆当以義 (注)	×○○○○○	×教○○○○○	言○○○○○	
×当謹×自謂 (注)	×○○×○○	×○之○○○	又○猶×○○	
未有×××順××事 (注)	○○×××××	○○×××××	○○使人可○守之○	
是先教而後刑也 (注)	○○○○○	○○○○○	○○○○○	
既陳道德以先服之	○○○○○	○○○○○	×○○○○○	○○○意(德)○○○○○
尚賢以勸之	○○○勤○	○○○○○	○○○○○	○○○○○
言師尹當毗輔天子 (注)	○○○○○	○○○○○	○○○○○	
使民不迷× (注)	○○○○○	○○○○○	○○○○○	
百仞之山重載陟焉何哉	○刃○○○○○	○○○○○	○○○○○	
陵遲故也	○○○×	○○○○○	○○○○○	
陵遲猶陂池也 (注)	○○○○○	○○○○○	○○○○○	

紙幅の都合で此の一篇のみをみたが、三本間の相違は字句の出入にすぎず、それも脱字衍字、字形字音の類似からおこった異同で、それも多いに過ぎるとは言い難い。従って、此の三本は祖を同じくし、恐らくは今失伝せる宋本或はその旧姿を承け

た同種の一本に拠ったとして齟齬しないであろう。更に一言贅言すれば、「汲古閣珍蔵秘本書目」、及び前記劉世珩覆宋刊本末に附す毛扆題跋(198頁参照)に、扆が覆宋本の底本である宋蜀大字本と南宋本或は借得せる小字宋本とを対校したことがみえ、

「稽瑞樓書目」、「鉄琴銅劍樓藏書目錄」、「愛日精廬藏書志」に毛扆校宋本が著録されていることは前に触れた。錢曾「述古堂宋板書目」に、「王肅注孔子家語十卷四本」が見え、錢毛二氏の交遊は良く知られ、扆が用いた、借得小字宋本・南宋本とは即ち述古堂藏本とみて恐らく相違ないであろう。してみると、この南宋小字本を、本版卷二第一六葉前の底本と推定しておいて強ち失当とも言えないのではあるまいか。

尚、沈家本に「書毛晉本孔子家語後」(「枕碧樓偶存稿」卷四所収)の一文あり。史記集解索隱、太平御覽、一切経音議、初学記等諸書引文との校勘記を載す。

〈東京大学総合図書館蔵〉 四冊合一冊 (H30) 島田篁村・翰
旧蔵本

淡茶色表紙(二五・一×一六・一糎)、外題無し。首より卷二に至り、朱青筆の句点圈点書入あり。「華山／藏書」(朱長方)、「嶋田氏雙／桂樓收藏」(朱長方)、「南葵／文庫」(朱方)、「嶋田翰字彦楨精力所聚」(墨)の印記あり。本帙は次掲の内閣文庫蔵吳郡宝翰樓印本に比べ刷面先後優劣決し難く、寧ろ此の方が後出かと思わせるところがある。本帙には封面無く、或は宝翰樓の封面を欠落せる後印に属するか。汲古閣初印本には北京図

書館(二冊、失名臨毛扆校)、上海図書館、南京図書館(二冊)、国立中央図書館(台湾)蔵本(四冊)がある。また、「経籍訪古志」卷四に著録され解題叢書本「静節山房蔵」とあるも現所在未詳。南京図書館蔵本は「善本書室藏書志」卷一五著録の盧抱経校陳仲魚旧蔵本か。同目に「盧文弨更以孫志祖校吳勉学本及以荀子・說苑・御覽・北堂書鈔・大戴礼・淮南・呂覽・白虎通・韓詩外伝・史記索隱・漢書等、逐節逐字、互相校正、朱墨粲然。每卷之尾、記以日月及酬応雜事。即羣書拾補中之底冊也。前有宋本及百尺樓・鱸讀・仲魚・免牀諸印」(筆者)と志さる。

又「清」印(吳郡宝翰樓)

封面、「汲古閣校／孔子家語／吳郡宝翰樓」と題され、左上方に「宝翰樓／藏書記」(朱長方)の鈐印あり。

汲古閣の刻板は清康熙以後漸次四散して、或は亡失し、或は江浙諸書肆の儲有に帰した。鄭德懋「汲古閣刻板存亡考」には本版の帰趨を記さないが、次掲諸帙の封面に抛り、宝翰樓の蔵板となったことが判明する。此の清印本の印面、さほど後刷とは見えないから、恐らく比較的早い時期に譲渡されたものであろう。

〈内閣文庫蔵〉 四冊(298 14) 林述斎旧蔵本

淡茶色表紙(二六・一×一六・四糎)、「孔氏家語 一之三(四五、

六之八、九十一) 一(一四)」と墨書さる。「述斎衡/新収記」(朱長

方)、「林氏/藏書」(朱方)、「昌平坂/学問所」(墨長方)、「大
学校/図書/之印」(朱方)、「浅草文庫」(朱長方)の印記あり。

〈尊経閣文庫蔵〉 四冊

茶色表紙(二五・六×一六・八糎)、外題なし。見返左下方に

「学耕/堂 / 珍賞」(朱方)の鈴印あり。「学」(朱円)の印記。

〈京都大学人文科学研究所蔵〉 二冊(子II 11)

茶色表紙(二四・二×一五・四糎)、外題なし。巻一首の相魯・

始誅兩篇、天地行間に朱墨の校語等の書入があり、第一葉首行
欄脚に「吳門普莊/錢端振定/氏校刊本」と朱書あり、主たる
対校本を示したものと思われる。「四庫簡明目録標注」に「許氏
有清錢端刊本」と著録されているが、未だ管見に入らず、其の
本未詳。「爾/瞻」(白方)、「開/岐」(朱方)、「東方文化研究
所」(朱長方)の印記あり。

〈京都大学文学部蔵〉 一冊(哲C a 5
中 II 2-5) 文政六(一八二三)年

書入本 六条家旧蔵本

茶色表紙(二五・六×一六・五糎)、「孔子家語」と墨書さる。

朱引朱句点、天地行間に朱校語書入があり、最終葉裏框郭左外

に、「文政癸未仲春十又八遂一閱加句読以一本所有差異贅書焉」

なる朱の校読識語がある。「六条家蔵書」(朱長方)、「有/庸」

(白方、六条有庸)、「吉川幸次郎/蒐集書籍/三島海雲記/念
財団捐」(朱方)の印記あり。

〈宮内庁書陵部蔵〉 五冊(55643)

淡茶色素紙(二四・一×一六・〇糎)、第一冊、「孔子家語唐本

自一至二」と墨書あり、第二冊以下書名なく、巻次數のみ書さ
る。封面左上方には「沈氏山楼/蔵書記」(朱長方)の押印あり。

朱句点、眉上に朱墨の慶長刊古活字版標題句解本との異同を注
記せる書入があり、他書に互見せる文章にはその書名篇名等が
標記さる。「頼古堂/家蔵」(白長方)、「陽津氏/蔵書/五車之
一」(朱長方、鹿兒島藩島津家)、「業賈浪/華 / 田思明」
(朱長方)、「華洲」(白長方)、「思」「明」(上白下朱両方)の印
記あり。「図書寮善本解題」著録。

〈京都大学附属図書館蔵〉 四冊(近1-69
コ1)

淡茶色表紙(二六・一×一六・三糎)、外題なし。書陵部蔵本

と同じく、封面左上方に、「沈氏山楼/蔵書記」の印あり。「陽
/明/蔵」(朱方)、「近衛本」(朱長方)の印記。

此の両帙の封面に見える印記の「沈氏山楼」は恐らくは書肆

であろうが、本板木が宝翰楼より沈氏に帰したもののか、或は、両者の相板か、或は、沈氏は単なる依託発売者なのか判然としない。

〈静嘉堂文庫蔵〉二冊(1048) 陸心源十万卷楼旧蔵本

淡茶色表紙(二四・六×一五・八糎)、「孔子家語 乾(坤)」と墨書さる。封面、「孔子家語序」共に欠落。篇目は末一葉のみを存し、首に白紙四葉を補綴する。又、卷末毛晋跋後の何孟春序を欠く。「汪氏伝／書楼／珍藏書／画印」(朱方)、「帰安陸／樹声蔵／書之記」(朱方)の印記あり。

同 「清」刊 覆毛氏汲古閣刊清吳郡宝翰楼印本

「汲古閣校／孔子家語／ 吳郡宝翰楼」と、前掲諸帙と同程式の封面を有するも、明らかに別板である。序目尾跋内容、巻頭題署程式、行格版心等款式並に汲古閣刊本に同じ。左右双辺(二七・一×一二・六糎)。宝翰楼印本の粗なる覆刻本で、偽版の類であろう。

〈東京大学東洋文化研究所蔵〉六冊(子^家1) 徐則恂旧蔵本

茶色表紙(二五・四×一五・九糎)、外題無し。朱句点、朱引、眉上に朱の標注書入あり。「青山／徐則／恂蔵」(白方)、「投戈／講藝／息馬／論道」(白方)の印記。

同 清乾隆八(一七四三)年刊(聚錦堂) 覆汲古閣刊本

「汲古閣原本／孔子家語／ 聚錦堂蔵板」と題せる封面があり、上辺上右から左へ「乾隆癸亥重鑄」と刻さる。首に王肅の「孔氏家語序」、序末に直接し「篇目」があり、次に「先聖圖像」より「感麟絶筆」に至る孔子歴年の事蹟を画いた図像全一四幅七葉(版心「家語像」と題す)を配す。また末に毛晋題識及び何孟春序を有すること汲古閣刊本に同様。巻頭題署程式、行格並に汲古閣刊本に同じ。左右双辺(二七・四×一二・三糎)、版心白口魚尾無し、「家語幾 (丁付)」、各巻首葉及び末葉版心中縫には「汲古閣^{毛氏}正本」と刻さる。

本版は汲古閣刊本或はその覆刻本に依れる粗なる覆刻である。

〈東京大学東洋文化研究所蔵〉六冊(政^論子¹) 大木文庫

新補淡茶色表紙(二四・八×一五・五糎)、外題なし。錦鑲玉装、原料紙高さ二二・二糎。

覆汲古閣刊本には他に、「北京師範大学図書館中文古籍書目」に著録する清勤思堂刊本があるが未だ管見に入らない。

同 清道光一五(一八三五)年刊(至宝堂)

「道光乙未新鑄／孔子家語／ 至宝堂蔵板」なる封面を有す。首に「孔氏家語序」(第二行低一格「王肅」と題署)、及び、

汲古閣刊本では、卷一〇末にある「後序」を冠し、次に「先聖像」・「親禱尼丘」の両画像一葉及び「孔子家語目錄」あり。本文巻頭、「孔氏家語卷一」^(四五)王肅注」、第二行低三格「相魯第一」と題し本文に入る。尾題は無い。左右双边(一六・一×一・二纏)、有界、九行行十七字、注小字双行行十七字。版心白口単黒魚尾、「家語 卷幾 (丁付)」。卷五第五至一〇葉、卷六、卷七第一二至一八葉等一部に句点が付刻さる。

本版は、後序一篇を首に配し、画像一葉を附す等、汲古閣刊本とは稍首序の体裁を異にするが、本文注文についてみれば、魯魚亥豕の譌謬、字句まれに誤脱がみられ、一方、些少の校訂を加えたらしき箇所もあるが、基本的には行文内容上の差異は無く、巻頭書名を「孔氏家語」とし、篇次篇名も悉く一致している。従って本版は、汲古閣刊本に基く翻版と看做して相違ないであろう。

〈東京大学総合図書館蔵〉 四冊合二冊 (B60183) 青洲文庫

淡茶色表紙(二二・六×一三・二纏)、外題無し。

尚、「北京師範大学図書館中文古籍書目」著録の、「清同治二(一八七三)年善成堂刻本二冊は、汲古閣刊本の系統を引く同種本と思われるが未だ管見に入らない。

同(封面題「孔子家語原註」) 一〇卷 魏王肅注 清

李榕校 清乾隆四六(一七八一)年刊(趙氏)書業堂) 翻汲古閣刊本

封面「魏東海王子雍註／孔子家語原註／書業堂藏板」と題され、上边上、右から左へ、「乾隆辛丑仲秋鐫」と刊記が刻さる。首に「孔氏家語序」(王肅撰)、「後序」(乾隆庚子夏五月望日錢塘後学李榕謹識の跋(版心題「重刊家語跋」)及び「篇目」がある。本文巻頭、「孔氏家語卷一」^(四一)王肅注／^(四四)相魯第一」と題し本文に入る(只、卷三、七、十は「氏」を「子」に作る)。尾題は「孔子家語卷幾終」(卷三―五は「卷」字下に「之」字があり、卷四は「子」を「氏」に作る)。左右双边(一八・一×一三纏)、有界、十一行、行廿四字、注小字双行行廿四字。版心白口単黒魚尾、「孔子家語 卷幾 (丁付)」、下象鼻に「汲古閣」と刻さる。

李榕重刊跋に「近世所行、莫如陳臨川家語献而所注、不僅一家、王注之旧、修不可復。余誦誦之下、未嘗不掩卷而嘆也。用是広求原本弾心、有年偶得虞山毛氏汲古閣本甚善。読其跋語、知構求之誠、遇合之巧、固非偶然。誠所謂先得我心矣。因重加考核、付之劄牘氏。増名原注、所以別于王陸何陳四家之書」と

ある如く、本版は汲古閣刊本の翻刻重刊本である。

書業堂は嘉慶道光の間、汲古閣十三經・十七史を覆刻刊行せる呉県の書肆趙氏（本論集第十九輯288頁参照）。

〈京都大学附属図書館蔵〉 二冊（1-69 コ7）

淡茶色表紙（二四・二×一五・二糎）、書題簽なるも上下一部を残し幾ど破損、下方に、「式錫／堂／蔵書」（白方）の朱印が捺さる。他に「明治二十九年一月二十三日／陸軍戦利品整理委員会交付」（朱長方）、「東京／図書／館蔵」（朱方）の印記あり。

同（封面題「増註校正孔子家語」） 一〇巻 「魏」王肅注

〔清李容校〕 清光緒六（一八八〇）年刊（掃葉山房）

覆乾隆四六年李容重校書業堂刊本

封面、「東海王子雍先生増註／増註校正／孔子家語／校讐無訛 掃葉山房蔵版」と題され、上辺上右から左方向へ「光緒六年仲春鐫」と刊記が刻さる。首に「孔氏家語序」（王肅撰）、及び「孔子家語篇目」を冠し、本文巻頭「孔氏家語卷一（隔）王肅注／（低四格）相魯第一」と題す（巻三・四、七―十は「氏」を「子」に作る）。尾題は「孔子家語卷幾終」（但、巻三、五は「巻」字下に「之」字が有り、巻四、九・十は尾題を欠く）。四

周単辺（一七・九×一二・九糎）、無界（但、各篇首尾等一部界線の見ゆるところあり）、十一行、行廿四字、注小字双行行廿四字。版心白口単黒魚尾、「孔子家語 卷幾（丁付）」。

本版は封面に「増註校正」「校讐無訛」と大書し新たな注を補い校正を加えたものの如くであるが、実は前記乾隆四六年李容重校刊本と本文行格が全く一致し、款式相似、李容跋を欠く等序目の程式に小異あるもののその粗なる覆刻重刊本である。

〈京都大学附属図書館蔵〉 四冊（1-69 コ8）

黄色表紙（二三・五×一五・三糎）、書外題「孔子家語 序目卷一至卷三」等と墨書。「明治二十九年一月二十三日／陸軍戦利品整理委員会交付」（朱長方）、「東京／図書／館蔵」（朱方）の印記あり。

尚、「景和堂文庫目録」（高麗大学校蔵書目録第二二輯）に清光緒三二（一九〇六）年上海校経山房刊孔氏家語一〇巻二冊を著録し、「標題紙、（増註校正）孔子家語」とみえる。本版と同種本であろう。

同 四巻 「魏」王肅注 清光緒九（一八八三）年刊
（輔仁堂）

封面、「光緒癸未年鐫／孔子家語／輔仁堂蔵板」と題す。

首に「序」(「乾隆庚子夏五月望日錢塘後学李容謹識」)、「後序」(後半の孔安国、孔氏世系及び孔衍上書を欠く)次に「篇目」があり、王肅の序は無い。本文巻頭「孔氏家語卷之一(格七)王肅 註」(卷二・四は「孔子家語」)、第二行低三格「相魯第一」と題す。尾題は卷一のみ「卷一終」とみえ、その他の巻には無い。四周単辺(一四・二×九輝)、左右双辺の葉もあり。無界、九行行廿二字、注小字双行行廿二字、版心白口單黒魚尾、上象鼻に「孔子家語」中縫、「卷幾(篇名)(丁付)」。

〈天理図書館蔵〉 中一冊(124.15)

後補茶色厚表紙(一八・四×一一・三輝)。首より卷二觀周第十一に及び、朱句点圈点、眉上等に朱校語等の書入あり。「樓鸞堂/図書記」(朱長方)、「三好」(朱長方)の印記あり。但し、並に、消印さる。

孔子家語 一〇卷 「魏」王肅注 「元和」刊 古活字

首に、「孔子家語序」(第二行低六格「王(隔三)肅(隔三)註」と題署)を冠し、序末に直接し低四格に「篇目」と題し目録があり、「篇目」末一行を隔て低四格に「上官国材宅刊」と刊記がある。「後序」は卷十末に配す。本文巻頭、「孔子家語卷第一」、

第二行低三格「相魯第一」と題し本文に入る。尾題は巻頭題に同じ。四周双辺(二一・二×一六・〇輝)、有界、九行、行十八字、注小字双行、行十八字。版心小黒口双花口魚尾、「家語卷幾(丁付)」。王注末「〇」で区切り音注を附す。

巻立篇次第は、先述の覆宋刊本・汲古閣本に同じであるが、篇名を一部異にしている。即ち、彼、第四三篇を「子貢問」、四四篇を「公西赤問」とするのを、此本は「曲礼子夏問」、「曲礼公西赤問」と題する。第四三篇冒頭は、「子夏問於孔子曰」で始まり、以下の章節頭、「子夏問」とする段が続き、汲古閣本等「子貢問」と題するのは自然でない。本版の如く「子夏問」とするのが、穩当である。

また、本古活字版には、注末、「〇」で区切り反切或は直音の音注が処々全篇に亘って附されている。此の音注は、覆宋刊本には無く、群書治要本、敦煌写本零巻にも見られない。後述の翻南宋刊本では、卷六以後、同様の注が附されているが、それが、王肅原注であるか否か、恐らくは後人の補うところであろうが、仔細なる検討を要する。

本版の底本に就いては、前述の覆宋刊本・汲古閣刊本、後掲の翻南宋刊本と祖を一にするテキストであることは、前に記し

×善則詳 欲○○○
 公言仁義 ○○言○ 欲○○○
 一日三覆白圭之玷 ○○○復○○○○ ○○○○
 詩云白圭之玷(一) ○曰○○○○ ○曰○○○○
 尚可磨×(二) ○○○也 ○○○也
 一日三覆×慎之至(一) ○○○復之○○○ ○○○○之○○○
 以兄之女妻之×也(三) ○○○○者○ ○○○○者○
 出入於戶未嘗越礼 ○○○○履 ○○○○者○
 其言往來常跡(一) 言其○○○○ 言其○○○○
 春分常發蟄虫(二) ○○常○○○ ○○當○○○
 是以日躋 ○○○○ ○○○躋
 躋升也(生) ○○○○ 躋○○○
 四面施網(生) ○○○○ ○○絶○
 聖敬日躋(正) ○○○○ ○○○躋
 所以不遇× ○○○也 ○○○也
 孔子曰然吾亦語汝 ○○○○○○○○ ○○○×○○○○○
 知之所未及 ○○○○○○ 智○○○○○
 不教道趙文子之行 ○○○○○○○○ ○○○蓋○○○○○
 無道其默足以容 ○○○○○○○○ ○○○○○○○○

蓋銅鞮伯華之行也 ○○○○○○○○ ○○○○
 不受其命而隱居者(一) ○○○○○○○○ ○○○○之○○○
 蓋老來子之行也 ○○○○○○○○ ○○○×○○○○○
 居下不授其上 ○○○援○○ ○○○援○○
 攀授其上(二) ○援○○ ○援○○
 耳目之所及而已矣 ○○○○○○○○ ○○○○○×
 謙是其正也(三) 讓○○○○○ 讓○○○○○
 好直其功言其功直 ○○○○○○ ○○○言其功直
 至於其為客也 ○○○容○ ○○○容○
 未知所止 ○○○×○ ○○○×○
 ×又羊舌大夫之行 此○○○○○○○ 此○○○○○○○
 請退而此記之 ○○○×○○ ○○○×○○

見されるのを希い、後考を矣ちたい。只、葉德輝は、次掲の覆
〔元和〕古活字版に就て「前序目後有上官国材宅刊一行。末葉有
寛永十五年戊寅仲秋吉日二条通観音町風月宗智刊行二行。審其
版式行格、似北宋時私宅本。風月宗智又翻雕耳。」（郎園読書志
卷二、筆者）句説）と言う。寛永版が本古活字版の覆刻と知らないで
の言であるが、かかる程式の刊記は宋刊本にまみられ、また、
本版には稀ながら、恒・桓字の末画を欠くところがあり、底本
を宋時の私宅本と推測しても、強ち失当とはしないであろう。

本版の刊行されるに至った事情についてはほとんど詳らかに
しない。これより先、慶長四年に伏見版の標題句解孔子家語三
巻が公刊されているが、節略本であり、王肅の注は殆ど存しな
い。その故もあって、新たに王肅注善本が出現したのを機に再
度、完本の印行が企られたものであろう。内閣文庫蔵の一本に
は、各冊末の識語（但し全て墨消されている）に元和八年の年
紀がみとめられる。本版の刊時は此の年を下り得ず、恐らくは
元和中の刊行にかかる。後、寛永一五年、風月宗智により整版
に覆刻され、このテキストは近世を通じて最も流布した。江戸
時代中期以降隆昌した家語の注釈研究に、多大の便宜と成果を
齎したことに於て、本古活字版の刊行の意義は尠しとしない。

〈内閣文庫蔵〉 特大五冊（298 16）

丹表紙（三三・八×二三・四糎）、「孔子家語二二（一九十）一（一
五止）」と墨書、また目録外題墨書。末葉に、「辛酉仲冬西山子
元外題加焉」と墨識あり。全篇に亘り、朱引朱句点圈点墨訓点、
眉上に墨筆の一本との校異、偽字を訂正標記せる校語・案語の
書入があり、各冊末に次の校読識語があるが、全て墨消されて
いる。

元味捌季大□□□□□□□□居士□□人□（卷二末）

元味八年春二月十日□此乙冊□雜□□山木居士書（卷
四末）

□□□季歲□闡茂□□大□十又三□茨□□三井□竟
（卷六末）

元味捌季仲春□又四句点此乙冊□□山木居士（卷八
末）

元和八年仲春十一日七□□□□以点此一冊 山木居士
（卷十末）

山木居士とは或は石川丈山か。各冊首行の原蔵印が剪去さる。
「昌平坂／学問所」（墨長方）、「文政己卯」（朱無框）、「浅草文
庫」（朱長方）、「大学校／函書／之印」（朱方）の印記あり。

〈同蔵〉 五冊 (298 15)

香色表紙 (二七・五×一九・二纏)、「孔子家語」卷一之三 (一九之十) 一 (一五止) と墨書。青筆の句点声点書入あり。首より卷一儒行解第五までには朱引朱圈点墨調点、眉上に校語等標注、字傍に語義等の書入あり。「平安三上／文漪堂蔵」(白長方)、「昌平坂／学問所」(墨長方)、「文政乙酉」(朱無框)、「浅草文庫」(朱長方)、「大学校／函書／之印」(朱方)の印記あり。

〈天埋図書館蔵〉 五冊 (124.13) 三井家旧蔵本

後補藍色表紙 (二七・二×一九・五纏)、「孔子家語」二二 (一九之十) と朱書、目錄外題が朱書さる。全篇に亘り、朱引朱句点声点縦点墨返点送仮名 (朱を交える) 振仮名、眉上に主として墨筆にて校語書入があり、書入は処々胡粉で訂正されている。每冊首大題下方に「雲典」と墨署、末冊後表紙裏に「清源蔵本五巻物」と墨識あり。「清源／禪寺」(墨方)、「敬叟／修補」(墨方)、「雪／岑」(朱方)、「三井家鑒蔵」(朱長方)、「三井／高堅／長寿」(朱方)、「高堅／所集」(朱方)、「雙籠監蔵」(朱長方)、「後天／香堂」(白方)、「小天／香堂／攷蔵」(白方)の印記あり。「天理図書館稀書目録和漢書之部第三」著録。

〈岩瀬文庫蔵〉 大五冊 (110 59) 楠本頌水旧蔵本

丹表紙 (二八・八×二〇・五纏)、書題簽、「家語」幾、目錄外題が墨書さる。全篇に亘り朱引朱句点が附され、首より卷一始誅第二までは墨筆の返点縦点送仮名の書入あり。首冊見返に「肥前楠本頌水先生旧蔵」と墨署され、また、首冊見返及び末冊後表紙裏に「閻魔菴蔵書」と墨書し、その下に閻魔像のスタンプ (台座に「岡本画」と) が捺さる。「碩水／蔵書」(朱長方)、「岡本蔵書記」(墨長方)、「閻魔庵／函書部」(朱長方)の印記あり。

〈大東急記念文庫蔵〉 五冊 (35 22 563) 宇野明霞旧蔵本

後補茶色布目表紙、書題簽「孔子家語 一二 (一九十終)」と墨書。全卷に亘って朱読点が附され、眉上行間に朱墨青紫緑筆で毛氏正本即ち汲古閣本 (墨筆)、吳氏本即ち吳嘉謨集校本 (青筆)、錢氏本即ち錢受益校本 (紫筆)、高麗本即ち王広謀句解本 (緑筆)、金蟠・葛鼎同校本 (墨筆付箋) との校合、また朱筆で、史記・左伝・説苑・礼記等諸書互見の類文との校異等書入が詳細で、所々校語を附す。「明霞／軒／蔵書」(朱方)、「大瀬氏／函書記」(白長方)の印記あり。「大東急記念文庫貴重書解題」第一巻著録。

他に、お茶の水図書館蔵本 (五冊)、「成貨堂善本書目」著録、

日光天海藏本（五冊、「日光山『天海藏』主要古書解題」著録）、龍門文庫藏本（「古活字版の研究」補訂に依る）、国立故宫博物院（台湾）藏本（五冊、「中国訪書志」著録）等があるが未見。

同 闕名者点 寛永一五（一六三八）年刊（京 風月

宗智）覆〔元和〕刊古活字版

原題簽「孔子家語 一之二（一九之十）」。序目、巻頭題署程式、

版式行款等並に底本である「元和」刊古活字版に同じ。但、句点返点縦点送仮名が新たに附刻さる。巻末尾題葉裏に「寛永十^五 ^寅仲秋吉日 / ^格（低^三）二条通観音町風月宗智刊行」と双行の刊記がある。

本版は前掲古活字版のほぼ忠実なる覆刻本であるが、古活字の明らかなる偽字が訂正される一方で、新たな誤刻を冒している個所がままみられる。次に、王言解第三、大婚解第四、儒行解第五の三篇について、その一端を掲げてみる。上に古活字版の語句を掲出し、下に本版との異同を示す。

（王言解）

内修七教而上不熒 「勞」に作る。是なり。

若乃十一而祝 「税」に作る。是なり。

市塵皆不賦祝（注）「税」に作る。是なり。

教教者治民之本也 「七」に作る。是なり。

埒三而矩 「雉」に作る。諸本「矩」に作る。恐は意を以て改

めしか。

慘怛以補不足 「怛」に作る。「怛」が是なり。

其言可覆 「復」に作る。金沢本群書治要、「復」を「覆」に訂

す。諸本「復」に作るも、「覆」にて可か。

智者莫大乎知賢賢 「廿」を「廿」に誤る。

誅其君而改其政 「攻」に誤る。

吊其民而不糞其財 「奪」に改む。

（大婚解）

男女親君公信 「臣」に作る。是か。

（儒行解）

公自作階孔子賓階 「阼」に作る。是なり。

鷲虫攫搏不裨其勇 「程」に作る。是なり。

圭窾穿墻為之（注）「撓」に誤る。

有北党而危之者身可危也 「比」に作る。是なり。

其志不可棄也 「奪」に改む。

事君清静因事而止之（注）「正」に作る。是なり。

兼此而有之猶且不敢言仁也。「且」に作る。是なり。

全体通してみても、本版は、未だ誤刻が少くないが、底本の偽字誤植が可成の程度に訂正されている。善本罕伝なる当時にあつて、何本に依つて校訂されたものか詳かにしないが、テキストとしてより佳善なものとなつていと言ひ得よう。

〈東洋文庫蔵〉 五冊 (Ⅲ 2 823)

暗褐色艶出表紙 (二七・五×一九・六糎)、原題簽完存。眉上に校語語義等の墨筆書入あり。「寿」(朱外方内円)の印記。

〈神宮文庫蔵〉 五冊 (二甲二は1011)

栗皮表紙 (二八・四×一九・三糎)、原題簽完存。朱引朱句点声点を附し、処々墨筆で訓点が訂正されている。眉上に朱墨両筆で、何孟春本・毛晋本・呉本・錢本・岡補注本・太宰本等との校合並に按語、また荀子・詩・大戴礼・說苑・史記・左伝等に互見の文を抄録引証せる書入あり。末冊後表紙裏に「文久二年^{壬戌}八月京四條通於吉野屋ノ求之ノ五冊之内 松本直八」と墨識語あり。「林崎文庫」(朱長方)の印記あり。

〈同蔵〉 五冊 (増三、二甲五は2170)

縹色表紙 (二七・八×一八・六糎)、原題簽を存す。字旁に墨

筆で振仮名和訓等の書入、眉上に字義、また孟子、周礼等諸書より引抄せる書入あり。「志在ノ千古」(白方)、「神宮ノ文庫」(朱方)の印記あり。

(朱方)の印記あり。

〈同蔵〉 五冊 (二甲二は1012)

縹色表紙 (二六・三×一九・一糎)、原題簽を存す。眉上に、明沈津百家類纂本、唐魏徵本(群書治要)等諸本との校合書入あり。但し、卷一王言解第三に止まり以後は殆ど書入なし。

「宮崎ノ文庫」(朱方)、「神宮ノ文庫」(朱方)の印記あり。

〈東京都立中央図書館蔵〉 五冊 (特別買上文庫715) 蜂屋権園

旧蔵本

縹色表紙 (二六・八×一九・二糎)、第四・五冊に原題簽を存し、首三冊には同程式の書題簽が附さる。朱青の句点・朱圈点語義、眉上或は行間に何本・呉本・錢本等との校合、說苑・淮南子・晏子春秋等諸書の抄録引証、また太宰春台・岡白駒の所論を抄録せる書入あり。「二適ノ主人」(白方、消印)、「号驥ノ山」(朱方)、「驥山樵ノ夫蔵書」(朱長方)、「龍」(白方)、「はちノや氏」(朱方)等の印記あり。

〈同蔵〉 五冊 (加賀文庫787)

濃縹色表紙 (二七・三×一九・二糎)、原題簽を存す。但し汚

損あり。行間或は眉上等余白に墨筆又は朱筆の語義倭訓校語等の書入密、また、胡粉・朱で訓点振仮名を訂正し、新たに朱引返点送仮名縦点圈点声点[?]が施さる。

〈静嘉堂文庫蔵〉 三冊 (4470)

新補茶色表紙 (二七・三×一九・五糎)、書題簽「孔子家語寛永板 上(中・下)」と墨書。眉上或は附箋に朱筆の校語等の書入、行間に朱で校字或は訓点[?]が訂正さる。

「和刻本諸子大成」第一輯(東京 古典研究会 汲古書院発行 昭和五〇年)所収の影印本は、本帙を底本とする。

〈慶應義塾図書館蔵〉 享保一七年校合書入 二冊 (16960) 原

口密司寄贈本

空押雷文地蓮花文朱色艶出表紙 (二八・四×一九・六糎)、「孔子家語 上」と墨筆打付書、下冊は書題簽「孔子家語 下」。眉上及び行間に朱墨の一本との校合書入周密。対校の一本は汲古閣刊本と符合する。下冊後表紙裏に「享保十七歳次壬子秋七月十七日移居于觀梅亭即日操毫／同八月廿一日丑時校合畢」と、書入と同筆の朱校読識語あり。「春秋／軒書」(朱方)、「原口／令成」(白方)の印記。

〈斯道文庫蔵〉 五冊 (25A h5-1)

香色表紙 (二七・二×一九・一糎)、原題簽完存。眉上並に行間に朱の校合書入あり。卷二のみ、眉上に墨筆で太宰春台注が移写されている。「仲野家蔵」(緑長方)の印記あり。

〈東京大学総合図書館蔵〉 五冊 (H30 129) 伊地知峻寄贈本

濃縹色表紙 (二五・三×一九・三糎)、書題簽「孔子家語 一(一五)」。眉上及び行間に朱墨の校語、諸書からの抄録引証等の書入周密。処々訓点[?]が訂正され、また春台増注本との校合がなされている。「篤重／之印」(白方)、「公大正丁巳之歳／預託南洲祠堂／伊地知峻」(朱長方)、「伊地／知峻／蔵書」(朱方)の印記あり。

〈同蔵〉 五冊合二冊 (B60 2665) 海保恭齋・漁村・致堂・島田篁邨

遞藏天保一四年致堂書入本

後補茶色表紙 (二七・七×一八・六糎)、「孔子家語補正致堂道人 乾(坤)」と墨書さる。朱句点声点まれに圈点書入、欄上欄脚行間余白に朱墨の校語、諸家所説の抄録等の書入周密。各巻尾題下に次の朱校読識語あり。

癸卯八月朔補正畢致堂源大化記(卷一)

致堂源均校癸卯仲秋三日(卷二)

仲秋初九南総処士海保均比校了(卷三)

癸卯八月十三日斜陽之時致堂海保千春一校（巻四）

癸卯仲秋十九夜致堂山人源均校正（巻五）

八月廿六日致堂山人源均校正（巻六）

仲秋廿七日夜校読畢大化居士（巻七）

仲秋廿八日夜亥時一校了源均記（巻八）

癸卯閏九月十日一校正畢致堂山人源大化識（巻九）

天保十四年歳在癸卯閏九月十二日夜子時一校終／致堂海保

均記（巻十）

尚、巻末刊記左に「南総屋形住人／海保恭齋」なる墨署あり。

「伝経廬／図書記」（朱長方）、「海保先生／自所書録」（朱

長方）、「嶋田氏雙／桂楼収蔵」（朱長方）、「篁邨島／田氏家／

蔵図書」（朱長方）、「南葵／文庫」（朱方）の印記あり。

〈東北大学附属図書館蔵〉 五冊（狩2²³⁴⁰5） 狩野文庫

縹色表紙（二六・六×一九・一糎）、第三冊のみわずかに原題

簽を存するも殆ど剝落。「荒井泰治氏ノ寄附金ヲ／以テ購入セ

ル文学博士／狩野亨吉氏旧蔵書」（朱長方）、「宮」（朱長方）の

印記あり。

〈京都大学文学部蔵〉 五冊

（文哲Ca-6
中II-2）

栗皮表紙（二七・九×一九・二糎）、第四・五冊原題簽を存す。

各冊墨書せる目録題簽が貼付さる。但、首二冊は殆ど剝落。朱

引朱圈点書入、まれに行間に音義等、眉上に校語等の書入あり。

「吉川幸次郎／蒐集書籍／三島海雲記／念財団捐」（朱方）の印

記あり。

〈同蔵〉 五冊合一冊

（文哲Ca-4
中II-2）

鈴木豹軒手沢本

暗褐色表紙（二七・五×一八・八糎）、外題なし。まれに朱引

書入あり。「豹軒／図書」（朱方）の印記あり。

〈同蔵〉 五冊

（文哲Ca-2
中II-2）

鈴木豹軒手沢本

栗皮表紙（二七・二×一九・五糎）、原題簽完存。眉上或は行

間に音義語義校字等の墨筆書入、また処々訓点が訂正さる。「豹

軒／図書」（朱方）の印記あり。

〈大阪大学附属図書館蔵〉 五冊

（01語家
3-02 KOS
孔子徳堂
櫛

西村天囚旧蔵本

褐色表紙（二八・二×一八・四糎）、「孔子家語」と墨書。「黄

龍窟蔵」（朱長方、建仁寺?）、「天囚／書室」（朱方）、「碩園記

念文庫」（朱長方）、「懷徳堂／図書記」（朱方）の印記あり。

〈無窮会図書館蔵〉 五冊（真軒⁸⁷⁸）

空押市松紋香色艶出表紙（二六・二×一八・九糎）、原題簽残

存、但し、下方、殆どが破損。各冊見返に「三浦戡」と墨署あり。

「平／整?／字／伯?／沖?」（朱方）、「石井」（墨長方）、「三浦

／戦印」(白方)、「三浦／氏印」(朱方)、「真軒／蔵書」(朱長方)の印記あり。

〈太宰府天満宮蔵〉 五冊(天満宮172)

灰色表紙(二六・三×一八・八糎)、第三・五冊は橙色表紙、

「孔子家語 一(一—五)」と墨書。朱筆で訓点を訂正、また校字書入あり。「西府文庫蔵書」(朱長円)、「太宰府神／社文庫印」

(朱長方)、「天満宮」(朱横長円)の印記。

国立中央図書館(台湾)蔵の北平図書館旧蔵本二冊は王重民、

「中国善本書提要」著録本か。卷末刊記前に、「此本不知出何本、然佳処時出諸本上。昔桐城蕭敬孚得此本。乃謂宋刊大字本不足存、以歸賈池劉氏。余以此本校黃周賢本一卷、乃知敬老之言不誣。庚申冬十月朔夕。海寧王国維記」なる民国八年の王国維手書題識がある(国立中央図書館善本題跋真跡)に依る、原は句読点無し、此の題識は「觀堂別集補遺」に「日本寛永本孔子家語跋」として収録。「静安」、「王国維」等の印記ありと。

他に、同館蔵五冊、国立故宫博物院(台湾)蔵二冊、北京図書館蔵三冊等国外流出本も少くない。

又〔寛保二(一七四二)年〕修〔(京)風月堂〕

返点送仮名縦点を削り去り、句点のみを残し、眉上に新たに、

行二字有框の校語注が附刻さる。また、目録末の原刊記の後に、次の木記を新たに刻入す。即ち、「補註家語成。已佈海内。旧板廻属徇狗。夫涇目／渭濁。不胥入奚微湜湜。於是句去須丁断尾。巖／然始為華本。再据諸家。洮汰殺訛。微独徵古湜／湜。王氏之旧亦復厥真云／壬戌仲冬(隔七)風月堂」と。「補註家語」とは寛保元(一七四二)年風月堂刊行せる岡白駒補注の孔子家語を指し、「旧板」とは本版未修本即ち寛永一五年刊本のことであり、とすれば「壬戌」は寛保二年に繋げて相違ない。

尚、本版の如く原版の訓点を除去し、白文本として重印され通行した例に、寛永一三(一六三六)年、京都八尾助左衛門尉刊の「史記評林」があり、初印より一〇〇年後の元文元(一七三六)年に、京都書肆錢屋庄兵衛・林権兵衛により加修重印されている(本論集第二十輯362頁参照)。

〈天理図書館蔵〉 二冊(124.1)

茶色表紙(二七・〇×一九・三糎)、元題簽剝落。まれに朱圈点、眉上に標注書入あり。末の刊記左方に「吉田源左衛門」と墨署さる。

孔子家語 一〇卷 〔魏〕王肅注 明嘉靖三三(一五五

四) 年刊(蘇州) 黄魯會 翻南宋刊本

同 民国初刊(上海 商務印書館) 影印江南圖書館

藏明翻南宋刊本 四部叢刊初編子部所収 中三冊

原版未見。丁氏旧藏南京圖書館藏本(四冊、「善本書室藏書志」卷一五著録本、即ち四部叢刊の底本)、北京圖書館藏本(兩帙、一は五冊蔡瑛捐贈、一は二冊邢之襄捐贈)、国立中央圖書館(台湾)藏本(兩帙、一は一〇冊、一は二冊朱校本)がある。

四部叢刊本に依れば、扉裏に「上海涵芬樓借江南圖書館藏明翻宋本景印、原書版匡高宮造尺五寸三分、寬四寸三分」とあり、首に、「孔子家語序」(王肅原序、第二行低一〇格に、「王氏」と題す)、「孔子家語目錄」を冠す。末に「孔子家語后序」(次行低六格「吳郡黄魯會撰」と)が有り、「後序」を載せない。本文巻頭、「孔子家語卷第一」、次行低一〇格「王肅注」(卷二以下題署せず)、第三行「相魯第一」と題し本文に入る。尾題は首題に同じくも、三一五、七―十の各巻は巻数下右に小字で「終」字あり。左右双辺、有界九行、行十六字、注小字双行行十六字。版心白口単白魚尾、「孔子家語卷幾(丁付)」。卷一〇尾題下に隸書小字双行で「歲甲寅端陽望吳時/用書黄周賢金賢刻」と原刊記あり。尚、「善本/書室」、「八千卷/樓所藏」、

「八千卷/樓藏/書印」、「江蘇第一/圖書館/善本書/之印記」、「濟陽/文府」の原印並に、卷末に「道光甲午孟冬耕蘭氏校」の原識語を存す。

黄魯會后序に「今考之藝文志有二十一卷、王肅所註、何乃至宋人梓伝者止十卷、已亡其大半、如由混簡錯秩、則又不可分析。比之王広謀句解者、又止三卷、近何氏孟春所註、則卷雖盈於前本、而文多不齊。余頗惜王肅所註之少播於世、力求宋刻者、而校仇之、僅得十之七八。雖宋刻亦有訛謬者也、然此書乃孔氏久成之典。余距孔氏一千五百餘年、序之僭妄深矣」(筆者)と。

此の黄魯會刻本を、「天祿琳琅書目」続卷五に宋版として著録するのは失考である。所拠の底本宋板は失伝して不詳。丁丙は「書中祺字欠末筆、避度宗嫌名、似咸淳年間刻。考咸淳無甲寅、其槩法特精、疑其源当出於南宋旧刊、時用重為影写上版。故祺字依旧欠筆」と(善本書室藏書志卷一五)。

黄魯會、字は得之、中南先生と称せらる。吳県の人。明成化二三(一四八七)年生、嘉靖四〇(一五六一)年歿。正徳一一(一五一六)年の挙人。嚴嵩の招邀を受けたが応ぜず、父より授った大金を散じて弟省曾と共に購書・刻書に精励した。著述に「続吳中往哲記並補遺各一卷」・「南華合璧集五卷」がある。

蔵書家・刻書家として名があり、嘉靖年間に、本書の他、漢唐三伝・方脉拳要・兩漢博聞・南峰樂府・太平樂府等諸書を刊刻している。黄周賢は嘉靖隆慶間の蘇州の良工で、魯會刊の方脉拳要巻後に「甲寅歲立秋日吳時用書黄周賢刻」との兩行ありと（中国版刻図録）。また四庫提要總集類存目三の二十六家唐詩の項に「目錄後題曰、姑蘇吳時用書黄周賢刻、疑明末書賈所為云」と云う。提要の如き明末以降すのは行き過ぎで、本書及び方脉拳要の刊記の甲寅は版刻図録に従い嘉靖三三年に繋る可きである。

此の本には次の如き脱文錯簡がみられる。

1 儒行解第五の「不更其守」と「往者不悔」の間、「鷲虫攫搏不程其勇引重鼎不程其力」の一五字。

2 同じく、「博学以知服」と「雖以分国」の間、「近文章」の三字。

3 問礼第六言偃問曰の章、「列其琴瑟管磬鐘鼓」と「以降其上神」との間、「以其祝嘏」の四字。

4 同じく、「以嘉魂魄」と「然後退」との間、「是謂合莫」の四字。

5 好生第十虞芮二国争田の章、「行者讓路」と「入其朝士」の間、「入其邑男女異路斑白不提挈」の一二字。（元和古活字版も同じ）

6 六本第十五子夏（此本作「賈」）三年之喪畢の章、「君子也」と「子貢曰」の間、「閔子三年之喪畢」より「君子也」に至る三九字。

7 執轡第二十五子夏問於孔子曰の章、「豕四月而生」と王注「音不過五故五為音」との間、注「時以次斗」の四字及び以下の「五九四十五為音音主獲故獲五月而生」の十七字。

8 礼運第三十二、「人情以為田」下の「故人以為奧」の五字、及び、「四靈以為畜」下の「故飲食有田」の五字。（元和古活字版も同じ）

9 七十二弟子解第三十八顔回、「字子淵」下の「少孔子三十歳」の六字、「三十一早死」下の注「此書久遠」より「或為誤」に至る八〇字、「門人日益」下の注、「顔回為孔子疏附之友能使門人益親夫子」の一七字。

10 同閔損、「字子騫」下の「少孔子五十歳」六字。

11 同宰予、「有口才」下の「以言語」三字、及び「著名」下の「仕齊」以下二九字、注六字。

12 同端木賜、「衛人」下の「少孔子三十一歳」七字、及び「孔子每誦」以下一一四字、注二五字。

13 同冉求、「仲弓之宗族」下の「少孔子二十九歳」七字、及び「以政事著名」下の「仕為季氏宰」以下三二字。

14 同仲由、「字子路」下の「一字季路少孔子九歳」九字、及び「以政事著名」下の「為人果烈」以下五一字、注一六字。

15 同言偃、「字子游」下の「少孔子三十五歳時習於礼」一一字、及び「以文学著名」下の「仕為武城宰」以下の二六字。

16 同卜商、「衛人」と「無以尚之」の間、「字子夏」より「時人」に至る三三字、注一二字。

17 曲礼子夏問第四十三季桓子死の章、「他日又問」と「夫子曰」との間に曲礼公西赤問第四十四孔子母既喪の章の「墓而不墳」

より同原思言於曾子曰の章の「知喪道也」に至る三九一字、注六六字が竄入。

18 曲礼公西赤問第四十四孔子之母既喪の章の後半、孔子有母之喪の章、顔回死の章、原思言於曾子曰の章の前半、前記の如く

曲礼子夏問に竄入。

19 同孔子嘗の章、「今夫」下、「子之祭」以下「各有所当」に至る九四字、注一四字を脱す。

20 同衛莊公之反国の章以降、即ち同章七四字、季桓子將祭の章六〇字注六字、公父文伯之母の章八九字注八五字、季康子朝服

以縞の章三八字注四六字及び、それに続くべき後序全文を脱す。

(以上、標出語句及び脱文字数は、劉氏覆宋刊本に拠って記した)

以上、此本には脱文錯簡少くなく、校訂の粗さを露呈しているが、宋本系王注本の伝本が殆ど跡絶えていた明代中葉嘉靖期に於て、宋刻を求め、それを翻刻して後世に伝えた黄魯曾の功績は多とせねばならない。恐らく所拠の宋刊底本にして、全本ではなく、破損欠損の多い不全本であったと考える。全篇通してみて、覆宋刊本、元和古活字版とは、基本的な異同は無く、祖を同じくする同系統の本を底本としている。次に、賢君篇第十三に即て、この三本間の出入を掲げる。(古活字版の()内は、寛永覆古活字刊本)

翻南宋刊

古活字版

覆宋刊本

曰靈公弟子渠牟 ○×××○○○ ○×××○○○

有士×林国者 ○○×○○○ ○○日○○○

荒於淫樂耽酒於酒 ○于○○○○于○ ○于○○○○于○

不比親教近疎遠也 (注) ○○○○○○達○ ○○○○○○

惕焉如懼 ○○○○ ○然○○○

賢也既不遇天 ○○○○○天 ○○○○○○

皆類是也 ○是類○ ○是類○

恐上千忌諱也 (注) ○○軍○○○ ○○触○○○

恐陷累 (注) 懼○○○ 懼○○○

在位之羅網×(其) ○○○○○×

孔子閒処 ○○閑○ ○○閑○

曰由願聞其人也 ○×○○○○○ ○○○○○○

其×幼也敏而好學 ○由○○○○○ ○×○○○○○

有道而能下人 ○○○○○○ ○×○○○○○

無下天下×君子哉 ○○○○居○○ ○○○○×○○

処雖僻而政其中 ○○○○其政○ ○○○○其政○

首拔五叛爵之大夫 ○○○○殺○○ ○○○○殺○○

五叛大夫百里奚也(注) ○殺○○○○○ ○殺○○○○○

有語寡人× ○○○○× ○○○○日

知反已之謂也 ○及○○○○ ○及己○○○

先に掲出した始誅第二、弟子行第十二の兩篇を合せみても、

字句の異同は、脱字衍字、助字の通用、字形字音の相似等に依るもので、基くテキストの相違を顯示する程のものはない。また、此本は、この異同表からみるかぎり、一は覆宋版に合し、

一は古活字版に一致し、或は三者並に異を示す場合もあり、何れにより近似するか遽に断定できない。併しながら古活字版とは四四の篇名が悉く同じであり、覆宋版には無く此本後半にみ

える音注が古活字版と全て一致し、さらに、好生第十魯公素氏

將祭の章、覆宋本の「知其將亡何也」六字を、此の兩本は「日

不及二年必亡今過暮(暮)而亡夫子何以知其然孔子」の廿一字

に作り、執轡第二十五子夏問於孔子曰の章、「王者動」と「必以

道」との間に、兩本共に「必以道動靜」の五字があり、また、

弁樂解第三十五周賓牟賈侍坐の章、「庶民施政」と「既濟河西」

との間、覆宋本は「庶士倍祿」の四字を脱するが、この兩本に

は備っている。以上、合せ考えるに此本は元和古活字版により

近い關係を有するテキストと看做して良からう。

尚、四部備要本は、扉に、「拋汲古閣本校刊」とあるが、後

序無く、脱文錯簡も悉く此本に一致し、末に原刊記、黃魯曾后

序もあり、本版に依拠せる翻印である。

孔子家語 一〇卷 魏王肅注 明金蟠・葛鼎校 [明

末]刊(永懷堂)

見返、「永懷堂授古本/孔子家語/ 金閭葉顯吾 周交甫發兌」と題し、

郭上方外右から左へ「魏王子雍註」と。首に「孔子家語序」(第

二行低一六格「魏王 肅子雍撰」と題署)、次に「家語目錄」あ

り。本文卷頭、「孔子家語卷一」、第二行低二格「魏散騎常侍領

秘書監兼崇文館祭酒東海王 肅注、第三行低一格「皇明(隔二格)

後學東與金 蟠訂」(卷二・四・六・八・十は、訂者名を「葛

籛」とす)、第四行低二格「相魯第一」と題す。尾題は「孔子

家語卷幾終」。左右双辺(一九・七×一一・八糶)、有界、九行廿五

字、注小字双行行廿五字、句点(正文には「。」、注文は「、」)

附刻。版心白口單黒魚尾、上象鼻に「家語」、中縫に「卷幾(篇

名) (丁付)」、下象鼻に「永懷堂」と題さる。各篇毎に改葉。

此本は、篇名は元和古活字版・翻南宋刊本に悉く一致してい

るが、一部、篇次に違いがある。次にその異同を示す(括弧内

は上掲諸本の篇次)。即ち、巻八までは変りないが、巻九に正

論解第三十八(巻九第四十一)、曲礼子貢問第三十九(巻十第四

十二)、曲礼子夏問第四十(巻十第四十三)、曲礼公西赤問第四

十一(巻十第四十四)を、巻十に本姓解第四十二(巻九第三十

九)、終記解第四十三(巻九第四十)、七十二弟子解第四十四

(巻九第三十九)を配す。この篇次次第は本版刊行に先行する

後掲の何孟春注本に合致している(但し、巻立は異なり、篇名

に若干の相違がある。266頁参照)。

本版は、テキスト上から言えば上掲諸本と系統を違える本で

はなく、正文注文ともに甚だしい乖異は認められない。次に、

本命解第二十六に即き、覆宋刊本、元和古活字版(字旁の()

内は寛永覆古活字刊本)、翻南宋刊本(四部叢刊影印本に依る)

との異同を表示してみる。

永懷堂刊本

翻南宋刊本

元和古活字版

覆宋刊本

1 故曰形於一也 (注)

○○○○○

○○○○○

○○○○○

2 不能食不能行不能言

○○○○○○○○

○○○○○○○○

○○○○○○○○

3 煦晴転也 (注)

○○人○

○○○○

○○○○

4 然後能食替而生臙然後能行

○○○○××××××××

○○○○××××××××

○○○○××××××××

5 三年顛合顛頂門 思晋反然後能言

○○顛○○××××○○

○○顛○○××××○○

○○顛○○××××○○

6 八月生齒八歲而齟二八而化

○○○○○○○○××××

○○○○○○○○××××

○○○○○○○○××××

以上四四件の異同の内、覆宋刊本との異同は三九件、古活字版とは二四件であるのに比し、翻南宋刊本とは七件あるのみで、異同内容を考慮しない単純な数字の上での比較ではあるが、対校三本のうち翻南宋刊本が最も本版に近縁な関係にあると看做して良い。四四篇のうちこの一篇のみより安易に全体を類推することは危険であるが、忽々の間に通覧比較してみた限り、この関係は全篇に亘っていると云える。更に先に掲示した翻南宋刊本の脱文のうち、1の一五字、2の三字、3の四字、4の四字、5の一二字、7の一七字及び注四字、9の注九七字、11の注六字、12の注二五字、14の注一六字、16の注一二字は本版も同様に脱している。また、古活字本に見られた音注は、前半には無いが巻六以降はほぼ全注合致する。この点でも翻南宋本と軌を一にしている。一方で、翻南宋本の脱文のうち、今示したもの以外は全て備っており、17・18の錯簡もない。また異同表の第四項「基而生贖然後能行」及び第六項の「二八而化」は衍文とはみられず、脱文を補訂せんとする校訂者の意が伺える。因みに、この兩句は後述する何孟春注本に見えている。以上要するに、本版は翻南宋刊本を底本としつつ、明末に見存する諸本、ことに何孟春本を参校したものと看做して良いであろう。

永懷堂は明末、葛氏の私塾か。永懷堂刊行の本に、崇禎一三年序刊の「十三經古注」、崇禎刊の「古文正集」があり他に、「明代版刻綜録」には、天啓刊「弦雪居重訂遵生八箋一九卷」、及び「戦国策考正一〇卷」を載せる。また、金蟠、葛鼎（蕪の兄）編訂本に崇禎一〇年序刊の「史記彙評一三〇卷」がある。

葛蕪、字は靖調、呉県の人で崇禎の挙人。「古文正集」一編首に葛氏の世次が附され、それに依れば、父は「錫璠、字魯生、号中恬。万曆丁酉科鄉試第四十名、辛丑科会試第四十一名、廷試第二甲第十八名。歴仕河南廉使、崇禎戊辰奉詔加級二品」とあり、その子に鼎字謙調、蕪字朗調、蕪字靖調、鼎字端調、鼎字竝調、贈字毅調、剛、鏞を、孫に雲蘭字湘九、雲芝字瑞五、及び雲菴を挙げている。蕪は錫璠の第三子であろうか。同書に崇禎癸酉（六へ一六三三）年）秋日葛鼎端調甫書于永懷堂の自序があり、葛氏兄弟の研鑽習字の様、収書の苦心等語られていて興味をそそるが、童年にして母を失してより、外傳のもとで起居を共にした兄蕪靖調に言い及ぶところが多く、早くより古学を好んだと言ひ、後、琴川に僑居したとも言うが、経歴事績に就ては未だ詳かにしない。

金蟠についても事歴未詳。内閣文庫蔵「十三經古注」首の

「十三經題辭」末に「皇明崇禎歲在己卯九月望日東吳金蟠題」と、次の「刻十三經全註凡例」末には「皇明崇禎歲次庚辰清和月望東吳鹿城千仞沈雲翔識／本姓金一名蟠」と題され、両題署とも、「沈雲翔／字千仞／本姓金／一名蟠」と印記が並び刻されている。従って金蟠は即ち沈雲翔、金は本姓で、字は千仞、東吳とあるから蘇州の人である。先にふれた「古文正集」の葛鼎自序に「兩弟（即ち鼎、黼）俱從千仞沈師遊」とみえ葛氏とは親交があったものの様である。

〈内閣文庫蔵〉 二冊（298 17）

茶色表紙（二四・五×一四・六糎）、「孔子家語一之五（六之十）一（二止）」と墨書さる。封面は藍刷。卷一第二葉裏、三葉表欠葉、従って、相魯篇の後半を闕く。「昌平坂／學問所」（墨長方）、「文政丁亥」（朱・無郭）、「大学校／函書／之印」（朱方）、「浅草文庫」（朱長方）、「大日本／帝国／函書印」（朱方）の印記あり。

又「清」修

見返は、題署程式は原刻本に同じくも明らかに別板。また、卷一〇末葉も異板で、表第四行「右件夫子七十二人弟子皆升堂入室者」の一行が無く、尾題を「十卷終」とする。

〈内閣文庫蔵〉 二冊（298 12）

淡茶色表紙（二三・四×一五・一糎）、「孔子家語上（下）一之五（六之十止）」と墨書さる。首四卷、眉上に朱墨の校語等の標注書入、朱句点朱引が施さる。「昌平坂／學問所」（墨長方）、「文化丁卯」（朱・無郭）、「大学校／函書／之印」（朱方）、「浅草文庫」（朱長方）、「日本／政府／函書」（朱方）の印記あり。

孔子家語 一〇卷弁義総目一卷附録一卷（魏王肅注）

明陸治校 明隆慶刊

未見。王重民「中国善本書提要」儒家類冒頭に著録する米国会図書館蔵の両帙各六冊、陸治校刻本或は陸治校定本が此本に相当するものようである。両帙の解題に依れば、此本は、九行十六字、注雙行二十一、二字不等（一八・七×二二・六糎）。首に陸治の「弁義総目」一卷、「附録」一卷があり、「考証凡例」及び陸治「題辭」の後に「長洲顧標写、章抜刻」と刻され、版心下象鼻に章右之、方瑞先等の刻工名がある。原題「魏景侯王肅註」。陸治の按語を附せる「旧序」、「王鑿序」、「陸治序」、隆慶六年（一五七二）の「徐錫祚跋」ありと。

刻工章右之、鈔手顧標の名は、明万曆四年吳興凌稚隆刊の

「史記評林」にも見え、隆慶万曆初間吳蘇地方に於て刊行されたものであるう。

北京図書館蔵の一本(五冊)、北京大学図書館蔵李盛鐸旧蔵の一本(六冊)、上海図書館蔵の一本(清蔣鳳藻跋)、国立中央図書館(台湾)蔵の一本(八冊、北平)、国立中央研究院(台湾)蔵の両本(八冊、四冊)は同版或は同種本であろう。本邦に於ては未だ儲有架蔵する所を聞かない。

陸治、字は叔平、吳県の人で包山子と号した。明弘治九(一四九六)年生、万曆四(一五七六)年歿。「陸包山先生遺稿」(清初輯編稿本 国立中央図書館〈台湾〉蔵一冊、「歴代画家詩文集」第一輯に影印さる)に「題漢集家語序後」、「題孔安国伝略後」、「刻家語題辞」の三文が輯められ、「刻家語題辞」に「予觀王文恪公震沢長語、乃知近代所行之孔子家語、未為完書、而以魏王肅所註本、為得其伝。(略)文恪幸見肅本、親為校讎、將刻而未及。其仲子延素、復將刻之以成先志、俾予考証、而又未及焉。此編留予山中。然字多古文、而肅註綜博簡蔽、伝写又多訛謬、未易通解。予恐其伝之幸存、而復失、魯魚之仍襲而益多也。乃忘其淺陋、校而梓焉。其文則考之六書、其散見礼經子史、間有一二發明者、采之註疏、其毀蝕無考者、闕之」(筆者句点)

と見え、この本は、王鏊所得の王肅注本に据り、陸治が校定刊行したものであることが判明する。ちなみに、王鏊は王肅注本を得た顛末を「余少則讀家語。後閱他書、有云事見家語者、無之、訝焉而莫知所謂。一日閱漢書藝文志、載家語二十七卷、顔師古註云非今所有家語也。乃知家語本有不同。徧索日本不可得。一日至書市、有家語曰王肅註者。閱之則今本所無多具焉。乃知今本為近世妄庸所刪削也。(中略)幸王肅本尚存、而人間已難得、以何吏侍(孟春)之好古、謂不可得、而余偶得之。豈亦天之未喪斯文也歟」(震沢長語卷上経伝、筆者句点)と述懐している。鏊、字は濟之、文恪は諡。吳県の人。弘治正徳の間、侍講学士・講官・吏部右侍郎・戸部尚書を歴任、嘉靖三年卒す。

「題漢集家語序後」及び「題孔安国伝略後」の両文は、「後序」前半の、家語の源委流伝を述べる部分を「孔氏之仕漢元封間者、集其先聖家語而自叙也」と解して、何孟春等王肅偽撰とする諸家の説を駁し、後半の孔安国略伝及び孔衍の上書を字義通りに解して、魯恭王が孔壁より得た文を漢天漢中に孔安国が集録せる四十四篇と、後、河平中劉向が校定せる二十七篇と、合せて漢時三度の家語纂定がなされ、王肅が注せる孔猛より得たとする本は、孔氏家伝の真籍であつて、孔壁の旧を存すこと疑議無

しと説く。

本書に就て、「絳雲樓書目」論語類孔子家語条下の陳景雲注に「王淳之（鑿、淳は済の譌か）得之、欲刻不果。後其子授之、陸叔平校梓。頗多紊乱、尽失日本之真面目矣」とみえ、毛晉は「其病在倒顛」と、「四庫簡明目録標注」は「劣」と記して評価は低い。しかしながら、元明の間伝を絶ったかの如くであった王肅注本を黄魯曾にやや遅れてではあったが、校訂刊行して後世に遺した陸治の功は少しとしない。

尚、前に無注本の項で掲げた「天禄琳琅書目」後篇卷五著録の「家語^{二函}十三冊」は、その解題に依れば、首に「漢集家語序」「孔安国伝略」を有すとあり、前の陸治の文の標題と符合する。陸治校本は、その本とは、無注とある以上同種本ではあり得ないが、何分かの連絡が有るか。後考を俟ちたい。

孔聖家語図 一一卷 「魏王肅」注 明吳嘉謨集校

明万曆一七（一五八九）年序刊

首に、「孔聖家語図題辭」（「常熟王鑿題」、震沢長語卷上経伝所掲の文と、略同文）、「孔聖家語図叙」（「瑯琊王世貞撰」）、「孔子家語図叙」（「万曆己丑歲孟春人日武林後学吳嘉謨謹叙」）、「家

語図凡例」、「孔聖家語図目錄」を冠し、末に「孔聖家語図跋」

（「万曆己丑授提貞于孟陬惟癸亥仁和後学楊士経謹識」）がある。王肅原序及び「後序」は無い。卷一は首題無く、「先聖像」（「新都程起龍伯陽甫薰沐写」・「歎人黄組鐫」）以下「漢高崇祀」図に至る孔子歴年の事蹟を描ける聖蹟図計四〇幅（毎図裏葉に吳嘉謨の題識あり）からなり、末に「歴代賛詠」を附し、尾に「孔聖家語図卷之一」と題す。卷二卷頭、「孔聖家語図卷之二」、次行低一〇格「武林後学吳嘉謨集校」、第三行低二格「相魯第一」と題し本文に入る。尾題は首題に同じ。四周单边（一九・九×一三・六糎）、有界、十行、行廿字、注小字双行、行廿字。版心白口单白魚尾、「孔聖家語図 幾卷（丁付）」、下象鼻にまま刻工名字数あり。刻工名は、黄組（卷一首葉「歎人黄組鐫」と）、信、朱、立。

首の吳嘉謨自叙に、「余按、家語、孔安国得之魯恭王壁蔵文也。篇凡四十有四、劉更生氏校讐、去其二之一。後王肅復得之孔猛家。目与安国合、則四十四篇其全文也。王文恪公嘗録其全、而家蔵之。余得其本釋其義（中略）歲丁亥、余師澹所楊公捧冊魯藩、過闕里謁孔林、獲所伝聖蹟図、帰而授余覽之（中略）赴戊子省試、養静山房者數越月。因取王氏蔵本、按孔氏全書与揚

師所授図、考究其概、或不無異同欠略之差。余遂緝為一書、図按聖蹟之遺文、仍王本之旧、其先後則以孔氏全書為拠、編季則尊周而次及于魯、旁及于列国。考古名公弁論、而以意按之、其毀蝕無考者、則埃博學君子補焉。名曰孔聖家語図、僭以授之剗刷氏」と本書編成の次第を述べ、卷一の図幅は楊澹所が闕里に得た聖蹟図に基き、家語本文は王鏊旧藏本に据つたとする。

凡例末則に「篇章次序、今依何孟春氏編次」と言う如く、篇次は何孟春注本に倣うが、篇名卷立は旧を存す。従つて篇目次第は上掲の永懷堂刊本と一致する。尚、目錄、「本姓解第四十二」の姓字下に「一作始」と注あり。何孟春本は「本始解」に作る。本書は、正文に就きては上掲王肅注諸本に比し字句の出入異同は往々みられるが刪削節略のところは幾ど無く、ほぼ全文を備えている。吳嘉謨施注の要領は凡例に五項目を挙げて示されている。即ち、

- 一 家語中記載、間有闕略、而文不相蒙、其雜見礼經子史、反為周詳、而未經聖賢刪定者、分行補註其闕文之下。
- 一 家語之文、別見於經史百家者、其註疏之說辭雖不一、皆或可以發明王註之所未及、乃參伍其辭、以補註之。
- 一 語中所引詩書、王註多与今文少異。今皆以篇章之名、係詩

書之辭之下、以便參解。

- 一 王註簡嚴未易卒解者、即按經史註疏本文、節抄於王註之後。
- 一 王註伝写雖訛、無經史可拠、及毀蝕無文可考、皆闕之、以俟知者。

しかしながら、勿々の間に通覽した限りにおいてではあるが、たしかに王肅注の旧をよく存し凡例に言う如く、諸書と参伍引証せる吳嘉謨の新注も多見するが、王広謀の句解を其儘、或は同義異句で措替え、或は稍意を加えて挿入する箇所が甚だ多い。まれに、「王肅曰」、「王曰」、「按」と標記するところもあるが、本書のみ披閱しては王肅注、王広謀句解、吳嘉謨新注の別は着き難く、施注の体例を甚だ失しており、杜撰の譏りは免れない。吳嘉謨の事績は未詳。尚、卷一図像の第一幅に署されている書写手に就き、王重民は「起龍即繪『女範編』者、是写絵鑄刻、尽出歛之名手、為可宝也」と（中国善本書提要）。

- 〈内閣文庫蔵〉 六冊（298・30） 林鶯峯旧蔵元文元年榴岡加点点本 白棉紙印本。首冊は淡茶色表紙（二六・九×一七・一釐）、第二冊以下後補空押出つなぎ濃縹色表紙、縹色地の原題簽を存す、「孔聖家語図」。末冊（卷十・十一）を除く首五冊に朱句点（まれに墨句点）朱引が付され、次の朱校読識語がある。

家語以諸本考之以從其宜／丙辰三月 祭酒林信充加朱

(卷三末)

丙辰夫月 祭酒林信充朱了(卷五末)

戸部朱了(卷七・九末)

丙辰は元文元(一七三六)年。「以諸本考之以從其宜」と識すように、処々胡粉で字句を塗沫し、その上に墨筆で加筆訂正されている。「弘文学士院」(白長方)、「林氏／蔵書」(朱方)、「昌平坂／学問所」(墨長方)、「浅草文庫」(朱長方)、「日本／政府／図書」(朱方)の印記あり。

〈同蔵〉 四冊(29832)

淡茶色表紙(二三・六×一四・九糎)、「孔聖家語図卷幾 元(上貞)」

と墨署さる。序目の類は王鑿題辭及び目錄をのこし王世貞叙、吳嘉謨自叙、凡例、楊士経跋を欠く。(以下の諸帙並に、此の叙跋凡例無し)全篇に亘り朱句点朱引が附され、ごくまれではあるが、眉上に墨筆書入があり、内に「純按」とみえる。版面磨滅せる後印本で文字不鮮明なところ処々補筆されている。「昌平坂／学問所」(墨長方)、「文化乙丑」(朱無郭)、「浅草文庫」(朱長方)の印あり。

〈大阪府立中之島図書館蔵〉 六冊(186394)

後補藍色表紙(二三・六×一五・五糎)、外題無し。「银杏館／

蔵書」(白長方)、「立習／書庫」(朱円)、「披沙」(朱長方)の印記あり。

〈東北大学附属図書館蔵〉 四冊(A14,1 Z1-92)

淡茶色表紙(二三・七×一五・七糎)、「家語」と墨書。目錄首葉を王鑿題辭第一・二葉の間に誤綴。相魯第一より、王言解第三までに書入周密。朱引朱句点圈点声点、青筆句点を附し、眉上及び行間に墨朱青筆の校語等の書入あり。「霞樵」(朱)、「石井氏／蔵書記」(朱長方)、「岩梅／谷隠」(白長方)の印あり。

又 後印(名山聚)

「附刻宣聖全図／孔子家語／名山聚蔵板」(上辺上に「西陵原本」と)と題する封面あり。

〈静嘉堂文庫蔵〉 四冊(4472) 中村敬宇旧蔵本

橙色表紙(二三・五×一四・九糎)、「孔子家語図 幾」と墨書さる。ほぼ全帙に亘って正文に藍筆の句点を付し、眉上に藍筆(まれに、朱墨筆を混える)で銭本、華本、一本、別本等との校語等の書入がある。

〈大阪府立中之島図書館蔵〉 四冊(18694)

後補香色覆表紙(二三・七×一五糎)、首冊のみ新補茶色厚表

紙、書題簽「孔聖家語図」、原表紙は淡茶色、「孔子家語」と墨書さる。朱引朱句点、一部に圈点、眉上に朱筆の校字等の書入あり。「星巖」(朱長方)の印あり。封面はないが、同館目録に「名山聚藏板」とあり、恐らくは改装の際欠落したのであろう。

本版は他に、北京図書館蔵本(六冊)、上海図書館蔵本、国立中央図書館(台湾)蔵の四部(八冊・六冊・六冊・六冊北平「中国善本書提要」著録本)等がある。

尚、本書には国立中央図書館(台湾)蔵の明万曆間書林余碧泉刊本があるが、未だ管見に入らない。

孔聖家語 一〇巻 「魏王肅」注 「明」呉嘉謨集校 朝

鮮(肅宗(一六七五—一七二〇)頃)刊 芸閣筆書体

字銅活字本(木活字混入)

首に、「孔聖家語題辭」(「常熟王鑿題」)、「孔聖家語目録」及び「先聖像」一葉(裏に呉嘉謨按語)を冠し、本文巻頭「孔聖家語卷之一」、第二行低一〇格「武林後字呉嘉謨集校」、第三行低二格「相魯第一」と題す。尾題は首題に同じ。但、巻七のみ「家語卷之七」、終尾題は巻数下に小字「終」あり。四周单边(二一・三×一三・五輝)、有界、十行、行廿字、注小字双行、行廿字。版心白口双花口魚尾、「家語卷幾(丁付)」。

本版は前記明万曆一七年序刊の序跋・凡例を欠ける後印本に依り、原本巻一の聖蹟図を除き、巻二より巻十一を巻一から十と巻次を改め、芸閣筆書体字を用いた朝鮮翻印本である。銅活字の不足を木活字で補充している。刊行年は未詳。

〈天理図書館蔵〉 三冊 (124.11)

空押蓮花橙色艶出表紙(二八・八×一八・四輝)、「家語天(地人)」と墨書さる。

〈同蔵〉 二冊 (124.17)

新補黄土色表紙(二九×一八・二輝)、外題なし。「李印/起鑑」(白方)、「衡/伯」(朱方)、「小/松」(白方)の印記あり。

但し、三印並に原印を剪去した後の貼紙の上に捺さる。

同版本と思われるものに国立中央図書館(韓国)蔵本(二冊、同館古書目録四著録)、誠庵文庫蔵本(存首二巻・巻六一八、二冊、同文庫典籍目録著録)、高麗大学校蔵本(四冊、薪菴文庫漢籍目録著録)等がある。

家語 一〇巻附集語二巻 「魏王肅」注 明何棠等標注

錢受益校(附)宋薛摛編 明鍾人傑校 「明末」刊

首に「孔子家語集語序」(「錢唐鍾人傑撰」)、「家語序」(「瑯琊

王世貞撰」、前記吳嘉謨集校本の「孔聖家語図叙」と同文)及び「家語目錄」を冠す。本文巻頭、「家語卷一」、次行低二格「武林錢受益校」(巻二以下題署せず)、第三行低二格「相魯第一」と題し本文に入る。尾題は「家語卷幾終」と。左右双辺(一九・

九×一三・六糎)、有界、九行、行廿字、注小字双行、行廿字、眉上に行四字の標注あり。圈点句点附刻。版心白口単白魚尾、「家語 卷幾 (丁付)」。標注は何棠のほか鍾惺の評を混える。巻次篇目の次第は前記永懷堂刊本、吳嘉謨集校本に一致する。

本版は、正文に就ては吳嘉謨本と異同出入するところは殆ど無く、注は、吳嘉謨本の注文を適宜取捨したもので、何棠等の標注を除けば新たに付補された文は全く無い。従て吳嘉謨集校刊本の翻版とみなしてよい。

刊年は確定出来ないが、掲出する蓬左文庫蔵本が寛永一三年買本であることから、その年、即ち明崇禎九(一六三六)年を下限と定め得る。

〈内閣文庫蔵〉 四冊(29821) 木村孔恭旧蔵本

淡茶色表紙(二四・九×一六糎)、「孔子家語 錢受益校 一之三」

等と墨書(末冊は「孔子集語上下 全」)。「兼葭/蔵書」(朱方)、

「兼葭堂/蔵書印」(朱長方)、「昌平坂/学問所」(墨長方)、「文

化甲子」(朱無郭)、「淺草文庫」(朱長方)、「日本/政府/図書」(朱方)の印記あり。

又 後印(武林「段景亭」読書坊)

「何栢齋評点/合刻孔子/家語集語/ 読書坊蔵板」(武林読書/坊蔵板)の無郭朱印が捺さる)と題する封面を有す。

〈内閣文庫蔵〉 四冊(子1)

淡茶色表紙(二五・四×一六・五糎)、後補黄色地書題簽、「孔子家語 一之三」等と墨署(末冊は「孔子家語 集語 上下」)。

〈蓬左文庫蔵〉 四冊(15643) 寛永一三年買本

淡茶色表紙(二六・六×一六・六糎)、書外題「孔子家語」と墨書(第四冊は「孔子集語」)。「尾陽/内庫」(朱方)の印記あり。読書坊は明天啓崇禎間、関尹子、揚子法言等を刊行せる杭州の書林。

の書林。

家語 一〇巻「魏王肅」注 明何棠等標注「明末」刊

(古吳楊敬泉)

封面、「陳眉公先生重訂/孔子家語/ 古吳楊敬泉梓」と題

す。首に、「家語序」(「瑯琊王世貞撰」)及び「家語目錄」あり。本文巻頭、「家語卷一」、第三行低二格「相魯第一」と題し本文に入る。第二行は題署なく空行(巻一のみ)。尾題は「家語第

幾終」。四周单边（一九×二三・二糧）、有界、九行、行十九字、注小字双行、行十九字。眉上に行三字の標注、句点圈点附刻。版心白口单黒魚尾、「家語 卷幾（丁付）」。

標注は何棠のほか鍾惺の評を交える。首の王世貞序は前記録受益校本と同様、呉嘉謨集校本の序文を転載したもの。

〈尊経閣文庫蔵〉 三冊

茶色表紙（二五・四×一六・二糧）、書題簽、「孔子家語 一 序目并一之三」

等と墨署（五十川某筆）。一部に朱句点、朱引の書入あり。「金沢学校」（朱長方）、「学」（朱円）の印記あり。

新編孔子家語句解 一〇卷 元至正二七（一三六七）

年刊（劉祥卿）

北京図書館蔵、二冊、周叔弢捐贈本。未見。「蔵園群書経眼録」卷七子部一著録。その解題に「元至正二十七年劉祥卿刊本、十行十九字、黒口、单闌、闌上加格注標題、次行題『并依王肅注義詳為句解』。卷五後有牌子、文曰：『清泉劉祥卿家／丁未春新刊行』 鈐有：『孔子七十一世孔□□□□章』。」と。

尚、「販書偶記」卷九著録本あり。或は北京図書館本と同一本か。次の解題を附す。「魏王肅註 元劉祥卿刊 首有原序。

次目録。卷一首頁第二行題並依王肅註詳義為註解等字。每半頁十行。行十八十九字不等。小字雙行。兩截樓版式。上列評語音義。版心上下墨口。惟原序半頁十二行行二十一字。至書中有兩処半頁九行者。較覆宋刊本頗多不同。此原序中荀卿二字。他本作孫卿。又第九卷七十二弟子。他本上多孔子二字。其編次較他本殊異。如此書在卷五。他本在卷六。至原文小註。亦多寡不一。其字多用俗体（中略）卷五之尾刊有清泉劉祥卿家丁未春新刊行十二字木記。首有孔子七十一世孫□印一方。南洲印一方。」と。

此本卷一首第二行に「并依王肅注義詳為句解」と題すとあるが、王肅注を幾分なりとも存するのか、「句解」と題するからには、或は次述する王広謀句解本と連絡を有するものか詳らかでない。今、此所に著録して後考を俟つ。

○王広謀句解本

新刊標題孔子家語句解 六卷附新刊素王事紀一卷 元

王広謀注 元泰定二（一三二五）年刊（崇文書塾）

国立中央図書館（台湾）蔵、大一冊。未見。「中国訪書志」・「国立中央図書館金元本図録」著録。 下述するところは訪書志及び、本文庫に将来せるマイクロフィルムに依る。

首に「新刊標題句解孔子家語目錄」(跨行、次行低六格、「猷堂王 広謀」〔句〕へ以下破損)と題すを冠し、(目錄後、尾題前に、「今將素王事紀別作／一卷附後刊行幸鑒」へ各行跨行)の兩行刊記あり、卷六末尾題前に「後序」を配す。本文卷頭、「新刊標題孔子家語句解卷之一」、次行低九格「猷堂王広謀(以下破損)」、第三行低三格「相魯第一(以下小字双行注有り)」と題し本文に入る。尾題は、首題に同じ。只、卷四のみ末行下方に「家語四卷終(陰刻)」と。四周双辺、有界每半葉十二行、行廿二字、注小字双行、行廿二字。上層を設け要目及び音註を標記、小字行二字、音注標字は大字墨田陰刻。版心小黑口双黒魚尾、「語(或は家語)幾(或は幾フ)(丁付)」。各篇内章節頭に「○」を附す。

附卷は、首に「新刊素王事紀目錄」(跨行)を冠し、次に、「新刊素王事紀」と題し、「魯司寇像」、「先聖歷聘紀年之図」、「孔子世系之図」、「歷代封諡爵号図」並に「歷代追崇事始」を内載し、尾に「新刊素王事紀卷終」(跨行)と題す。目錄尾題前に「泰定乙丑仲夏崇文書塾刊行」(跨行)と刊記あり。

広謀、字は景猷、猷堂と号す。里貫、仕歴等伝未詳。本書は孔子家語四十四篇各篇を適宜刪略し句解並に音注標目を附した

もので、王肅注の旧姿をほとんど存しない別本である。卷立は六卷と上述王肅注諸本と相違するが、篇名篇次は元和古活字版・翻南宋刊本と同じで、相魯第一より五儀解第七までを卷一、致思第八より賢君第十三を卷二、弁政第十四より在厄第二十を卷三、入官第二十一より論礼第二十七を卷四、觀鄉射第二十八より七十二弟子解第三十八を卷五(目錄は問玉第三十六まで)、本姓解第三十九より曲礼公西赤問第四十四までを卷六とする。尚、「御本日記統録」卷中(右文故事卷五)、慶長御版本孔子家語の条で、後掲の足利学校蔵の古写本にふれ、「予又嘗テ元ノ刻本ヲ見ル即此写本ノ原書ナルベシ」とみえ、また、「経籍訪古志」卷四、標題句解孔子家語六卷朝鮮国刊本条下に「聞求誨堂蔵元稟零本疑此本所原」と言う。我国にも元刊本が伝存したようであるが、その現所存は不明である。

四庫未収。只、儒家類存目一に本書注者である元王広謀編の「聖賢語論二卷^{浙江朱舜尊家曝書亭蔵本}」を著録し、その解題末に「何孟春註家語、称有元王広謀本、多所竄乱。今未之見。此書当即一時所成也」とみえ、清乾隆当時既に伝本稀少であったようである。尚、聖賢語論に就き提要は「其書以礼記・家語・史記諸書所載孔子言行、始於相魯終於公西赤、分四十四篇。首有孔子像・素

王事實、又載至元十年所定廟制及祭祀儀注樂章。後有嘉靖癸巳書林余氏自新齋跋語。蓋明人所重刊也。卷端題曰新刊標題明解聖賢語論」と。また「適園藏書志」卷四史部伝記類に四卷旧鈔本を著録し「首行新刊標題明解聖賢語論卷△次行猷堂王広謀景猷句解、郷進士安福彭參校正、後有嘉靖癸巳書林余氏自新齋跋語」とみえる。両本ともに現所在が未詳で、寡聞にして他に伝本の遺存するところを知らないが、提要に依れば、相魯篇より公西赤篇に至る四十四篇に分ち、素王事實等を附載し、巻頭題署の程式が類似する。或は本書と同類同内容の改題改編本ではあるまいかとの疑念を懐かせる。「鄭堂読書記」卷三十六の本書解題に附記して「別有明嘉靖癸巳書林余氏自新齋新刊標題明解聖賢語論四卷、則又取是本之注而刪改之、并改其書名」とあるが、周氏実見実査した上での言なるや否や。後考を俟ちたい。

同 朝鮮太宗二(明建文四へ一四〇二)年刊 覆元刊本

成篋堂文庫旧蔵お茶の水図書館蔵、二冊。金沢文庫本。同館整理中の為閲覧出来ず未見。「成篋堂善本書目」「金沢文庫本図録」の解題及び所掲の書影に拠れば、左右双辺、十二行廿二字、注小字双行、眉欄標注行二字。縦六寸一分半、横三寸九分、新

刊素王事紀尾題後に「右家語古今天下宝之而吾／大東末有板本予得是本／命刊于江陵以貽後学焉建／文四年七月望潘溪朴崑誌」なる刊語があり、「金沢文庫」(重郭朱印、第廿二号印)、「島田重礼」、「敬甫」の印記を有す。巻一首の書影を上述元泰定二年崇文書塾刊本と比較すれば、行格配字全く同じく、建安体の字様も頗る近似し、本版は元泰定刊本、或はその祖本、若くはそれと弟兄関係にある一本、又はそれを底本とする覆刻本に拠れる覆刻重刊本と推定される。但、上層標題には小異があり、上掲元版「為魯／中都／宰制／養生／送死／之節」とあるところ、この本は「孔子／為中／都宰」とし、「為魯／司空」とあるところを「孔子／為司／空」とする。以下掲出する室町写本・慶長古活字版・明版の標注は此本を踏襲している。

「経籍訪古志」卷四著録の「標題句解孔子家語六卷」は同版本か。渋江抽斎旧蔵、現所在不詳。「聞求誨堂蔵元槧零本疑此本所原」と。尚、「国立中央図書館(韓国)善本解題」著録の「新刊標題孔子家語句解六卷二冊(零本)」も同版本か。「泰定甲子秋蒼巖書院刊行」の刊記ありと志さる。

同 室町写

〈足利学校遺蹟図書館蔵〉 二冊(505-10-2) 永正一二(一五一一

五) 年上杉憲房寄進本

新補香色刷毛目覆表紙(二九・七×二〇・五糎)、書題簽「孔子家語 上(下)」、元表紙は本文共紙、「孔子家語 乾(坤)」と墨書さる。裏打補修を施す。首に「新刊標題句解孔子家語目錄」(大字跨行に題し、目錄尾題前に大字跨行にて「今將素王事紀別作／一卷附後刊行幸鑒」と原刊記を移写す)、次に「新刊素王事紀」(目錄は無い)あり。「後序」は卷六末に配さる。本文卷頭「新刊標題孔子家語句解卷之一」、次行低九格「猷 堂 王 広謀 景猷 句解」、第三行低三格「相魯第一(小字双行注あり)」と題す。尾題は首題に同じく、只、卷四のみ「家語四卷終」。四周单边(二二・二×一六・五糎、高さ一・八糎の上層を含む、只、後序部分には上層はない)、有界(界幅一・三糎)、十二行、行廿二字、注小字双行廿二字、上層標注小字行二字或は三字、音注標字は大字。版心、魚尾なく、中縫に「家語幾(丁付)」、丁付下、下象鼻に長さ約四糎の墨線を施す。篇内章節頭には「○」を附して区切とする。両冊末葉裏に「永正^乙仲春日／寄進藤原憲房(花押)」の墨署があり、両冊第一葉及び卷一首葉の眉上に「足利学校之公用也」と右から左へ横書されている(第二冊首葉は破損して殆ど読めない)。寄進題署は憲

房自書とされている。

本帙は、卷五末葉を欠き、また卷六第六丁は框郭界線のみの白紙となっており、曲礼子夏問第四十三の「抗世子法」より、曲礼公西赤問第四十四の「○子游問於孔子曰^{子游}」までを脱している。所拠の底本の脱簡に依るものと思われる。

本鈔本は、目錄の体式、本文の行款配字悉く前掲元泰定二年刊本に一致し、この元刊本と同種刊本に依れる臨写本であることは一目して分明である。只、卷一首葉表の書影を比較するに、上層の標注は前述の朝鮮刊本の方に符合し、この本の標題音注は、上記元刊本とは増損出入異同の箇所が相当数に昇る。「右文故事」、「経籍訪古志」ともに元刊本に原くとするが或は、前記朝鮮太宗二年覆元刊本である金沢文庫本を直接の底本とするか。金沢文庫本或は本邦旧存の元版を属目する好機を希い、後考確認を期したい。「右文故事」附録卷四、「経籍訪古志」卷四、「足利学校貴重特別書目解題」著録。「足利学校善本図録」、^{増補新訂}足利学校の研究、「国史大辞典第一卷」(東京 吉川弘文館 昭和五四年)の図版(足利学校の蔵書)に書影がある。

上杉憲房は足利学校再興に尽力せる安房守憲実の孫。永正二年より、大永五年病没するまで、関東管領の要職にあり、一

方で足利学校の運営に意を用い援護を与えている。憲房寄進にかかる漢籍は、他に明正統刊本「後漢書」、明初刊「新增音義釈文古今歷代十八史略」が遺存する。

標題句解孔子家語 三卷附新刊素王事紀一卷聖朝通制

孔子廟祀一卷 [元]王広謀句解 朝鮮明宗朝(一五

四六一六六)刊 古活字(乙亥字)本

国立中央図書館(韓国)蔵、二冊、一山文庫本。未見。同館

善本解題・古書目録3著録。第一冊は成聴松自筆抄本と。刊年は、金斗鐘氏の所説(韓国古印刷技術史 ソウル 探求堂 一九七四)に従う。「経籍訪古志」巻四著録の「朝鮮国活字刊本容安書院蔵」は或は本乙亥字本か。現所在未詳。

同 朝鮮[明宗朝]刊 覆乙亥字印本

序目無く、本文巻頭、「標題句解孔子家語巻上」、次行低六格「猷堂王 広謀 景猷 句解」、第三行低五格「相魯第一(下に小字双行注)」と題す。尾題は首題に同じ。只、下巻のみ、巻数を「巻之下」と題す。四周単辺(二三・八×一六・五糎、高さ二・六糎の上層を含む)、有界、十行、行十七字、注小字双行、行十七字。上層標注行二字。版心白口、双花口魚尾、「家語上

(或は一、中・下)(丁付)。各篇中章頭に「○」を標記し、上層の音注標字は大字墨田陰刻(陽刻墨田無きもある)。魚尾にまま山・晋・七・昌等の字を陰刻、また下象鼻に「宝允」、中縫に「印軒刀」等と刻工名もまれにある。巻下尾題の前、本文末行より二行を隔て、小字にて「延祐丁巳陳宝夫刻于精一書舎」と原刊記がある。巻下尾題後に「後序」、次に「新刊素王事紀目録」、目録尾題前隔一行に「泰定甲子秋蒼巖書院刊行」の原刊記を有す。素王事紀尾題後に「聖朝通制孔子廟祀」(版心「孔子廟式」と題す)計一八葉を附し、末に「標題句解孔子家語巻下終」と再度尾題を題署する。篇名篇次は並に六巻本に同じで、相魯第一より弁政第十四までを巻上、六本第十五より刑政第三十一までを巻中、礼運第三十二以下曲礼公西赤問第四十四までを巻下とし、三巻に改編されている。

本版に見える両様の原刊記は、年紀刊者名を異にし、下巻尾題前の刊記の延祐四(一三二七)年は、素王事紀目録後の刊記の泰定元(一三三四)年に先立つこと七年である。恐らく、家語と素王事紀は元、別行本で、後に合刊されたものと思われるが、その経緯顛末は詳かでない。尚、上記国立中央図書館(台湾)蔵元崇文書塾刊本の刊記年紀は、本版原刊記の泰定元年と

は僅か一年の後れで、刊行者名をも異にしている。延祐泰定の間、本書流行の程を示している。

「金沢文庫本図録」所掲の書影（本版尊経閣蔵本）と、「韓国古印刷技術史」の書影（乙亥字印本、国立中央図書館蔵一山文庫本）とを比較すれば、本版が乙亥字印本の覆刻整版であることが判明する（幸い、両書影ともに巻下巻頭を掲載）。乙亥字印本刊行後程なくして整版に重刊されたのであろう。この乙亥字本の直接の底本は元刊本では恐らくあるまい。先にふれた国立中央図書館（韓国）蔵の「新刊標題孔子家語句解」六卷二冊本に「泰定甲子秋蒼巖書院刊行」の刊記が有るというから（同館善本解題）、その本に依りつつ、他の明版を参照して三巻本に改編印行したものである。尚、夙に Maurice Courant が「Bibliographie Coréen」に著録せる大英博物館所蔵の標題句解孔子家語三卷一冊（「古鮮冊譜」著録）は、本版若くは乙亥字印本のいづれかであろう。

〈尊経閣文庫蔵〉 特大二冊

空押蓮花紋橙色表紙（三四・七×二一・九糎）、「家語上」と墨書さる。朱圈点書入。「天遠」（朱鐘形）、「金沢文庫」（墨長方）、「尊経／閣章」（朱方）の印記あり。金沢文庫印につき太田晶二

郎氏は紙箋を附し、「（前略）『金沢文庫』印（第三類八号）を関靖氏は『正印』と為したれども或は疑ふべきものならん。（近藤正斎、旧楓山文庫現書陵部蔵宋板『春秋経伝集解』に存する同種印を『贗造』と定めたり。蓋し炯眼か。）と志されている。

「金沢文庫本図録」著録。

〈岩瀬文庫蔵〉 特大二冊（14173）

空押蓮花紋橙色表紙（三二・二×二一・一糎）、「家語卷之幾」と墨書。附録の新刊素王事紀・聖朝通制孔子廟祀各一卷を、首に配す。朱引朱句点圈点墨訓点振仮名等の書入あり。

他に成篋堂文庫旧蔵お茶の水図書館蔵本二冊があるが未見。「成篋堂善本書目」著録。毎冊首眉上に「長州萩府正宗山洞春禪寺什物」の墨書ありと。嘯岳鼎虎手沢本か。洞春寺蔵朝鮮刊本等については、阿部隆一「洞春寺開山嘯岳鼎虎禪師手沢現存本について」（山口県文化財第七号 山口県文化財愛護協会 昭和五二年、阿部隆一遺稿集第二卷解題篇一収載）参照。

同 慶長四（一五九九）年刊（伏見 釈三要） 古活字

伏見版

原題簽「孔子家語卷上（中・下・終）」。首に、「新刊標題句解孔子家語目錄」（前記元刊本に同じく、六卷に分つ）があり、尾題

前に「今將素王事紀別作／一卷附後刊行幸鑒」と兩行の元刊記あり。下巻尾題後に「後序」を配す。本文巻頭、「標題句解孔子家語卷上」、次行低五格「猷堂王広謀 景猷 句解」(巻中・下には題署せず)、第三行低五格「相魯第一(下に小字双行注あり)」と題し本文に入る。尾題は首題程式に同じ。但、下巻のみ書名下、「巻之下」とする。四周双辺(二一・八×一五・八纏)、有界、七行、行十七字、注小字双行、行十七字。眉上標注行二字。版心粗黒口双花口魚尾、「家語上(中・下)(丁付)」。眉上に標目・音注・校語があり、音注標字は大字陰刻。各篇内「○」を冠し章節を区切る。「後序」後に「新刊素王事紀」及び「聖朝通制孔子廟祀」各一卷を附し、尾に「標題句解孔子家語卷下終」と題す。尚、素王事紀首に目録がありその尾題前隔一行に「泰定甲子秋蒼巖書院刊行」の原刊記あり。末に、次の三要の跋語を有す。「世際季運而學校教將廢也維時(提二)内府家康公于文于武得其名故興廢繼絶／為後学刻梓文字数十万而賜予退為謝(格一)公之恩惠初開家語此書是聖人奧義治世／要文寔非小補也刊字列盤中則明本家／語以數本考正焉或板行有訛謬或文字／有顛倒以亡加之以餘刪之雖如此有帝／虎鶴鶴誤者必矣只願待博雅君子改制／焉也謹跋(隔一)慶長第四龍集己亥仲夏吉辰

／(低二)前學校三要野柄於城南伏見里書焉、一行を隔て末行下方に小字にて「慈眼刊之」と。

本版、每半葉の行数は七行と前記朝鮮刊乙亥字本或はその覆刻本に比し三行少ないが、毎行の字数は一致する。また、「泰定甲子秋蒼巖書院刊行」の原刊記を共に有し、原本は、「御本日紀続録」、「経籍訪古志」に言う如き足利学校藏室町写本ではなく、恐らく前記朝鮮刊本に依れる翻印かと思われる。但、本版の目録は、本文が三巻であるのに、六巻に分ち、巻数標記の頭に六片の花弁を配せる魚尾様紋を冠し、末に「今將素王事紀別作／一卷附後刊行幸鑒」の刊記を有する等、上記元泰定二年崇文書塾刊本、或は足利学校遺蹟図書館藏室町写本に酷似している。管見に入れる本版の底本と思われる朝鮮刊本両帙には首の目録を欠いて定かではないが、本版の目録部分は足利学校に儲蔵されていた上杉憲房寄進の抄本に依ったのではあるまいか。また、本版上層の標題及び音注は些少の出入異同はあるものの、ほぼ室町写本、その原本であろう朝鮮太宗二年刊本、或は乙亥字本を踏襲していると言えるが、この本には先行本にない校語注が加わっている。三要の跋語に「則明本家語以數本考正焉」と言うのを文字通りに受け取り、此の校注は校刊者三要の

手になるものと看做すべきであろうか。

本古活字版は、徳川家康が京伏見円光寺住の足利学校九世庵主三要元佶に命じて刊行せる所謂の伏見版或は円光寺版の権輿で、本邦に於ける家語翻刻の嚆矢でもある。後、王肅注足本である元和古活字版が出、寛永中に覆刻されて流布し、本伏見版の存在価値は薄れたが、現存伝本は比較的多い。

〈京都府立総合資料館蔵〉 四冊 (貴172 37)

空押雷文繫地蓮花紋丹表紙 (二八・一×二〇・一糎)、「孔子家語 元 (一頁)」と墨書さる。目録首一葉破損。末冊末葉框郭外のご部分に「円光寺常住 (花押△元佶)」と墨署され、「敬齋」(墨屋形)の印記があり、本帙は本版刊行者三要元佶の手沢本。「京都府図書館」(朱方)の印記。「京都府立総合資料館貴重書目録」著録。

〈大阪府立中之島図書館蔵〉 四冊 (甲和9) 両足院旧蔵本

丹表紙 (二八・六×二〇・三糎)、原題簽完存。朱引朱句点墨返点送仮名の書入あり。「直/歹」(朱方)、「両足院」(白長方)、「思永館」(朱円)、「大阪図書館/館攷蔵記」(朱長方)の印記。

〔大阪府立図書館蔵 稀書解題目録和漢書の部〕著録。

〈宮内庁書陵部蔵〉 四冊 (555 17)

縹色表紙 (二七・七×一九・八糎)、書題簽「標題句鮮孔子家語

上 (中下・附素王事紀孔子廟祀)」。朱引朱句点、正文に墨訓点の書入あり。

「秘閣/図書/之章」(朱方)、「宮内省/図書印」(朱方)の印記。「図書寮漢籍善本書目」著録。

〈同蔵〉 四冊 (403 128) 林述齋旧蔵本

茶色表紙 (二八・七×二〇・三糎)、書題簽 (緑色地)「標題句解孔子家語」。朱引朱句点、正文にのみ墨訓点書入あり。「述齋衡/新収記」(朱長方)、「林氏/蔵書」(朱方)、「浅草文庫」(朱長方)、「帝室/図書/之章」(朱方)、「日本/政府/図書」(朱方)の印記。「図書寮漢籍善本書目」「図書寮典籍解題漢籍篇」著録。

〈同蔵〉 二冊 (556 52) 森立之等旧蔵本

栗皮表紙 (二七・五×一九・八糎)、外題なし。「後序」より三要跋文までを首に配し、巻上と合せて首冊とし、巻中・下を第二冊とする。朱引、一部に朱句点を附す。「松屏書庫」(朱長方)、「黒川氏/図書記」(朱長方)、「森氏開万/冊府之記」(朱)、「宮内省/図書印」(朱方)の印記あり。「図書寮漢籍善本書目」著録。

〈神宮文庫蔵〉 特大四冊 (二甲二は1010)

後補空押亀甲紋香色布目表紙 (三〇・八×二〇・六糎)、「活板

家語花（鳥・風・月）全四」と墨書さる。首より王言解第三に至り墨筆の返点送仮名校語等の書入あり。「林崎文庫」（朱長方）、「林崎／文庫」（朱方）、「林崎／文庫」（朱長方）の印記。「神宮文庫漢籍善本解題」著録。

〈東京大学東洋文化研究所蔵〉 欠新刊素王事紀・聖朝通制孔子

廟祀各一卷 三冊（置³¹別^甲）

淡茶色表紙（二八・九×二〇・四糎）、中下両冊に原題簽を存す。各冊首の副葉紙に該冊所収の篇目を墨書。朱句点声点、天

地行間に朱墨の書入あり。「宗室盛／昱攷蔵／図書印」（白方）、「雙鑑樓／蔵書印」（朱長方）の印記。

〈東洋文庫蔵〉 欠新刊素王事紀・聖朝通制孔子廟祀各一卷 三

冊（三Aa5） 岩崎文庫 渋江抽齋旧蔵本

後補香色表紙（二六・五×一七・五糎）、書題簽「孔子家語 上

（中・下）」。「襖紙を挟める改装本。巻下尾題後に「後序」七葉を配し、尾に三要刊語を影鈔補綴す。一部に朱引朱読点、まれ

に朱墨の訓点書入あり。「弘前監官渋／江氏蔵書記」（朱長方）、

「森／氏」（朱方）、「稽古齋／図書」（朱長方）、「問津館」（朱長方）、「雲邸文庫」（朱長方）の印記あり。「訪書餘録図録篇」に

書影あり。

〈お茶の水図書館蔵〉 四冊 成篋堂旧蔵本

空押斜格子茶褐色表紙（二八・八×二〇・四糎）、「家語 一（一

四）」と墨書さる。家語三卷全篇に亘り、朱の乎古止点、墨筆の

句点返点送仮名縦点声点、眉上まれに他書からの引抄等の書入

あり。「仏日／蔵書」（朱長方、円覚寺仏日庵？）、「成篋堂」（朱

長方）、「天下之公／宝須愛護」（朱長方）、「蘇峰／清賞」（白方）、

「蘇峰学人／徳富氏愛／蔵図書記」（朱方）の印記あり。「成篋堂

善本書目」著録。

〈足利学校遺蹟図書館蔵〉 四冊（505⁶⁻⁸4）

新補香色刷毛目覆表紙（二八×二〇・四糎）、子持框を印刷せ

る題簽に「孔子家語 一（一四）」と墨書。元表紙は縹色、毎

冊原題簽残存するも、いずれも傷損している。巻中、六本篇よ

り入官篇にかけて朱引朱句点を施す。「足利学校貴重特別書目

解題」「足利学校善本図録」著録。

又 修

巻上第一九葉裏標注の「上」字、同第二〇葉表標注の「毀」字、

巻中第一七葉裏標注の「蘭」字、同第四〇葉裏欄上標字「閒」

（陰刻）等、初印活字の欠損或は失刻せる文字を差変え植字せ

る個所がある。また、新刊素王事紀第四葉表第三行肩に「史或

／作吏」と新たに標注を加える等些少の修補が加えられ、高さ約四纏の層格を設く。

〈お茶の水図書館蔵〉 特大四冊 成篋堂旧蔵本

香色表紙(三三・一×二二・四纏)、巻中・下の両冊原題簽を存す。上冊、「孔子家語卷上」と墨書、附冊に「孔子家語序」と題署して首に配す。目録首一葉は補写。首より巻中六本篇に及び朱墨の句読点、朱青墨の圈点が施され、圈点を附せる字句を眉上に標記する。「落葉満空山／何処尋行跡」(白長方)、「徳富／猪一郎」(白方)、「蘇峰／学／人」(朱方)、「徳富／猪一郎／之章」(朱方)、「蘇峰／清賞」(白方)、「蘇峰文庫」(朱長方)、「徳富氏／所蔵印」(朱長方)、「蘇／峰」(朱方)、「自彊不息」(朱長方)の印記あり。「成篋堂善本書目」著録。

又 通修

末の三要の刊語一葉は植版を改め、末尾題署、「慶長第四龍集己亥仲夏吉辰／ 前学校三野柄城南於伏見里書焉」と、「於」字の位置が変り、「城南」の下に置かる。また、新刊素王事紀第四葉表第三行眉上の「史或／作吏」四字を陰刻に改める。〈太宰府天満宮蔵〉 四冊(天満宮173)

後補香色布目表紙(二八・七×一九纏)、外題なし。朱引朱句

点、正文には墨筆で返点縦点送仮名、時に振仮名が書入さる。

「古経／堂」(白長方、三要刊語尾にあり、上に「欽賞」と墨書、鵜飼徹定か)、「秋月春風／楼磯氏印」(朱長方)、「江藤文庫」(朱長方)、「太宰府／神社社／務所印」(朱方)の印記あり。磯

淳、江藤正澄通蔵。「図録太宰府天満宮」(福岡 太宰府顕彰会 昭和五一年)に解説がある。

本伏見版には他に、安田文庫蔵本、高木文庫蔵本、栗田文庫蔵本(栗田文庫善本書目)、龍谷大学図書館蔵本、龍門文庫蔵本(龍門文庫善本書目)、小汀利得氏蔵本(以上「古活字版の研究」に依る)及び、「弘文荘古活字版目録」著録本、北京大学蔵本、北京図書館蔵本等伝本は多いといえる。

同 [明前期]刊

国立中央図書館(台湾)蔵、三冊。未見。「中国訪書志」著録。阿部隆一博士は「従来元刊とされているが、明前期刊の麻沙本である」と鑑定された。「適園蔵書志」巻六、「遊圃善本書目」巻二著録本。

訪書志によれば、「首目の前半を欠き、釈奠の中途より存し、その次に、従祀陳設之図あり」とみえ、本版はもと新刊素王事紀・聖朝通制孔子廟祀各一卷を附したものであろう。四周双辺

(一六×一〇・五糎)、有界十一行、行廿字、注小字双行、首書行二字。版心小黒口双黒魚尾、「家語上(一・下) (丁付)」と。

尚、北京図書館に「新刊標題句解孔子家語三卷・聖朝通制孔子廟祀一卷 明初刻本 四冊」を蔵する(同館善本書目著録)が、本版或は他の標題句解本との先後系統関係は不詳。後考を俟つ。

同 [明] 刊

首に「標題句解孔子家語総目」を冠す。本文巻頭、「標題句解孔子家語卷上」、次行より約二字分の上層を設け、その下低五格「猷堂王広謀景猷句解」、第三行低三格「相魯第一(下に小字双行注あり)」と題し本文に入る。尾題は首題に同じく、只下巻のみ題下「卷之下」と。四周双边(二一・五×一五・一糎、高さ二・三糎の上層を含む)、有界、九行、行十五字、注小字双行、行十五字。上層標注小字行二字。版心粗黒口双黒魚尾、「家語上(中・下) (丁付)」。上層の音注標字は大字墨罍陰刻。各篇内章節頭には「〇」を冠す。

尚、本版は、家語三卷本文のみで、新刊素王事紀・聖朝通制孔子廟祀は附さない。

〈東洋文庫蔵〉 三冊(XI³AC161) 野間三竹チェンバレン等遞蔵本

淡茶色表紙(二七・四×一八・二糎)、書題簽「標題句解孔子家

語 上(中・下)」。白棉紙印本。「尹漑/汝汰」(朱方)、「坡平

後人」(白方)、「晦/齋」(朱鼎形)、「緑猗堂/蔵書記」(朱長

方)、「白雲書庫」(朱上田下矩)、「誦杜/艸堂」(朱方)、「英

王堂蔵書」(朱長方)、「絹幼/黄婦」(朱豆形回文)の印記あり。

〈東京大学総合図書館蔵〉 特大三冊(H³⁰₃₄₅)

空押し繫橙色朝鮮表紙(三〇・六×一八・五糎)、「家語天(地・

人)」と墨書さる。

本帙は、料紙も朝鮮製の様で、一見朝鮮本に見紛う。いかなる事情があつて、かかる装訂となつたのか、詳らかにしない。

〈大東急記念文庫蔵〉 三冊(131420) 稲田福堂旧蔵本

縹色羅表紙(二九・七×一八・三糎)、白羅の書題簽「孔子家語

上(中・下)」と墨書。「表章/経史/之宝」(朱方)、「江風山

月荘」(朱方)、「福堂」(朱長方)の印記あり。

同 三卷附新刊素王事紀・皇朝通制孔子廟祀・大明会

典祀儀・我朝文廟享祀位各一卷 朝鮮(純祖四(一

八〇四)年)刊(泰仁・田以采・朴致維)

首に、「孔子家語目録」を冠し、本文巻頭、「標題句解孔子家

語卷上」(「標題」二字陰刻)、次行上層下低四格「猷堂王

広謀 景猷 句解」(中・下巻には無し)、第三行低三格「相魯第一(下に小字双行注)」と題す。尾題は各巻小異あり、「標題句解孔子家語上」(上二字陰刻)、「孔子家語卷之中」、「標題句解孔子家語卷之下」と題さる。四周単辺(二〇・三×一五糎、約二糎の上層を含む)、有界、十行、行十七字、注小字双行、行十七字、上層標注小字行二字、校語・音注の標字は大字陰刻。版心白口双花口魚尾、「家語上(一下) (丁付)」。巻下尾題後に「後序」あり。以下附録四種を附し、末の「我朝 文廟享祀位」尾題次行低三格に「甲子秋七月下澣泰仁田以采朴致維謹梓」と刊記がある。甲子は純祖四年に繫るか。

〈天理図書館蔵〉 特大二冊 (124.1タ7)

空押出繫橙色表紙(三〇・六×二〇・二糎)、「孔子家語乾(坤)」と墨書せらる。

国立中央図書館(台湾)蔵の「清嘉慶九年朝鮮朴致維等刊本三冊」は同版本か。

新鐫台閣清論補註孔子家語 五巻首一卷 題明鄒德溥

補注 劉元卿校正 [明万曆]刊 [建陽] 喬山堂劉

龍田)

首に、「孔子家語叙」(「瑯琊王世貞題」、明吳嘉謨校孔聖家語

図よりの転載)、「孔子家語目錄」、「先聖像」以下孔子の事蹟を

描ける図像一四図(画題は「親禱尼丘」「麟吐玉書」「聖人降生」

「戲陳藟豆」「昭公賜鯉」「為委糧吏」「礼誘仲由」「学琴師襄」

「問礼老子」「誅少正卯」「厄於陳蔡」「刪述六経」「感麟絶筆」

七葉、「素王事实」並に「先聖歷聘紀年」を冠す。本文巻頭、「新

鐫台閣清論補註孔子家語卷之一」、第二・三行低八格「太史

四山 鄒德溥 補註/礼部 瀘瀘 劉元卿 校正」、第四行低

二格「〇相魯第一(以下小字双行注有り)」と題し本文に入る。

尾題程式は首題に同じく、巻数下に「終」字を附す。只末巻は

書名下「五巻終」とす。四周双辺(一九・八×一二・三糎)、有

界、九行、行廿一字、注小字双行、行廿一字、毎篇第二行以下

は一格を低し、篇内章節改まれば改行し「〇」を冠す。版心白

口単黒魚尾「孔子家語」。幾巻 (丁付)、「首葉には上象鼻の

書名無し)。句点・声点、人名右傍に「□」を附刻、国名は

「〇」で囲む。終尾題後に「喬山堂劉龍田繕行」の単行双郭木

記を有す。

本書は首四巻が孔子家語、巻五は「会典祀儀」(明会典に依る)を配す。篇目の順序次第は王広謀句解本に同じく、相魯第

一より三恕第九までを巻一、好生第十より顔回第十八までを巻二、子路初見第十九より郊問第二十九までを巻三、五刑解第三十より、曲礼公西赤問第四十四までを巻四とする。尚、首の「素王事実」及び「先聖歷聘紀年」は句解本附載の「新刊素王事紀」の、冒頭部分とそれに続く「先聖歷聘紀年之図」をそのまま引載している。

此本は節録本で刪削省略の箇所は悉く王広謀句解本に等しく（但、弟子解第三十八の一篇は呉嘉謨集校本等に類同）、注文内容もほぼ句解本に依って取捨し、やや意を以て字句を改め、少しく増補している箇所もあるが、句解本とは異体同質の類本と言える。尚、以下掲出する坊刻諸本は撰注者名の題署を異にしているが、本版と同内容の類版で、注者名はいずれも書肆が賈利を得んが為、当代に名のある学者士人に偽託したもので、本当の補注者が誰なるか詳らかでない。

鄒德溥、字は汝光、四山と号す。安福の人。善（嘉靖三五へ一五五六）年の進士の子、德涵（隆慶五へ一五七二）年の進士（の弟。万曆一一（一五八二）年の進士、司経局洗馬を歴る。明史卷二八三儒林伝二に簡伝あり。易会八卷、春秋匡解六卷の著述がある。

喬山堂劉龍田、字は少崗。万曆中、医書を多く刊行せる、建陽の書肆。

〈内閣文庫蔵〉 五冊（29811） 林読耕斎旧蔵 千葉芸閣手書書入本

縹色表紙（二四・九×一四・一浬）、「孔子家語鄒氏補注 首一（一五止）」と墨書さる。首の王世貞叙前に、「刻孔子家語序」（隆慶辛未秋九月甲子錫山後学吳汝倫序）三葉が補写附綴さる。末冊後護葉に貼附せる紙箋に次の題識あり、「家語五卷林読耕先生所蔵本而／補治序文欠簡數帖則先生之自／書也以朱墨加校正者芸閣千葉／子玄所手書後伝此書者勿為等／間之看甲寅閏仲冬誌／竹坡伊庭慎（印）」と。全帙に亘って朱引朱句点圈点声点行間字旁に朱の音注校字、眉上に朱墨の語解音釈校語、諸書より引抄せる類文の書入が多い。「先聖歷聘紀年」の後半補写、続いて「先聖世系」一葉半の補写がある。首に移写されたる「刻孔子家語序」に「凡読是編者、豈惟動高山仰止之思乎。其□□然、有望道之心哉。此則次菴華君梓家塾意也。余嘗与華君同筆研、同校是書。既博一第歸、而梓已完矣。余因叙華君之意云尔」とあるが、此序の出処は不明であり、華次菴の何人なるか不詳。本書の原本は、或はこの華次菴・吳汝倫校の私刻本であろうか。

「瑞／邦」（白方）、「読耕斎／之家蔵」（朱長方）、「昌平坂／学問所」（墨長方）、「文政己卯」（朱無郭）、「浅草文庫」（朱長方）、「大学校／図書／之印」（朱方）、「日本／政府／図書」（朱方）の印記あり。

鼎刻楊先生註釈孔聖家語 五卷首一卷 題明楊守勤注

明万曆三四（一六〇六）年刊（建陽） 存德堂陳氏

首に、「先聖像」以下「感麟絶筆」に至る画像計一四図（画題は全て前記題鄒德溥補注本に同じ）七葉、「素王事実」並に「先聖歴聘紀年」を附し、次に「孔聖家語目錄」あり。本文巻頭、「鼎刻楊先生註釈孔聖家語卷之一」、第二・三行低八格「会状崑阜 楊守勤 註釈／書林 耀吾 陳德宗 梓行」、第四行低二格「相魯第一（下に小字双行注あり）」と題す。尾題は「孔聖家語幾卷終」と。四周单边（二〇・五×一一・八糎）、有界、九行、行廿一字、注小字双行、行廿一字。毎篇第二行以下は一格を低し、行廿字。版心白口単黒魚尾、「孔聖家語 幾卷（丁付）」、句点・圈点・旁線付刻。巻末尾題前に、「万曆丙午仲秋月／存德堂陳耀吾梓」なる兩行蓮牌木記あり。

本版内容は前記題明鄒德溥補注本に全く同じで、本版に注者として題せる楊守勤は、鄒とほぼ同年代であり、どちらが早出

本であるか判然としない。

楊守勤、字は克之、崑阜と号す。慈谿の人。万曆三二（一六〇四）年の進士、官、右春坊右庶子に至る。

存德堂は正統より万曆年間に亘る、建陽の書肆。医書の刊行が多い。

〈静嘉堂文庫蔵〉 二冊（4470） 杉原平助旧蔵本

後補茶色表紙（二五×一五・七糎）、「孔子家語別本 乾（坤）」と墨書さる。裏打補修を施せる改装本。首の画像第六葉を欠き、框郭及び標題（誅少正卯・厄於陳蔡）のみを補写せる一葉を挿入。朱引・朱句点圈点、朱墨の返点縦点送仮名、天地行間に墨筆の校語等の書入あり。「緑静堂／図書章」（朱長方）、「招隆／軒蔵」（白方）の印記あり。

又 明天啓六（一六二六）年修

封面を有し、上部小区画に「原板重刻」と横書、下に「佩聖言儀刑具在／孔聖家語／遵遺矩鄒魯非遙」と題す。本文巻頭の第三行「書林 耀吾 陳德宗 梓行」の一行が剝去され空行となっている。末に前掲原刻と同様の蓮牌木記があるが、左行は空行、右行は「天啓丙寅仲秋月」と控改さる。

〈京都大学附属図書館蔵〉 二冊（1-69コ6） 河野鉄兜旧蔵天瑞

寄贈本

新補香色布目表紙(二四・九×一五・七厘)、「孔子家語^{卷一}一五(三一五) 上(下)」と墨書さる。目録を画像の前に配す。首より卷三子路初見第十九に及び、朱引・墨訓点、眉上に朱墨青の一本との校合等の書入が周密。「越家秘笈(左右に「不防/偷読」)(朱長方)の印記あり。

又「通修」

首序内容は前書に同じであるが、目録は卷四までで止まり、卷五を刪去し、卷五に配されていた会典祀儀の一卷を刪略する。従って卷末の蓮牌木記は無い。

〈内閣文庫蔵〉 五冊合二冊(298 18)

橙色覆表紙(二三・五×一四・九厘)、「帝国図書館」の空押があり「孔子家語一至三(四、五止)」と墨署せる書題簽を付す。原表紙は淡茶色、「孔子家語^{楊守勳注}幾」と墨書さる。目録は画像の前に配さる。「披/沙」(朱長方)、「昌平坂/学問所」(墨長方)、「文化壬申」(朱無郭)、「浅草文庫」(朱長方)、「大日本/帝国 / 図書」(朱方)、「大学校/ 図書/ 之印」(朱方)、「日本/ 政府/ 図書」(朱方)の印記あり。

新鐫伺初張先生註釈孔子家語雋 五卷首一卷 題明張

蕭註釈李光緒校閱 明万曆刊(建陽) 蕭世熙

国立中央図書館(台湾)蔵、六冊。未見。

同 (民国六六(一九七七)年刊(台北) 中国子学名著集成編印基金会) 影印国立中央図書館蔵明万曆 書林蕭世熙刊本 中国子学名著集成021珍本初編儒家子部所収 A5 孔氏家語(206頁参照)と合一冊

首に、「孔子家語雋序」(雲間陳繼儒撰)、「孔子家語雋目録」を冠し、次に「先聖像」より「感麟絶筆」に至る画像七葉一四図(画題は前掲二本に同じ)、「素王事実」及び「先聖歷聘紀年」があり、以上を首巻となし、卷五に「会典祀儀」を配す。本文巻頭、「新鐫伺初張先生註釈孔子家語雋卷之一」、次行より第四行に亘り低六格「華亭 伺初張 蕭 註釈/ 温陵 衷一 李光緒 校閱/ 書林 少渠蕭世熙 繡梓」、第五行低二格「相魯第一(下に小字双行注、篇題頭、○を附すもあり)」と題す。尾題は「家語雋三(四) 卷終」、「孔子家語雋五卷大尾終」(卷一・二尾題なし)と。四周单边、有界、九行廿一字、注小字双行、廿一字、但、毎章節第二行以下は低一格行廿字。或は章頭に「○」を冠するところあり。版心白口魚尾無く「家語雋 幾卷 (丁付)」。句点附刻、国名は「○」で囲む。

本冊首に本叢書編者によると思われる「孔子家語雋提要」が冠され、「此本係中央図書館所珍藏、為明万曆間書林蕭世熙刊本（中略）而台湾公藏僅此一部、是故借以景印、以広流伝」と。

本書は前記、題明鄒德溥注本と本文並に注の内容を同じくするが、注者を張鼐と題す。同じく書肆の偽託であろう。

張鼐、字は世調或は侗初。松江華亭の人。万曆三二（一六〇四）年の進士、官は南京吏部右侍郎兼詹事府詹事に至る。宝日堂初集三二卷、吳淞甲乙倭変志二卷、鑑堂考故一卷の著あり。

李光縉、字は宗謙、衷一と号す。泉州府晉江県の人。万曆一三（一五八五）年の挙人。本論集第二十輯三五七頁参照。

蕭世熙は明末の建陽の書肆。「明代版刻綜録」は明天啓刊陳繼儒評注五子雋十卷を録して、未だ本書を著録しない。

同 江戸写 影鈔明万曆書林蕭世熙刊本

〈内閣文庫蔵〉 三冊（298/29）

香色表紙（二七・三×一八・一糎）、「孔子家語雋」首（二三・四五）

上（中・下）と墨書さる。無辺無界、字面高さ約一九糎、行款は刊本に等しい。版心題署無し。刊本に倣い国名には（ ）を附す。前掲刊本の影写本であるが、首の図像一四図は写されていない。書写者書写年代を示す奥書識語等は無く、本写本の底本

となった刊本の現所在は未詳。「昌平坂／学問所」（墨長方）、「寛政戊午」（朱無郭）、「浅草文庫」（朱長方）、「大学校／図書／之印」（朱方）、「日本／政府／図書」（朱方）の印記あり。

新鐫侗初張先生註釈孔子家語宗 五巻首一卷 題明張

鼐註釈 李光縉校閲 「明末」刊（熊秉宏）

又「後印」（「杭州」）「段景亭」読書坊）

初印本未見。後印本は、「張侗初先生評釈／家語宗／読書坊梓行」（上欄上に「孔聖」と横書）と題せる封面あり。首に

「孔子家語宗序」（「雲間陳繼儒撰」）を冠し、「孔子家語宗目錄」、「先聖像」より「感麟絶筆」に致る図像計七葉一四図（画題構図並に前記家語雋に同じ）、「素王事实」並に「先生歴聘紀年」あり。本文巻頭「新鐫侗初張先生註釈孔子家語宗卷之一」、第二

一四行低六格「華亭 侗初張 鼐 註釈／温陵 衷一李

光縉 校閲／書林 午山熊秉宏 繡梓」、第五行低二

格「相魯第一（下に小字双行注あり）」と題し本文に入る。尾題

は「家語宗幾巻終」、或は「新鐫孔子家語宗五巻大尾終」。四周

单边（二〇・八×二二・一糎）、無界、九行、行廿三字、注小字

双行、行廿三字。各章節第二行以下低一格行廿二字。版心白口

魚尾無し（但し、巻一第九至一二葉、巻二第七至一〇葉、巻三

第三・四葉等一部単黒魚尾を交える、「家語宗 幾卷（丁付）」。
正文には句点附刻、国名は「○」で囲む。

本書は前掲家語雋と異名同書である。

読書坊は明天啓崇禎間の武林即ち杭州の書林で、同書肆は上述の家語一〇卷附集語二卷錢受益等校本をも印行している。

〈蓬左文庫蔵〉 三冊（63 54）

茶色表紙（二五・五×一六・一糶）、「家語宗 一（二三、四五）」と墨書さる。卷四末第二八丁補写。「奚疑／斎／蔵書」（朱方）、

「張府内／庫図書」（朱長方）、「蓬左／文庫」（朱方）の印記あり。

新刻註釈孔子家語衡 二卷首一卷 題〔明〕周宗建注

〔明末〕刊〔建陽〕〔喬山堂〕劉大易

首に、「孔子家語叙」（「松陵周宗建書於聽潮軒」）及び「孔子家語衡目錄」を冠し、次に、「先聖像」より「感麟絶筆」に至る画像一四種（画題構図並に前記二本に同じ）七葉、「素王事実」並に「先聖歷聘紀年」あり（以上版心題「首卷」）。本文巻頭、「新刻註釈孔子家語衡卷之一」、第二・三行低一〇格「松陵周宗建季侯註釈／書林劉大易龍田梓行」、第四行は空行とし第五行低二格「相魯第一（下に小字双行注あり、第三以下篇題頭に「○」を冠す）」と題す。尾題は「家語衡一卷終」・「孔子家語

衡卷二大尾」と。四周単辺（一九・三×二二・一糶）、有界九行、行廿一字、注小字双行、各章節第二行以下は一格低げ行廿字、但し、第八篇以降は篇首第二行以下一格低げ、章節頭は改行し「○」を冠す。版心白口魚尾無し（卷二末に一部黒魚尾の葉を混える）「家語衡（丁付） 幾卷」。正文に読点を附し、国名は「○」で囲む。尾跋無し。卷末尾題前に「會典祀儀」を附す。

本版は、上掲諸本とは書名・注者名の題署を異にするが、本文注文寸分変りなく、篇目篇次も同じである。ただ、相魯第一より顔回第十八までを卷一、子路初見第十九より曲礼公西赤問第四十四までと會典祀儀を卷二と卷立を改め二卷本としている。

周宗建、字は季侯、来玉と号す。呉江の人。明万曆一〇（一五八二）年生、天啓六（一六二六）年歿。万曆四一（一六一三）年の進士。武康知県より御史に至る。魏忠賢・客氏の乱政を弾劾すること再三、返て忠賢の誣構に陥り獄死する。論語商二卷の著述がある。事蹟は明史卷二四五にみえる。

前記、喬山堂劉龍田刊新鐫台閣清譚補注孔子家語卷末の木記に「喬山堂劉龍田」とあり、本版巻首に題する「書林劉大易龍田」は、書坊喬山堂であろう。従って劉氏喬山堂は同種類本版を刊行している。

〈東京都立中央図書館蔵〉 二冊 (124 MW 2) 諸橋文庫

空押卍繫花紋丹表紙 (二五・三×一五・九糎)、外題なし。「有即起書樓／図書記」(朱長方)、「止軒／清玩」(白方)の印記あり。

〈内閣文庫蔵〉 一冊 (298 26) 伊東藍田旧蔵本

淡茶色表紙 (二六・七×一六・四糎)、「孔子家語衡^首」全」と

墨書さる。目録・素王事実の末葉裏及び会典祀儀尾二葉を欠く。

従って巻二尾題を欠く。一部に朱声点、墨筆校語等の標注書入あり。「天游館／蔵書記」(朱長方)、「藍／田」(朱方)、「昌平坂／学問所」(墨長方)、「文化癸酉」(朱無郭)、「浅草文庫」(朱長方)、「日本／政府／図書」(朱方)の印記あり。

新刻註釈孔子家語憲 四卷首一卷 題〔明〕陳際泰注

〔明末〕刊 (潭陽劉舜臣)

首に、「家語憲叙」(古臨陳際泰識)及び「孔子家語憲目録」を冠し、次に「先聖圖像」より「感麟絶筆」に至る画像一四図(画題構図並に前掲家語宗・家語衡等と同じ)計七葉、「素王事実」並に「先聖歴聘紀年」有り。本文巻頭、「新刻註釈孔子家語憲巻一」第二・三行低九格「羊城陳際泰大士父 釈／潭陽劉舜臣弼 虞父 梓」、第四行低二格「相魯第一 (下に小字双行注あり)」

と題す。尾題は、「新刻孔子家語卷之一終」、「孔子家語憲卷三(四)終」と。四周单边(一九・一×一二糎)、有界九行、行廿一字、注小字双行廿一字。毎篇第二行以下一格を低げ行廿字。版心白口魚尾無し、「家語憲 卷幾 (丁付)」。読点及び国名旁に「□」を附刻、篇内章節頭に「○」を標す。

本書は首三巻が家語本文で、相魯第一より好生第十までを巻一、觀周第十一より本命解第二十六までを巻二、論礼第二十七より曲礼公西赤問第四十四までを巻三とし、巻四に「会典祀儀」を配す。巻立は異なるが前記家語衡等と内容は同じである。

陳際泰、字は大士、臨川の人。明隆慶元(一五六七)年生、崇禎一四(一六四一)年歿。崇禎四(一六三一)年六十八歳で進士となり、行人司行人に除せらる。易経説意七卷・周易翼簡捷解一六卷附羣經輔易説一卷・五経説五卷・四書説一〇卷・巳吾集一四卷・壺山集三卷・癡山集六卷等の著あり。明史卷二八八文苑伝四に略伝あり。

〈京都大学文学部蔵〉 二冊 (哲文 a 5 中 II 9)

青色表紙 (二五・四×一六・三糎)、外題無し。

同 〔明末清初〕刊 覆潭陽劉舜臣刊本

前記原刻本とは尾題、附刻の読点等に小異あり。字様原刻に

較べ粗笨、横画粗大し、不整齐である。本版の方が後出であろう。

〈東京大学東洋文化研究所蔵〉 四冊（政論諸子4） 大木文庫

新補紺色表紙（二四・五×一五・六糎）、外題無し。

〈内閣文庫蔵〉 四冊（298.13）

茶色表紙（二三・九×一五・二糎）、「孔子家語憲 首一（一四止）」と墨書さる。「昌平坂／学問所」（墨長方）、「寛政庚申」（朱無郭）、「浅草文庫」（朱長方）、「大学校／図書／之印」（朱方）、「日本／政府／図書」（朱方）の印記あり。

鼎鏝二翰林校正句解評釈孔子家語正印 三巻首一卷

題〔明〕顧錫疇註釈 孔貞運評林 明天啓三（一六二

三）年序刊（怡慶堂余完初）

封面、「孔顧二太史評釈／家語正印／怡慶堂余完初梓」と題す。首に、「家語正印叙」（「天啓三年孟夏長洲湛持／文震孟題」）を冠し、次に、「先聖像」より「封贈団円」に至る孔子歴年の事蹟を抽いた図像一九図計一〇葉、及び「先聖世系」・「素王異質」・「先聖履歴」・「至聖先師贊」・「至聖後裔」の四葉（版心「序」と題す）有り。本文巻頭、「鼎鏝二翰林校正句解評釈

孔子家語正印巻之一」、次行より上三格分の上層があり、その

下第二・三行低四格に「無錫 九疇 顧錫疇 註釈／句

容 玉衡 孔貞運 評林」（巻二・三首には此題署無し）、

第四行低二格に「相魯第一」と篇目を題す。四周単辺（二二・二

×一一・八糎、高さ二・四糎の上層を含む）、無界九行、行廿一

字、注小字双行、行廿一字、上層標注行四字。版心白口魚尾無

し、「孔子家語 幾卷（丁付）」。正文に句点附刻。

首の孔子事蹟の図は、第一四図までは、上記、新鏝伺初張先生註釈孔子家語雋以下の諸本と画題・構図ともに同じ。第一五図より「説柳盜跖」「敬器示戒」「金人示戒」「封魯司寇」「封贈団円」の五図三葉が増補されている。

篇目次第はほぼ後掲、正徳中刊の何孟春注本及び上述した永懷堂刊本に符合しているが、「礼運第三十二」を「礼問」として第三十一に、「刑政第三十一」を第三十二に配し前後顛倒し、「子路初見第十九」を「子路」と、「論礼第二十七」を「論語」、「冠頌第三十三」を「冠訟」と題する等の異同がある。「相魯第一」より「賢君第十三」までを巻一、「弁政第十四」より「礼問第三十一」までを巻二、「刑政第三十二」より「弟子解第四十四」までを巻三とする。

本書も節録本で王肅注足本に比するに刪略の箇所は甚だ多いが王広謀句解本或はそれに依拠したと思われる上掲の新饗台閣清譌補註孔子家語以下の明末に通行せる俗本よりは節略のところは少くなっている。また一篇内の章節の順次、前後顛倒する箇所がままみられる。曲礼子貢問第三十九（王注本・句解本は第四十二）の一篇を例に挙げて王肅注足本及び句解本との異同を示してみる。（本版章節頭の數句を掲出し、次に両本との異同を記す、章の順次数は「漢文大系」第二十卷所収本に倣う）

子貢問於孔子曰。晉文公矣。召天子。而使諸侯朝焉。

王注本、第一章

句解本、第一段第一節

子貢問曰。管仲失於奢。晏子失於儉。與其俱失矣。二者孰賢（割注略ス）子曰。

王注本、第七章

句解本、第二段、但、子貢の問辭無し。

子貢問曰。殷人既窆而弔於壙。周人反哭而弔於家。如之何。

王注本、曲礼子夏問第四十三第十章

句解本、刪略

子路問於孔子曰。傷哉貧也。生而無以供養。死則無以為禮也。

王注本、第二十五章

句解本、刪略

（本版、以上第一段）

吳延陵季子聘於上國。適齊於其返也。其長子死於贏博之間。

王注本、第二十六章

句解本、刪略

（本版、第二段）

子游問喪之具。子曰。稱家之有無焉。子游曰。有亡惡乎齊。

王注本、第二十七章

句解本、第三段

子路有姊之長（当作喪）可以除之矣。而弗除。

王注本、第二十九章

句解本、刪略

（本版、以上第三段）

衛公使其大夫求婚於季氏。桓子問禮於孔子。

王注本、第三十一章

句解本、刪略

（本版、第四段）

孔子在宋（割注略ス）見桓魋自為石椁。三年而不成。夫子愀然曰。

王注本、第二章

句解本、第一段第二節

南宮敬叔以富得罪於定公。奔衛。衛侯請復之。載其宝以朝。

王注本、第三章

句解本、第一段第三節

(本版、以上第五段)

孔子在齊齊大旱春饑。景公問於孔子曰。如之何

王注本、第四章

句解本、第一段第四節

(本版、第六段)

従つて本版は王肅注足本に比し、第五・六、八・二四、二八、三〇、三二章の計三二章を刪略し、別の篇の一章を竄入していることになる。

注文に就いては、王広謀句解を取捨せる上記、新鐫台閣清譌補註孔子家語等の注を更に摘録或は敷衍せるもの、王肅注の抄録、あるいはそれをやや補足するものが多いが、本書のみに見える新たな注文も可成の量に升る。本書は先行諸本の内数本を基に、やや意を以て按配編成し、注解を増補した家語別本と看做されるが、補注・標注の内容上からみれば、初学童蒙を対象

として明末に流行した通俗評釈本の域を出るものではない。

注者、顧錫疇は、字は九疇、瑞屏と号し、崑山の人。万曆四七(一六一九)年の進士、庶吉士より檢討を授けらる。天啓中、魏忠賢と協わず、削籍されるが、崇禎初年故官に復し、国子祭酒等を歴任して礼部侍郎に至り、福王立つに及び尚書に昇る。後、温州江心寺に寓居したが、清総兵賀君堯に害された。綱鑑正史約三六卷、秦漢鴻文二五卷の著あり。伝は、明史卷二一六に見える。

孔貞運、字は開仲、玉横と号し、孔子六十三代の孫とさる。句容の人。明万曆四(一五七六)年生、崇禎一七(一六四四)年歿。万曆四七(一六一九)年の進士、編修を授けらる。天啓中、経筵展書官に充たり、両朝実録を纂修した。崇禎元(一六二八)年、国子監祭酒、尋で少詹に進み、南京礼部侍郎、吏部左侍郎を歴任している。

〈内閣文庫蔵〉 三冊(294.24)

茶色表紙(二四・六×一三・七糎)、題簽剝落し、その跡に「孔子家語正印 首(一三止)」と墨書さる。「昌平坂/学問所」(墨長方)、「文化辛未」(朱無郭)、「浅草文庫」(朱長方)、「日本/政府/図書」(朱方)の印記あり。

新刻張天如太史評釈孔聖家語 五卷 題明張溥注

〔明末〕刊（熊氏）

封面あり、「重刊顏師古注釈／孔子家語／雨錢家熊友于梓行」と題さる。首に「孔聖家語題辭」（「常熟王整題」）を冠し、次に、先聖像（孔子立像、構図は吳嘉謨孔聖家語図所掲の図に倣い、左右に孔子異質を記せる祖庭広記の一文を引く）より「封魯司寇」に至る画像一二図六葉がある。本文巻頭、「新刻張天如太史評釈孔聖家語卷之一」、第二・三行低一格「婁東張溥天如訂定／書林 熊飛非熊刊梓」（卷二以下は題署せず）、第四行低二格「相魯第一（下に小字双行注あり）」と題す。尾題は「孔聖家語卷之幾終」、末巻は最終行本文下方に「五卷終」と。四周単辺（二〇・五×一一・五糎、高さ〇・九糎の上層を含む）、有界、十行、行廿二字。注小字双行、行廿二字。上層標注行四字。版心白口魚尾無し。「孔聖家語 幾卷（丁付）」。正文に句点声点、人名に傍線附刻。

首の図像は、第二図以下の構図は前掲本に同じ。但、「為委糧吏」「礼誘仲由」「誅少正卯」「厄於陳蔡」「説柳盜跖」「敬器示戒」「封魯團圀」の七図が本版には無い。

篇目の順序次第は前掲本に異ならない（但、本版には論礼を

論語に誤まる等の誤刻はない）が、末篇の弟子解一篇を闕いてゐる。相魯第一より五儀解第七までを卷一、致思第八より弁政第十四までを卷二、六本第十五より困誓第二十二までを卷三、五帝徳第二十三より礼運第三十一までを卷四、刑政第三十二より終記解第四十三までを卷五とする。

本書は前掲家語正印に比し刪略の箇所は少ないが篇次、章次を顛倒するところほほ規を一にしており、注文及び標注内容も互いに増損があるが、一致するものが甚だ多い。両本は、恐らく祖本を同じくし、原本の正文・注文を適宜取捨按配して、それぞれ別途に翻刻重刊された、いわば兄弟関係にある類版と言える。

〈内閣文庫蔵〉 一冊（298 19） 木村孔恭旧蔵本

茶色表紙（二五・七×一六糎）、「孔子家語 顔氏註 全」と墨

書さる。「兼葭堂／蔵書印」（朱長方）、「昌平坂／学問所」（墨

長方）、「文化甲子」（朱無郭）、「淺草文庫」（朱長方）、「大日本

／帝国 〓 図書印」（朱方）の印記あり。

尚、王重民、「中国善本書提要」著録の「雲間夏允彝緩公甫註釈、書林鄭以祺体晉甫較梓」と題する明崇禎間刻二卷本（九行二十八字 二〇・三×一一・三）（米国会図書館蔵本）も、

上掲諸本と同様の、初学向けの俗本の類であろう。

○何孟春注本

孔子家語 八卷 明何孟春注 明正徳一六(一五二一)年刊(建寧 張公瑞)

北京図書館蔵、二冊、羅振常跋。未見。「善本書所見録」卷三著録本か。同録に「題彬陽何孟春注、正徳二年丁卯何孟春子元序、正徳辛巳見素林俊題辭。半頁十行、行二十字。世行家語各本皆王肅注、何孟春注極少見。此本為正徳原刊、所謂正徳辛巳張公瑞刊本也(見邵亭書目)。各家藏書目僅張金吾藏有正徳本、可見伝本之少、惟張本尚有正徳辛巳黃鞏序、此則無之。孟春自序及林見素題辭、黃(「張」の譌か)氏亦無之、蓋兩本互有脱佚也。此本字刻頗類元板、蓋明代惟正徳本多仿元、如慎独齋刊各書均是、真精整可愛」と。尚、正徳辛巳(一六年)良月望日後学莆陽黃鞏の「新刊孔子家語注跋」に、「是本先生自瀛寄至。因托建寧郡伯張侯公瑞、梓行書坊」(今、後掲永明書院刊本に依る)と、刊行経緯の一端を告げている。即ち、本書は何孟春が雲南に巡撫たりし時脱稿し、黃鞏を介して建寧郡伯張公瑞に托して刊行されたものである。

羅氏指摘する如く、「愛日精廬藏書志」卷二一著録本があり、「明建寧守十世祖端巖公刊本」と注記する。他に「寒瘦山房鬻存善本書目」卷二著録本があり「今年偶過上海、見雲自在龕遺書、因并収之、辛酉(民国一〇年)十二月正閏記」と。繆荃孫旧蔵本であるが兩本並に現所在不詳。

何孟春、字は子元、燕泉と号す。郴州の人。明成化一〇(一四七四)年生、嘉靖一五(一五三六)年歿。弘治六(一四九三)年、進士に第し、兵部主事を授る。累官し右副都御史に任じ、雲南巡撫を経て吏部左侍郎に升る。大礼の議起りて後、南京工部左侍郎に左遷され、尋で削籍さる。隆慶初、礼部尚書を贈られ、文簡と諡す。明史卷一九一に伝あり。著は他に、何文簡疏議一〇卷、餘冬序録六五卷、何燕泉詩四卷、餘冬詩話三卷がある。

同 明嘉靖二(一五二三)年刊(高應禎)

北京図書館蔵、四冊、徐焞跋。未見。「徐氏紅雨樓書目」卷一經部論語類著録本か。

「五十万卷樓藏書目錄初編」卷九著録本は同版本か、「半葉十行、行二十字、卷首捺有約齋二字白文章、当是前清額勒布所蔵」と。また、その本の末尾にあるという次の嘉靖癸未(二年)閏諸生高應禎の識語を引載する。「燕泉先生、以家語載聖言与其

行事也、参互考訂、深以王肅所伝者為得其宗、安国之所撰次、劉向之所校定、無所於取信、原本刻於滇南、其伝未広、是用再梓而行之云」と。即ち本版は原刊本に依れる重刊本である。

只、前掲本を羅振常の言う如く原刻と見做すには疑念が残る。本版が前刻刊行に遅れること僅か二年に過ぎず、しかも、本版刊行者高應禎が「原本刻於滇南、其伝未広」と記していること、何孟春自序の年紀と、前刻黄鞏の新刊跋との年紀に一四年の距りがあること、且つ、黄鞏跋文中「是本先生自滇寄至云云」とある以上、前刻は滇刻本ではあり得ないことに拠る。或は黄鞏の言う「是本」は、版本就ち滇刊本と考え、前掲張氏刊本は本版とは兄弟関係にある重刻本と看做す可きか。

同 明刊（永明書院）

先に、後序（「孔子家語」と題す、他本と行文異なれり）、末に直接し一格を低して、大明正徳二年歲次丁卯仲春二月壬寅後学榔陽何孟春子元の自序、次に「家語題辭」（「正徳辛巳夏仲後学見素林俊題于雲莊青野」）、及び「孔子家語総目録」（四集八卷に分つ）、巻末に「新刊孔子家語注跋」（「正徳辛巳良月望日後学莆陽黄鞏謹識」）がある。本文巻頭、「孔子家語卷之一元集」、

第二・三行低一〇格に「後学榔陽何孟春補註／聖府永明書院校

刊」（巻一・三・五・七にのみ題署、他の巻には無い）、第四行低二格、「相魯第一」と篇目を題す。尾題は「孔子家語卷之幾終」（巻五のみ巻数下に「畢」字を小書）。四周双辺（一八・六×一二・三糎）、有界九行、行廿字、注小字双行、行廿字。版心白口单黒魚尾、「孔子家語 卷之幾（丁付）」。各篇内章頭には「〇」を冠す。

本書は、王肅注本、王広謀句解本等巻末に配せる「後序」を「孔子家語」と題して首に冠するが、前後を顛倒させ、後半の孔衍の家語に関する上書の部分である「臣祖故臨淮太守安国」以下「向又病亡遂不果立」までを「漢博士孔衍言」の六字を頭に加えて前に置き、後序前段の「孔子家語者皆當時」より「將來君子不可不鑑」までを、王肅が孔安国に代つて作った序と看做して冒頭に「魏王肅序曰」の五字を補い、孔衍上言の次に配し、後序中段の孔子より安国に至る世系を記した部分である「孔安国者字子国」より「莫不楽測大倫焉」までを欠く。

四集八卷に分ち、篇次篇目の次第は次の如くである。
卷之一元集 相魯第一 始誅第二 王言解第三 大昏解第四
儒行解第五

卷之二 問礼第六 五儀解第七 致思第八 三恕第九

好生第十

卷之三享集 觀周第十一 弟子行第十二 賢君第十三 弁政

第十四 六本第十五

卷之四 弁物第十六 哀公問政第十七 顏回第十八 子

路初見第十九 在厄第二十 入官第二十一

卷之五利集 困誓第二十二 五帝德第二十三 五帝第二十四

執轡第二十五 本命第二十六

卷之六 論禮第二十七 觀鄉射第二十八 郊問第二十九

五刑解第三十 刑政第三十一 禮運第三十二

卷之七貞集 冠頌第三十三 廟制第三十四 弁樂第三十五

問玉第三十六 屈節解第三十七 正論解第三十八

卷之八 子貢問第三十九 子夏問第四十 公西赤問第四

十一 本始解第四十二 終記解第四十三 七十二弟子解第

四十四

何孟春自序末に「春謹即他書有明著家語云云、而今本欠略者、

以補綴之。今本不少槩見、則不知旧本為在何篇、而不敢以入焉。

分四十四篇為八卷。他書所記、事同語異者、箋其下、而一二愚

得附焉。大戴禮内、与此互詳略者、不其不敢以入焉者、仍別錄之、并

春秋戰國秦漢間文字、載有孔子語者、錄為家語外集。存之私塾、

以埃博雅君子、或得肅旧本、而是正焉。是豈独春之幸哉」と。

元明の間に流布したテキストは王広謀の句解本で、王肅注本は、殊に嘉靖中黄魯曾の翻南宋刊本が出る以前に於ては、殆ど伝を

失したかの如くであり、「肅之注、愚不獲見、而見其序。今世

相伝家語、殆非肅本（中略）今家語勝国王広謀所句解也」と自

序に言う如く、孟春も王肅注本を手にすることは出来なかつた。

孟春は王広謀句解本を「注庸陋荒昧、無所發明、何足与語於述

作家、而其本使正文漏略、復不满人意。可恨哉。」と看做し、

他書に引用されている家語の遺文を彙蒐して句解本正文の闕を

補綴し、更に諸書に互見する類文或は関連せる記載を博搜し、

聊か私見を交えて注となしている。孟春注に就いて服部宇之吉

は「明人ノ学空疎ヲ以テ名有ルモ、何孟春ノ家語ニ於ケルヤ、

往々他書ノ文ヲ挙ゲテ正文ヲ証シ、引証考据未ダ該博ト称スベ

カラザルモ、亦甚ダ力ヲ用キタルヲ見ル。空疎ヲ以テ譏ルベキ

ニアラズ」（漢文大系第二十卷「孔子家語解題」）と評され、正

鵠を得た所見である。しかし、正文に就いては、王肅注足本と

の増損異同は少くなく、その半ば以上を佚脱して、補輯の

功未だしと言わねばならない。その出入異同欠略せる箇処は漢

文大系所収の服部宇之吉校訂本を繙けば一目して瞭然であり、

また解題に於て概言されているので、ここでは縷述を控える。

本書は、明代家語学に一石を投じた佳作であるが、流伝甚だ尠く、本版も管見に入れるもの次の両帙に止る。

〈無窮会図書館蔵〉 四冊（真軒877）

後補香色表紙（二六・四×一五・九糎）、外題無し。「学」（朱
円）、「真軒／蔵書」（朱長方）の印記あり。

〈内閣文庫蔵〉 四冊（29828） 林榴岡旧蔵本

後補縹色表紙（二五・三×一五・三糎）、「孔子家語何氏補注 幾

と墨書さる。「林氏伝家図書」（朱長方）、「林氏／蔵書」（朱方）、

「昌平坂／学問所」（墨長方）、「淺草文庫」（朱長方）、「大学校
／図書／之印」（朱方）、「日本／政府／図書」（朱方）の印記あ
り。

他に、国立中央図書館（台湾）蔵本二部（四冊、六冊）、北
京師範大学図書館蔵本（四冊）がある。

尚、「明代版刻綜録」は「浙江図書館善本書目」に拠り、

「孔子家語補注十卷 明何孟春補注 明嘉靖三十七年孔弘鏗刊」を著録し、

「卷八後有『嘉靖戊午仲夏端陽之吉命建陽書林吳世良梓於広州
刑署』二十四字」と注記があるが、その本管見に入らず委細不
詳。

標題句解孔子家語 三卷 明何孟春注 明刊

北京図書館蔵、三冊。未見。他に「上海図書館善本書目」著
録本があり、同目には「明正徳刻本」とある。「天祿琳琅書目」
卷九著録の一函三冊と同種本あるいは同版か。「明何孟春補註
三卷、前漢孔衍・魏王肅二序、孟春自序、林俊序」と。

尚、盧文昭に「重刻何註孔子家語序」の一文があるが、その
刻本の見存するを聞かない。或は未刊に終りしか。この序に拠
れば、文昭が校訂した本は他家伝来の鈔本で、孟春の裔孫、泰
吉がその書の失墜するを懼れて文昭に校刊を願ったものという。
劉世珩覆宋刊本附録の札記首の劉氏序引に挙げる校勘対校の一
本に「盧抱經文昭校明何孟春注本」が見えるが、それが或はこの
文昭序に言う何泰吉所持の鈔本に該当するか。ただ、その本の
現所在は不詳である。ここに孫志祖等校訂の「抱經堂文集」卷
六により文昭序の全文を録して参考に資したい。尚、文集は撰
序の年を丁亥即ち清乾隆三二（一七六七）年に繋げる。

孔子家語、惟明末虞山毛氏汲古閣本、為猶見王肅之旧。考之
唐人註書所引、合者為多。然譌舛亦復不少。此外刻本、皆刪
削不完、失其本真。余試郴州日、有明何文簡公後人泰吉、以
公所註孔子家語來上。註簡覈明切、其徵引諸書同異、復極詳

備。其家欲刻是書、然鈔本譌脫至不可句。余惜其功力之徒勤也、許為校訂。至年餘乃粗就緒、而官齋所有之書不多、其所不知、猶闕如也。何公此本、當亦綴緝而成、由其未及見毛氏本故耳。然顏師古註漢書藝文志家語二十七卷云、非今所有家語也。則唐以前、其本業已不同。吾又惡知何公所拠之本之非古邪。公又嘗註大戴禮。問其家、已失之、故不能竝梓以行世。今泰吉唯恐此書之復失墜也、兢兢寶護、唯謹又力。為之表章於世使為人。子孫皆如此、則其先世手沢咸可無散佚之患已。何公序、此書年月不同。今從集作弘治。但註中載有正德年所上疏。故別本有題正德者。然固無妨、序先出也。註所未備、間為補之、并偶附管測於後、与本書不相淆乱。惜乎、何公不作、不獲一就正之、其能無遺憾也哉。

なお、何孟春の文集は罕伝ながら、内閣文庫に次の一本を存する。

燕泉何先生遺藁 一〇卷 明何仲方輯 清何達廷編次 何

泰吉等校 清乾隆二四（一七五九）年刊（何氏世誥軒）

唐大四冊（316 156）

その巻六に収める「孔子家語序」は、本書首の孟春自序と殆ど内容を同じくするが、末には「弘治十有八年乙丑六月之吉甲寅柳陽何孟春謹序」と署され、撰序年紀を異にし（弘治一八年は正徳二年より二年前）文昭重刊序中「何公序、此書年月不同、今從集作弘治」とあるのに符合する。彼此比較するに、先に抄録した部分についてみれば「而不敢以入焉」下に「漫附一二愚得」の六字があり、「分四十四篇為八卷」の「八」を「四」に作り、「他書所記」以下「録為家語外集」までを欠く等、字句少しく増損異同がみとめられる。「燕泉何先生遺藁」の重刊序跋に依れば、その本は孟春六世の孫である惟文が熊辟疆より購得した草書きの写本を、朱伯爵に請うて繕写した鈔本を底本としたものであり、巻六に収める「孔子家語序」を初稿とみ、本書首に冠する自序はそれに手訂を加えた改正定稿と看做すべきものであるう。